
遊戯王-Tales of Life-

黒羽拓夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 - Tales of Life -

【Nコード】

N1942U

【作者名】

黒羽拓夢

【あらすじ】

遊戯王の二次創作です。但し、登場人物は基本的にオリジナルです。今作はフィクションです。実在する人物、団体、企業、事件とは一切関係ありません。ライフが4000と表側守備表示以外はOCG設定。出てくるカードは殆どがオリカです。現在大幅修正中。

P r o l o g u e (前書き)

第001話

はじめ

Prologue

少年は走っていた。

理由はアニメ遊戯王GXに登場する主人公、遊城十代と同じ。

勿論、現実世界に武藤遊戯や、海馬瀬人が存在する筈がないので、遊戯にはぶつかったりしないし、少年の目的地が海馬コーポレーションでもない。

まあ、十代が向かっていた場所も海馬コーポレーションではないが、目的は同じだ。

今、少年は中学3年生。

そして今日は2月。

そう、今日は高校受験の日なのである。

少年の目的地は、麻帆良高等学校。

だが、別に志望校が麻帆良高等学校な訳ではない。

単に、埼玉県ではこの学校で受験が行われる。

それだけに過ぎない。

少年が志望している高校は、北海道にある世界一の決闘校だ。

その学校に入る為に、受験が行われる麻帆良高校に向けて走っている。

だが、小学校から大学まで持つ麻帆良学園の広大な敷地の前に、少年はなかなか辿り着けないでいた。

少年の受験番号は21。

受験内容の実技試験は、受験番号の1番から順番に行われる。つまり、急がなければ不戦敗になってしまうのだ。

30分後。

少年は漸く試験会場に足を踏み入れる。

決闘場では、受験番号20番が決闘をしていた。

受験生「ぐっ……」

試験官「【エメラルドドラゴン】の攻撃！ エメラルドスパーク！」

受験生「ぐああああっ」

受験生

LP 2400

LP 0

受験生「くそっ！ やっぱり人生はクソゲーだっ！」

受験番号20番は敗北した。

勿論、敗北すれば入れない。

勝っても、入れるとは限らないが。

受験生が、座っている席の反対側には試験官の席があり、そこには

??「現在、勝者はなしか……。クズしかいないのか、ここには
これがゆとり教育なのか……」

試験官「でも、だからって勝ちまくられても困りますよ。教諭」

教諭(??)「わざわざ来た意味がない。つまらないな。もう俺は
帰る。だが、折角来たのだから、一回くらいは俺が戦ってやる」

試験官「し、しかし、教諭が決闘すれば、受験生は必ず負けてしま
いますよ!」

教諭「ふん……不運を呪うんだな」

決闘校の教諭の姿もあった。

試験官「……では、21番を呼びますね」

放送で21番が呼ばれる。

さっき走っていた少年の番号だ。

少年は決闘場に入る。

対峙するは、少年が志望する決闘校の教諭。

しかも、実技最高責任者。

恭介（少年）「受験番号21番。“浜田恭介”です。よろしく願
いします」

雅功（教諭）「……同じ名字とは、気に入らないな。……俺は“浜
田雅功”だ」

恭介「……まさか、学園の先生！」

雅功「そうだ」

周りがざわめき始める。

「あ、終わった」とか、「乙」と言った声が聴こえる。

それもそうだ。

世界一の決闘校の教諭で、しかも実技最高責任者。

どう見ても勝ち目はない。

雅功「なに怯えている。俺に勝ったら即合格にしてやる」

恭介「……その言葉、忘れないで下さいよ」

雅功「ああ」

恭介・雅功「決闘!!」

浜田 恭介	浜田 雅功
LP 4000	LP 4000

雅功「先行はくれてやる。決闘において、遊戯王は先行が有利だか

らな」

1ターン目。

恭介「じゃあ、遠慮なく。ドロー！俺は、リバースカードを1枚伏せる。そして、【グロイドドラゴン】を召喚する」

グロイドドラゴン

ATK 1900

恭介「モンスター効果により、1ターンに1度、500ポイントのダメージを与える」

浜田 雅功

LP 4000

LP 3500

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

2ターン目。

雅功「ドロー、魔法カード【二重召喚】。このターン、2回通常召喚できる。俺は、【闇のダブリン】を召喚する」

闇のダブリン

ATK 1500

雅功「このモンスターは、闇属性モンスターのリリースとなるとき、
2体分のリリースとなる」

恭介「なんだと！」

雅功「現れよ！ 【暗黒の闇龍】 ツー！」

暗黒の闇龍

ATK 3000

雅功「さらに、闇属性モンスターをリリースしたことにより、1000ポイントのダメージを与える」

恭介「うう」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3000

雅功「喰らえ。ダークネスフレイムッ！」

恭介「ぐああああっ」

浜田 恭介

LP 3000

LP 1900

雅功「ターンエンドだ」

浜田雅功

手札3枚

3ターン目。

恭介「ドロー、【柊かがみ】を守備表示」

柊かがみ

DEF 1200

雅功「萌えカードだと……。俺はなあ、オタクが嫌いなんだあ！」

恭介「うっ……リバーズカード【かがみんボム】を発動。自分フィールドに存在するカードを1枚に付き、相手に500ポイントのダメージを与える。よって、500ポイントのダメージを与える」

雅功「痛くも痒くもないね」

浜田 雅功

LP 3500

LP 3000

恭介「リバーズカードを1枚伏せてターンエンド」

浜田恭介

手札3枚

4ターン目。

雅功「死ねえ！　ダークネスフレイムッ！！」

恭介「リバーズカード【次元幽閉】！」

だが、リバーズカードは発動しない。

恭介「なっ！」

雅功「ははっ！　残念だが、このモンスターがいる限り、戦闘中に相手は魔法と罫は発動できない！　碎けるッ！！」

恭介「ぐっっ！」

雅功「さらに、このモンスターは守備表示モンスターに攻撃した時、攻撃力が守備力を上回っていれば、その分のダメージを与える！！」

恭介「なっ！」

浜田 恭介

LP 1900

LP 100

雅功「風前の灯火だなあ。次で決めてやるよ。ターンエンド」

浜田雅功

手札4枚

5ターン目。

恭介「くっ……」

恭介は手札を見る。

手札のカードはコレだ。

【融合】

【八神はやて】

【リインフォース？】

雅功「さっさとカードを引けえ！」

恭介「っ！ ……ドローツ！！」

恭介はカードを見る。

恭介「……」

雅功「どうした。ターンエンドか？」

恭介「いや、俺は魔法カード【融合】を発動。手札のはやてとリインを手札融合する」

雅功「融合……だと」

八神はやて リインフォース

ATK 2100

雅功「たった2100で、何ができる」

恭介「なら、先生に教えてやるぜ。オタクにはオタクの居る場所つてのがあるんだ。フィールド魔法【オタクの聖地 秋葉原】発動！」

雅功「なんだと！」

ソリットビジョンが、秋葉原の街を再現する。
勿論、電気の街としてでなく、オタクの聖地として。

恭介「攻撃！ ラグナロク！！」

雅功「馬鹿め！ 返り討ちだあ！」

恭介「甘いぜ先生。このフィールド魔法がある限り、戦闘時に萌えカードの攻撃力が相手より劣る場合、攻撃力を1000ポイントアップする！」

雅功「なん……だと……！」

八神はやて リインフォース

ATK 2100

ATK 3100

恭介「喰らえ！」

雅功「俺の最強の龍が………」

恭介「はやての効果により、破壊したモンスターの攻撃力のダメー

ジを受けて貰うぜ、先生」

雅功「この俺が……」

浜田 雅功

LP 2900

LP 0

周りがざわめく。

ざわ……ざわ……。

恭介「約束、果たして下さいね」

雅功「……」

こうして、恭介の高校生活は始まることになる。

Prologue (後書き)

今回の1枚

八神はやて リインフォース

レベル6 属性闇

ATK 2100 DEF 1700

人間族 / 効果

このモンスターが相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。

Episode 1 - Chapter 1 - (前書き)

第002話

激闘！

青眼の白龍！！

Episode 1 - Chapter 1 -

4月7日。

恭介は北海道にいた。

そう。恭介は、見事世界一の決闘校に入ることができたのだ。

まあ、実技最高責任者の雅功を倒せたのだから当然の結果ともいえる。

合格した恭介は今、決闘校の体育館にいた。

校長の長話が始まる。

校長「どうも。新入生のみなさん。壁陽学園にようこそ」

壁陽学園。

それは、恭介が合格した世界一の決闘校。

校長「今回は、210名の新入生を迎えることができました。上級生の方を合わせると765人になります」

校長の長話は続く。

30分後。

校長「では、最後に先生を紹介します。1人ずつ挨拶を」

最初はあの先生のようにだ。

雅功「浜田雅功だ。1年生の担任を受け持つこととなった。これから3年間で、君たちをプロにしてみせる」

雅功の紹介が終わる。

人志「松本人志」です。俺は3年生を受け持っているので君たちに教えることは少ないと思うが頑張ってくれ」

人志の紹介が終わる。

晋也「上田晋也」だ。2年生を担任しているから、俺も教えることは少ないと思う。だが、教えるときにはちゃんと教えるから安心してな」

晋也の紹介が終わる。

哲平「有田哲平」です。君たちの副担任を受け持つことになったので、よろしくな」

哲平の紹介が終わる。

校長「では、今日は寮で休むといい。授業は明日から始めるので頑張ってくださいね」

校長の話が終わる。

そろそろと新入生が体育館を出る。

恭介も体育館を出た、その時だった。
不意に声をかけられたのだ。

恭介が振り向くと、そこには1人の少年がいた。

少年「君か？雅功を倒したのは？」

恭介「そうだとしたら？」

悠斗（少年）「くくくつ俺は“緑川悠斗”。今日の夜、11時にここで待っている」

そういうと、悠斗は去っていった。

恭介「……………」

少女「あ！恭介じゃん！！」

再び振り返る。

そこにいたのは、少女だった。

桜花（少女）「恭介……………だよな？私だよ、“植田桜花”だよ？」

恭介「桜花……………。ああ！小学校以来だな！」

桜花「うん……………恭介って、小学校の時から決闘者になることを目指してたから、きつとこの学園に入れば、また会えるって……………思っ
……………その……………頑張ったんだ……………」

恭介「……………俺に逢いたかったの？」

桜花「え、あ、うん！勿論だよ！」

恭介「でも、嬉しいよ。知り合いがいてくれて」

桜花「ふえ……。あ……。じゃ、また明日ね！」

桜花は走って行ってしまった。

どうしてだろうか？

そして、時は刻まれ。

現在、23時。

恭介は、体育館にいた。

暗き道に光る部屋。

1人の少年は進む。

1人の少年は待つ。

そして対峙する。

恭介「待たせたな」

悠斗「ああ、待った」

恭介「そうか、だが規定時間に来たから俺のせいではない」

悠斗「さあ、はじめようか」

恭介「ああ、行くぜ！」

恭介・悠斗「決闘！！」

浜田 恭介 緑川 悠斗

LP 4000 LP 4000

1ターン目

恭介「ドロ、俺は【八神はやて】を召喚！」

八神はやて

ATK 2000

恭介「リバースカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

2ターン目

悠斗「お前を倒せば、実技最高責任者の雅功を越えたことになる。

偶然で勝ったんだとしてもな。俺のターン！ドロ、俺は【グラン
ドドラゴン】を召喚する」

グランドドラゴン

ATK 2000

悠斗「リバースカードを1枚伏せターンエンドだ」

緑川悠斗
手札4枚

3ターン目

恭介「ドロー、魔法カード【融合】！」

悠斗「【融合】を引いたか」

八神はやて リンフォース

ATK 2100

恭介「攻撃！」

悠斗「くくくつりバースカード【ヘル・ブラスト】！融合モンスターを破壊する！！！」

恭介「なにい！」

悠斗「はははっ」

恭介「ターンエンド」

浜田恭介
手札3枚

4ターン目

悠斗「ドロー、【グランドドラゴン】をリリースし【エメラルドドラゴン】をアドバンス召喚！」

エメラルドドラゴン

ATK 2400

恭介「くっ……」

悠斗「エメラルドスパーク！」

恭介「リバーズカード【オタクの仲裁】！攻撃を無効にする……！」

悠斗「ターンエンドだ」

緑川悠斗

手札4枚

5ターン目

恭介「ドロー、【柊かがみ】を召喚！」

柊かがみ

ATK 1500

恭介「現われよ【オタクの聖地 秋葉原】！」

悠斗「くっ……」

柊かがみ

ATK 1500

ATK 2500

恭介「攻撃！」

悠斗「ぐっ」

緑川 悠斗

LP 4000

LP 3900

恭介「ターンエンド」

柊かがみ

ATK 2500

ATK 1500

浜田恭介

手札2枚

6ターン目

悠斗「天才たるこの俺にダメージを与えた報いを受けるがいい！ドロ、俺はフィールド魔法【ドラゴンワールド】を発動する！！」

秋葉原が姿を消しドラゴンの住む山脈が姿を現した。

恭介「くっ……」

悠斗「効果によりドラゴン族はリリースなしで召喚できる。現われ

よ！」

青眼の白龍

ATK 3000

恭介「ブルーアイス……」

悠斗「これが俺のデッキ、ブルーアイスデッキだ！」

恭介「……………」

悠斗「いくぞ！滅びのバーストストリーム！！」

恭介「ぐあああああ！」

悠斗「ふ、撃破」

浜田 恭介

LP 4000

LP 2500

悠斗「ターンエンドだ」

緑川悠斗

手札3枚

7ターン目

恭介「っ」

悠斗「早くしろ」

恭介「ドロー、俺は【死者蘇生】を発動！」

八神はやて

ATK 2000

恭介「装備魔法【闇の書】を装備する！」

八神はやて

ATK 2000

ATK 2500

悠斗「ブルーアイズの前には無力だ」

恭介「リバースカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

8ターン目

悠斗「ドロー、いくぞ！バーストストリーム！！」

恭介「リバースカード【守護騎士の守り】！攻撃を無効にする！！」

悠斗「リバースカードを1枚伏せターンエンドだ」

緑川悠斗
手札3枚

9ターン目

恭介「ドロー、はやての効果を発動する。自分のスタンバイフェイズに攻撃を500ポイント上げる」

八神はやて

ATK 2500

ATK 3000

悠斗「ブルーアイズに並んだ、だと」

恭介「魔法カード【マナの恵み】によりカードを3枚ドローする。リバーズカードを1枚伏せ【桂言葉】を召喚！」

桂言葉

ATK 1500

恭介「魔法カード【中に誰もいませんよ】！言葉がフィールドにいる時、相手モンスターを破壊する！！」

悠斗「ぐあっ！ブルーアイズがッ！」

恭介「はやての攻撃！」

悠斗「ぐああああっ！」

緑川 悠斗

LP 3900

LP 900

恭介「言葉のダイレクトアタックだ！俺の勝ちだ！！」

悠斗「くっリバースカード【主の守護神】！攻撃宣言を受けたとき、自分のライフが攻撃モンスターより低い時、墓地からモンスターを1体、特殊召喚できる！！」

青眼の白龍

ATK 3000

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

10ターン目

悠斗「ドロー、くくくっ2体目のブルーアイズ！」

青眼の白龍

ATK 3000

悠斗「さらに魔法カード【同盟世界】！フィールドに同名カードが2体ある時、デッキから同名カードを召喚する！！」

恭介「くっ」

青眼の白龍

ATK 3000

悠斗「はははっ お前の負けだア！」

恭介「ブルーアイス……」

ブルーアイズの瞳が恭介を捉える。

悠斗「砕ける！バーストストリーム！！」

恭介「ぐおおおおっ！」

浜田 恭介

LP 2500

LP 1000

悠斗「はやてを殺せ！バーストストリーム！！」

恭介「ぐあっ」

悠斗「互角だね……。だけど、これでお前のフィールドはがら空きだ！」

恭介「……………」

悠斗「はははっ！バーストストリーム！！」

恭介「リバーズカード発動！【クローン・アタッカー】！！自分のフィールドにモンスターがいない時に攻撃宣言を受けた時、攻撃モンスターと同じクローンモンスターを特殊召喚して反撃する！！」

悠斗「巻き直しが発生しないって事は……………」

恭介「つまり、破壊だ！バーストストリーム！！」

悠斗「ブルーアイズが……………全滅……………」

緑川悠斗

手札2枚

11ターン目

恭介「俺のターン！ドロー、魔法カード【血より再生】！ライフを900払い自分の墓地のモンスターを蘇生！！」

浜田 恭介

LP 1000

LP 1000

恭介「はやてを蘇生！」

八神はやて

ATK 2000

悠斗「俺が……………」

恭介「ダイレクトアタック!!」

悠斗「ありえない……」

緑川 悠斗

LP 900

LP 0

恭介「俺の勝ちだ」

悠斗「そんな……」

勝者は、浜田恭介。

夜に行われた決闘。

この決闘を見ていた者がいた。

少年「……ふっ」

その後、体育館には静寂が支配した。

Episode 1 - Chapter 1 - (後書き)

今回の1枚

八神はやて

レベル4 属性闇

ATK2000 DEE1500

効果

自分のスタンバイフェイズにこのカードの攻撃力を500ポイントアップする

Episode 1 - Chapter 2 - (前書き)

第003話

隣、将棋、屋上にて

Episode 1 - Chapter 2 -

4月8日。

授業が終わり、現在放課後である。

恭介は光輝と将棋を打っていた。

恭介「王手、飛車取り」

光輝「くっ……」

恭介が何で将棋を打っているかといえば、理由は簡単だ。

昼食の時、桜花と一緒に食べていた時、隣にいた。

ただ、それだけである。

そして、話しをすると、互いに将棋が好きだということが分かり、放課後に打つ約束をしていたのだ。

ついでに、恭介と光輝が将棋を打っているのは和室である。

流石、世界一の決闘校。

将棋室、囲碁室、茶室としてそれぞれ和室が存在していたのである。

光輝「くっ…… “大野光輝”……ここに敗れるとは……」

恭介「でも、強いね。久しぶりにいい汗をかいたよ。三段の腕を持つこの俺にここまでやるなんて。ぶっちゃけ、もし後攻だったら負

けてた」

光輝「いや、負けは負けだ。……だが、次は勝つからな」

恭介「ああ、いつでも受けて立つぜ」

光輝「…じゃあ、また明日な」

光輝は和室を出ていった。

その後、廊下に出た恭介は目の前から、茶髪でショートヘアでヘアピンを×して付けている少女、桜花に捕まった。

分かりやすく言うのなら、まあ、この例えもマニアックだが。

アニメ、リリカルなのはに登場する八神はやて見たいな髪の毛だと思ってもらいたい。

桜花「やっと見つけたあ！もう！一体何処に行ってたの？私に連絡もなしに」

恭介「将棋だよ。ほら、昼食のときに隣にいた光輝と一緒に将棋を打っていたんだよ」

桜花「私より……将棋が大事なんだ……」

恭介「え？いきなりどうしたんだよ。別に予定もなかったじゃないか」

桜花「……そうだね。ごめんね。私がどうかしてたよ。じゃ、またあとでね」

桜花は去っていった。

そして、恭介は気分転換にと屋上に来ていた。ただ、外の空気を吸おうとしただけ。

だが、そこには先客がいた。

あの子は確か、恭介と同じ1年生の“釘宮優希”だったはずだ。

別に居ても不思議ではない。

優希「あ……」

恭介「……………」

そう、ロングヘアーで頭の上にリボンを乗せているか弱そうな彼女の手に持っているものが問題だった。

因みにまたまたマニアックだが、優希の見た目は、生徒会の一存の椎名真冬だと思っただけならいい。

話しを戻すが、その優希の手に持っているもの。まだ、身体に有害な煙を出し続けているそれは、紛れもなく煙草にみえた。

優希「い…言わないでお願いです」

優希がすぎるような目をお願いしてくる。

もしもこれがゲームなら、どちらの方が好感度あがるのだろうか？

やっぱり、言わない方がな。そしたらルート確定。
まあ、ゲームならば。

優希「お、お願いしますです」

恭介「……決闘しようぜ」

優希「え……？」

恭介「ここは決闘者の学園。もし、君が俺に勝ったんなら、黙ってやるぜ」

優希「ほ、本当ですか？」

優希が疑うような目で見てくる。

恭介「男に二言はねえよ。知ってるか？東京より、埼玉の方が面積が広いんだぜ。そして心も！」

優希「は、はいなのです！」

こうして、屋上で煙草の隠蔽を賭けて決闘することとなった。

恭介「……………」

優希「……………」

恭介・優希「決闘！！」

浜田 恭介 釘宮 優希

LP 4000 LP 4000

1ターン目

優希「先行は貰いますのです。ドロー、魔法カード【トラウマのフリーズ】を發動しますです。次のターン、相手はドロー出来ないのです」

恭介「なん…だと…?」

優希「そして、【アイスガール】を召喚しますのです」

アイスガール

ATK 1600

優希「ターンエンドなのです」

釘宮優希

手札4枚

2ターン目

恭介「ドロー…は出来ないんだっ たな」

優希「はいです」

恭介「【高町なのは】を召喚する」

高町なのは

ATK 2000

恭介「デイベインバスター！」

優希「きゃあ」

釘宮 優希

LP 4000

LP 3600

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

3ターン目

優希「ドロロー、優希はリバーズカードを1枚伏せますので。そして、【アイスニードル】を召喚しますのです」

アイスニードル

ATK 1700

優希「魔法カード【努力値】を発動しますのです。選択したモンスター1体は、レベル×300ポイント攻撃力をアップしますのです。優希は自分のモンスターを選択するのです」

恭介「そのモンスターのレベルは4……」

アイスニードル

ATK 1700

ATK 2900

優希「ニードルアロー！」

恭介「なのはが、敗れるとは……………」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3100

優希「ターンエンドなのです」

釘宮優希

手札2枚

4ターン目

恭介「初ドロー、俺は【長門有希】を召喚する」

長門有希

ATK 2000

優希「させません！リバースカード【アイスブレイク】！！召喚されたモンスターを破壊しますのですっ！！」

恭介「有希の効果発動、罨カードの発動と効果を無効にし破壊する」

優希「エ……」

恭介「さらに、装備魔法【萌剣オタクソード】を装備！攻撃力を1000ポイントアップする！！」

長門有希

ATK 2000

ATK 3000

優希「超えられた……です」

アイスニードル

ATK 2900

恭介「攻撃！」

優希「きゃあああっ」

釘宮 優希

LP 3600

LP 3500

恭介「リバースカードを1枚伏せターンエンドだ」

浜田恭介

手札2枚

5ターン目

優希「ドローです。k t k r」

恭介「……………」

優希「魔法カード【氷結儀式】を発動しますのです。手札のレベル8以上モンスターを墓地に送り、現れるのです!!」

恭介「な……………」

優希のフィールドに、氷の龍が現れた。

氷結の激龍

ATK 3000

優希「召喚時、フィールドに存在するこのカード以外のモンスターをすべて破壊するのです」

恭介「なに!!」

優希「これで、フィールドはがら空きなのです。ダイレクトアタックです!!」

恭介「リバーズカード【収縮】!このターンのみ攻撃力を半分にする!!」

氷結の激龍

ATK 3000

ATK 1500

優希「砕ける、なのです」

恭介「ぐあっあああっ!!」

浜田 恭介

LP 3100

LP 1600

優希「エンドなのです」

氷結の激龍

ATK 1500

ATK 3000

釘宮優希
手札0枚

6ターン目

恭介「ドロー、くっ……どっすねば……」

優希「aggarksなのです」

恭介「くっ……【立華奏】を召喚する」

立華奏

DEF 2000

恭介「奏の効果発動。1ターンに1度、カードをドローできる。よってドローする。これでターンエンドだ」

浜田恭介

手札3枚

7ターン目

優希「w k t k ……ドロー、攻撃なのです」

恭介「奏は戦闘では破壊されない」

優希「ならば、魔法カード【氷漬け】を発動しますのです。選択したモンスターを氷漬けにしますのです。優希は奏を選択しますのです」

奏が氷漬けとなる。

恭介「目の保養にするなよ」

優希「なめ回して見ている人に言われたくないのです」

恭介「ば、そんなことしてねえよ!」

優希「…ターンエンドなのです」

釘宮優希

手札0枚

8 ターン目

恭介「…………ドローツ！」

優希「スタンバイフェイズ時に氷漬けとなった奏はバラバラに砕けてしまうのです」

恭介「くっ…………破壊されてしまったか」

優希「破壊したとき、500ポイントのダメージを与えて、自分のライフを500ポイント回復しますです」

浜田 恭介 釘宮 優希 LP 1600 LP 3500

LP 1100 LP 4000

優希「優希は勝ちます」

恭介「どうかな？」

優希「え？」

恭介「逆転のピースは全部揃ったぜ！」

優希「!!!!!!」

恭介「速攻魔法【血より再生】により、ライフを900払い、墓地のモンスターを蘇生する」

浜田 恭介

LP 1100

LP 200

恭介「なのはを蘇生！」

高町なのは

ATK 2000

恭介「魔法カード【スターライトブレイカー】！自分フィールドになのはが存在するとき、手札1枚をコストに相手フィールドのカードをすべて除外する！！」

優希「そんな……」

恭介「喰らえ！スターライトブレイカー！！」

優希「あああああっ！！」

優希のフィールドが、がら空きになった。

恭介「さらに、【星光の殲滅者】を通常召喚！」

星光の殲滅者

ATK 2000

優希「そんな……あ……」

恭介「ダイレクトアタック！ダブルブレイカー！！」

優希「きゃあああああああああああっ！！！！」

釘宮 優希

LP 4000

LP 0

恭介「俺の勝ちだ」

優希「い…言わないで……」

恭介「なんのことだ？」

優希「え？」

恭介「俺は何も知らないぞ。じゃ、また明日、教室でな」

恭介は屋上を去っていく。

優希「あ……………」

優希は、恭介の背中に向けて、「ありがとうございます」と呟いた。

Episode 1 - Chapter 2 - (後書き)

今回の1枚

立華奏

レベル4 属性光

ATK2000 DEE2000

効果

このカードは戦闘では破壊されない。1ターンに1度カードを1枚ドロウできる。このカードが戦闘したことによって相手に発生する戦闘ダメージは0になる

Episode 1 - Chapter 3 - (前書き)

第004話

アイドルと機械と星光たん

Episode 1 - Chapter 3 -

4月9日。

今日は土曜日。

昔なら午前授業があつたし、現在でもエロゲーなどのゲームの世界なら存在するが、現実世界の現在は休みである。

まあ、寮生活であるため、学園にいること自体は変わらないが。

恭介は自分の部屋でパソコンを立ち上げていた。

そういえば、外国人にパソコンって言っても通じないらしい。

恭介「……………」

カチカチとクリックする音になる。

予め表記しておくが、恭介はエロ画像もエロ動画も見っていない。

ニコニコ動画を見ているだけである。

恭介「お！うpされてる。見ないと」

こうして、彼の1日は終わった。

4月10日。

今日は日曜日だ。

勿論、学園は休み。

ただ、学園自体は開いているため、入ることも出来るし、決闘場で決闘も可能である。

恭介は入っていないが、いろんな部活あり、部活動も活発な為、ずっとパソコンを弄ってノートみたいに1日を過ごした恭介みたいな奴は少ないだろう。

だが、昨日とは違う。

今日の恭介は外にいた。そう外にいたのである。

大事なことなので2回いいました。

ただ、外にいるという表記には語弊がある。

まあ、推理小説なんかだといいいロジックになりそうだが。

そう、外にいるといっても自室の外という意味で、学内にいる。

恭介は、桜花と光輝。それから、偶然出会った優希と一緒に食堂で、昼食を食べているのである。

恭介「優希のソレ、激辛麻婆豆腐じゃね」

優希「は、はい。そうです」

光輝「辛いのが好きなんだ」

優希「はい、好きです」

恭介「桜花は辛いのが苦手だったよな？昔、カレーで泣いてたし」

桜花「ちょー！いつの話をしてるのよー！」

優希「…仲、いいですね」

恭介「そう？」

優希「はい」

光輝「なあ。アレ、アイドルの結愛じゃね？」

恭介「え？」

恭介たちは光輝が指差した方に顔を向ける。

そこには、確かに人気アイドルの“佐倉結愛”がいた。

恭介「ヤベエ！本物だ！」

優希「同じ1年生じゃないですか。知らなかったんですか？」

恭介「そりゃ、210人もいる教室の中から見付けるといわれても無理だつて」

光輝「それもそうだな。オーイ！」

光輝が結愛に向かって手を振る。

それに気付いた結愛は、恭介たちのいる席に向かってきた。

恭介「やべえ。ドキドキがとまらねえ」

桜花「……………」

結愛「…何か」

光輝「いや、よかつたら一緒に食べようぜ」

結愛「……………」

その時、食堂のテレビに結愛が映った。

結愛『全国のおにいちゃん。こんにちは〜』

恭介「やべえ、鼻血出そう」

結愛『今日はあ、みんなに悲しいお知らせがあるんだ……………実はゆあゆあは、今日でアイドルを休業するんだあ……………』

結愛「2週間前に録った最後の番組ですね……………」

恭介「やべえ、失神しそう」

桜花「……………永遠にさせてあげようか……………？」

結愛『実はあ、ゆあゆあは北海道に行くんだ〜。高校では学問に力を注ぐためにごめんね……………』

光輝「休業してこの学園に入ったということですね」

結愛「そういうことだね」

結愛『だから最後は、みんな大好き 世界中で10億人以上がやっている決闘をするよ』

恭介「やべえ、キャラが崩壊してるよ……クールキャラで逝きたかったのに……」

優希「死んじゃってます」

結愛『おにいちゃんたちいっしょ応援よろしくね』

テレビの中の結愛がウィンクして決闘が始まる。

テレビの画面上にライフが表示される。

LP	LP
4000	4000

その後、決闘は一進一退の攻防が続き、かなり見応えのある決闘が続く。

結愛『くぅ……』

テレビ画面の結愛が悔しそうな表情を見せる。

光輝「凄いいい決闘だね」

結愛「そりゃあ、台本があるからね」

光輝「台本？じゃ、この悔しそうな表情は？」

結愛「演技だよ。すべて作り物。作ってるだけ」

桜花「じゃあ、決闘の結果も？」

結愛「私の勝ち。デッキも、使うカードの順番も決まっている」

光輝「じゃあ、決闘してもつまらなくね？」

結愛「テレビなんてそんなものだよ。ドッキリだって、本当は知ってるもん。ただ、知らない演技をしているだけ」

そんな話をしているうちにテレビの中では結愛が、勝利していた。

恭介「じゃあ、俺と決闘しようぜ！やらせなしの本気の勝負をさ」

結愛「…やめとく。じゃあ」

そういうと、結愛は去っていった。

優希「なんか、テレビの中と別人みたいです」

桜花「アイドルなんてそんなものでしょ」

光輝「恭介。俺と決闘するか？お前とは将棋はしたが、決闘はしてなかったからな」

恭介「おお良いぜ！」

食事が終わり、恭介たちは決闘場にいた。

桜花は決闘場の観覧席で恭介を見ている。

優希も、特に用事はないらしいので桜花の隣で一緒に恭介たちの決闘を見ている。

光輝「将棋じゃあ、負けちまったからな。決闘は負けないうぜ」

恭介「決闘も勝つぜ！」

恭介・光輝「決闘！！」

浜田 恭介 大野 光輝

LP 4000 LP 4000

1ターン目

光輝「先行は頂く！ドロー、俺は【ロボットキャノン】を守備表示で出す」

ロボットキャノン

DEF 1400

光輝「リバーズカードを2枚伏せターンエンド」

大野光輝
手札3枚

2ター目

恭介「ドロー、今日はあのゆあゆあと会話したんだからな。ポルテ
ージマックスだぜ！」

桜花「ゆあゆあって、そんなに人気なの？」

優希「うん。トップアイドルなのです。愛称のゆあゆあは、去年流行語大賞になりましたのです。因みに、ネット界でも流行語大賞に輝いたのです。ある某サイトの書き込みにも、『今まで二次元しか愛せなかったが、初めてリアル少女に萌えた』という書き込みがあり、共感を得ているのです。他にも『ゆあゆあマジ天使』や『初めてAKBが好きな人の気持ちがあった』などのコメもあります。なので、休業と先程のテレビを見て、スレは暫く過疎しないと思いますです」

桜花「へえ、凄いんだ」

恭介「俺は【三千院ナギ】を召喚する」

疑問なんだが、金持ちのキャラクターの名字って、『院』や『条』とかよく付くよね。

三千院ナギ

ATK 1000

恭介「ナギにはハヤテが付き従う」

綾崎ハヤテ

ATK 2000

光輝「いきなり2体か」

恭介「ナギが召喚されたとき、ハヤテを手札、デッキから特殊召喚できる。いくぞ！ハヤテの攻撃！」

光輝「破壊されたとき、相手に800ポイントのダメージを与える」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3200

恭介「ナギのダイレクトアタック！」

光輝「ぐあっ」

大野 光輝

LP 4000

LP 3000

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札3枚

3ターン目

光輝「ドロー、【アンテイクドラゴン】を召喚！」

アンテイクドラゴン

ATK 1900

光輝「さらに、リバーズカード【リサイクル】。墓地の機械族1体を自分フィールドの機械族に装備。攻撃力を【ロボットキャノン】の攻撃力の半分、700ポイントをプラスする」

アンテイクドラゴン

ATK 1900

ATK 2600

光輝「ナギに攻撃！ギガバースト！！」

恭介「ぐああっ！」

浜田 恭介

LP 3200

LP 2600

光輝「なにっ!？」

恭介「ナギが攻撃対象となったとき、攻撃対象をハヤテに替える」

光輝「ターンエンド」

大野光輝

手札3枚

4ターン目

恭介「ドロー、俺はナギをリリースし【金色の闇】を召喚する」

金色の闇

ATK 2400

恭介「ヤミの効果発動！手札1枚を捨てる度に、攻撃力を2000ポイントアップする。俺は3枚すべてを墓地に送り、600ポイントアップする！」

金色の闇

ATK 2400

ATK 3000

光輝「3000………」

恭介「攻撃！」

光輝「ぐうづづづ………」

大野 光輝

LP 3000

LP 2700

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

5ターン目

光輝「ドロー、ヤミか……。確かに強敵だ……。だが、魔法カード【たいやき】を発動。ヤミの攻撃力は1000ポイントダウンする」

恭介「なっ……。！」

金色の闇

ATK 3000

ATK 2000

光輝「魔法カード【違法技術】を発動。ライフを半分払い、このターンリリースが要らなくなる」

大野 光輝

LP 2700

LP 1350

光輝「現れよ！【古代の魔機械暴走竜】！」

古代の魔機械暴走竜

ATK 3000

光輝「モンスター効果発動！手札を1枚墓地に送ることで、リバー
スカード1枚を破壊する！」

恭介「リバースカード【マテリアル】が破壊されたとき、デッキか
らマテリアルを1体特殊召喚する！」

光輝「なっ！」

恭介「【星光の殲滅者】を特殊召喚！」

星光の殲滅者

ATK 2000

光輝「チツ……だが、碎けるヤミ！デスフレイム！」

恭介「ぐああああっ！」

浜田 恭介

LP 2600

LP 1600

光輝「ターンエンド」

大野光輝

手札0枚

6ターン目

恭介「ドロー、行くぜ！攻撃！ルシフェリオンブレイカー！！」

光輝「なにっ！攻撃力2000で3000のモンスターに攻撃する
というのか！！」

恭介「このモンスターは攻撃時、攻撃力を1000ポイント上げる
！！」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

光輝「同滅狙いかっ！」

桜花「互角……」

優希「でも……」

光輝「俺のモンスターは破壊された。なのに、なんでお前のモンス
ターは死なないんだ？」

恭介「このモンスターは、1ターンに1度戦闘では破壊されない」

光輝「くっ……だが、リバースカード【古代科学の結集】！機械族
モンスターが破壊されたとき、攻撃力を500ポイント上げて特殊
召喚する！！」

古代の魔機械暴走竜

ATK 3500

恭介「くっ……リバースカードを1枚伏せターンエンドだ」

浜田恭介

手札0枚

7ターン目

光輝「ドローツ！」

ドローカードは、【ロボット剣士】。

光輝「……………」

光輝は悩んでいた。

【ロボット剣士】の攻撃力は、2100。
2体の攻撃が決まれば勝てる。

だが、リバースカード！

そう、リバースカードが曲者である。

もしも、【魔法の筒】とかなら負けてしまう。

光輝「…………俺は手札をコストにリバースカードを破壊する！」

恭介「ふっ……………」

光輝「なっ……」

リバーズカードは、【メテオストライク】。
貫通ダメージを与える装備魔法。

つまりブラフ！

光輝「チッ……攻撃！デスフレイム!!」

恭介「星光さんは破壊されない！」

光輝「でも超過ダメージは受けてもらう！」

恭介「がっ……！」

浜田 恭介

LP 1600

LP 1000

光輝「このターンは逃したが、次のターンで俺の勝ちだ!!」

大野光輝

手札0枚

8ターン目

恭介「（守備にすれば、このターンは防げる。だが、それでは勝てない）」

桜花「恭介……」

恭介「ドローツ！」

光輝「風が……」

恭介「魔法カード【ルシフェリオンプレイカー】！自分フィールドに星光たんがいるとき、相手フィールドのカードをすべて除外する！！」

光輝「ななななっ！」

恭介「すべて滅せよ！」

光輝「くう……！！」

恭介「集え明星。全てを焼き消す焰となれ！ルシフェリオンプレイカー！！」

光輝「うわああああああああああっ！！」

大野 光輝

LP 1350

LP 0

光輝「決闘でも、負けてしまつとはな……」

恭介「いや、強かったよ。マジで」

決闘場入り口。

少年「……なのはカードか……。チート過ぎだろ。だが、勝つのは俺だ……くくくっ……………」

そう呟くと少年は決闘場に背を向けた。

Episode 1 - Chapter 3 - (後書き)

今回の1枚

星光の殲滅者

レベル4 属性闇

ATK2000 DEE2000

効果

1ターンに1度戦闘では破壊されない。魔法・罨・モンスター効果で破壊されない。攻撃時攻撃力を1000ポイントアップする。このカードが破壊されたときこのカードを除外する

Episode 1 - Chapter 4 - (前書き)

第005話

ネコ声優

Episode 1 - Chapter 4 -

4月11日。

今日は月曜日。

また、授業が始まる曜日だ。

今日は、趣味の作詞を携帯に打っていたが、先生が来たので、携帯を閉じた。

雅功「さつさと席に着けえ。授業を始める」

決闘に関する授業が始まる。

今日の授業は、調整中の話だった。

数時間後。

授業が終わり、恭介たちも教室を出る。

恭介「ん？」

廊下に、雅功先生と人志先生がいた。

雅功「……邪魔だ」

人志「それはこっちの台詞だ。横に避けて貰えないか？」

雅功「なぜ俺が。避けるのはテメエの方だろうか」

光輝が小声で恭介たちに話す。

光輝「なんかギスギスしてるね。仲悪いのかな？」

恭介「さあな。まあ、見た感じは悪そうだが」

優希「……………」

桜花「まあ、私たちには関係ないじゃん。さ、食堂いこ？」

恭介「ああ、そうだな」

恭介たちは、食堂で昼食をとる。

そして、午後の授業を終え、放課後になる。

恭介たちは、演劇部にいた。

勿論、恭介たちは部活には入っていない。

というか、まだ入れない。

1年生が正式に部活に入れるのは、5月からなのだ。

ただ、体験入部など是可以。

どこの部活も、部員確保に必死だ。

でも、部員には残念だが、恭介たちは演劇部に入るつもりはない。

体験入部してる恭介たちと同じ1年生の少女が目的である。

恭介「あの子か？」

優希「リアルキタ（。。（。！！）」

光輝「あの子が香菜？」

優希「はいです！あの声は間違いありません！人気声優の“竹達香菜”に間違いありませんです！」

香菜は台本を持って、演劇をしている。

香菜「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になったのよっ！」

演劇部長「流石だね。流石の演技力だよ」

香菜「ありがとうございます」

演劇部長「君が入ってくれと、こちらとしても嬉しい限りだよ」

優希「あ、あのっ！すいませんですっ！」

香菜がこちらに振り向く。

香菜「…はい。そうですが？」

優希「アニメ声で何か台詞言って下さいですっ！」

香菜「え……めんど……それはテレビでね」

優希「シヨボーン(、・、・)」

桜花「邪魔になるわ。そろそろ出ましようよ」

恭介「そうだな。残念だが、仕方ない」

優希「どうしても！一言だけ！……でも、ダメですか？」

香菜「だからめんど……んんっ……ゴメンね。アニメで聞いてね」

優希「ガツカリです……」

恭介「なあ、決闘しようぜ！」

香菜「はあ!？」

恭介「体験入部は終わりだろ？」

演劇部長「ええ、まあ」

恭介「そして、俺が勝ったら聞かせてくれよ」

香菜「……いいですよ。貴方は有名ですし。倒したら、箔が付きます」

優希「あ……優希のために……?」

恭介「それもあるが、なにより、俺が聞きたいんだ」

決闘場。

観客席には、光輝と桜花と優希が座っている。

恭介の目の前に立つのは、人気声優の竹達香菜。

恭介「準備はいいか？」

香菜「言われるまでもないわ」

2人はデュエルディスクを構える。

恭介・香菜「決闘！！」

浜田 恭介 竹達 香菜

LP 4000 LP 4000

1ターン目

恭介「ドロー、俺はリバーズカードを1枚伏せる。そして、【涼宮ハルヒ】を召喚する！」

涼宮ハルヒ

ATK 2000

恭介「ハルヒの効果発動！このカードは1ターン目から攻撃ができる」

香菜「1ターン目からっ!？」

恭介「ダイレクトアタック！」

香菜「きゃあああっ！やってくれるじゃないっ！！」

竹達 香菜

LP 4000

LP 2000

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

2ターン目

香菜「ドロー、あたしは【キヤット剣士】を召喚！」

キヤット剣士

ATK 1800

香菜「さらに、【キヤット腰巾着】を特殊召喚！」

キヤット腰巾着

ATK 1000

香菜「このモンスターは、自分フィールドにキヤットと名の付くモンスターがいるとき、特殊召喚ができるのよ」

恭介「2体……だが、攻撃力はハルヒの方が上！」

香菜「魔法カード【猫招き】！相手モンスター1体を選択し、選択したモンスターと自分フィールドのキャットと名の付くモンスター1体を除外する。あたしは、ハルヒと腰巾着を除外するわ！」

恭介「ハルヒがっ！」

香菜「ダイレクトアタックッ！」

恭介「リバーズカード【オタクの仲裁】！攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させるー！」

香菜「速攻魔法【キャットビンク】！相手の魔法カードの発動を無効にし破壊するー！」

恭介「なあっ！」

香菜「よって続行！くたばれー！」

恭介「がはっ……！」

浜田 恭介

LP 4000

LP 2200

香菜「ターンエンド」

竹達香菜

手札2枚

3ターン目

恭介「ドロー、魔法カード【地割れ】！相手フィールドに存在する1番攻撃力が低いモンスターを破壊する！！」

香菜「断念だったね！このカードは、対象を必要としないカード効果で破壊されない！」

恭介「なら、俺は【桂ヒナギク】を召喚！」

桂ヒナギク

ATK 1900

恭介「攻撃！」

香菜「たかが、1000程度……」

恭介「残念だったな。1000じゃないんだ」

香菜「えっ!？」

桂ヒナギク

ATK 1900

ATK 2900

香菜「攻撃力が！」

恭介「ヒナギクは、モンスターに攻撃するとき、攻撃力を1000ポイントアップする！」

香菜「きゃあああっ！」

竹達 香菜

LP 2000

LP 900

桂ヒナギク

ATK 2900

ATK 1900

恭介「リバーズカードを1枚伏せる。これでターンエンドだ」

浜田恭介

手札2枚

4ターン目

香菜「あたしは負けない。ドロー、あたしは【死者蘇生】を発動！

【キヤット剣士】を蘇生！」

キヤット剣士

ATK 1800

香菜「そして、【キヤット剣士】をリリースして、アドバンス召喚！」

十千葉の墮天聖黒猫十

ATK 2500

恭介「2500……」

香菜「さらに、【ツンデレキャット】を特殊召喚！」

ツンデレキャット

ATK 1200

香菜「このモンスターは、アドバンス召喚に成功したとき、特殊召喚できる」

恭介「くっ……」

桜花「…ちばのだてんせい？」

香菜「ちばではない！せんようと読むのよ！」

優希「厨二病ですう」

桜花「それは痛いね」

香菜「あたしは痛くないわ。勘違いしないで。喰らいなさい。黒猫の攻撃！エターナルフォースブリザード！」

恭介「ヒナギク……」

ヒナギクが破壊される。

浜田 恭介

LP 2200

LP 1600

香菜「ダイレクトアタックッ！」

恭介「があっ！」

浜田 恭介

LP 1600

LP 400

香菜「これでライフポイントは逆転したわ」

恭介「っ……っ！」

浜田 恭介 竹達 香菜

LP 400 LP 900

香菜「黒猫の効果発動！自分フィールドに存在するキャットと名の付くモンスターを墓地に送り、もう1度攻撃ができる」

恭介「！！！！！」

桜花「そんな……っ！」

光輝「ってことは！」

香菜「そう。このターンで終わりよ」

恭介「くっ」

香菜「ダイレクトアタック!!」

黒猫が恭介に攻撃を仕掛ける。

桜花「恭介ッ!!」

香菜「勝った!」

恭介「それはどうかな?」

香菜「え!?!」

浜田 恭介

LP 400

LP 200

香菜「どうして……………」

恭介「俺はお前の攻撃宣言時、このリバーズカードを発動していた!」

香菜「それは……………」

恭介「罨カード【マテリアル・シールド】!ダイレクトアタックを受けて、ライフが0になるとき、ライフを半分にしてダメージを0にする。その後、デッキにあるマテリアルカードを1枚手札に加え

る！！」

香菜「だけど、次のターンにあたしが勝つことには変わりないわ！
ターンエンドよ！」

竹達香菜

手札0枚

5ターン目

恭介「このターンで決める。ドロー、俺は星光たんを召喚する！」

香菜「…キモ」

星光の殲滅者

ATK 2000

恭介「魔法カード【ルシオンブレイカー】！デッキの上から
3枚も墓地に送り発動！相手フィールドのモンスターをすべて除外
する！！」

香菜「黒猫がッ！」

黒猫は、塵も残らずフィールドから消えた。

恭介「これで終わりだ！集え明星。全てを焼き消す焰となれ！ルシ
オンブレイカー！」

香菜「きゃああああああああああっ！！」

竹達 香菜

LP 900

LP 0

香菜「ま、負けた……」

恭介「約束だぜ」

香菜「……言えはいいでしょ！言えばっ！」

優希「あ…あの台詞を言って欲しいのですっ」

優希が香菜に台詞を伝える。

香菜「分かったわ。だけど1回きりなんだからねっ！」

恭介「ああ」

香菜「……………」

香菜が台詞を喋る。

香菜「ニコニコ動画に投稿するために、ネコ耳とシツポをつけてウツウツ〜ウマウマを踊っているところを妹に目撃されたときがそうね。……フ、あときは、さすがの私もあせったわ」

優希「か、感激ですっ」

優希は感激していた。

恭介「ありがとな。やってくれて」

香菜「別に、負けたからやっただけよ」

恭介「でも、いきなり押し付けたのはこっちだ。だから、ありがとな」

香菜「か、勘違いしないでよねっ！あくまでも負けたからよ！いわば罰よ、罰！お礼なんか言われても……まあ、少しは嬉しいけど……嬉しくないんだからねっ！！」

そう言うと、香菜は顔を赤くして決闘場を駆け足で去っていった。

決闘場では、優希がまだ感激していた。

Episode 1 - Chapter 4 - (後書き)

今回の1枚

桂ヒナギク

レベル4 属性地

ATK1900 DEE1500

効果

相手モンスターへ攻撃するとき、ダメージステップ時のみ攻撃力を1000ポイントアップする

Episode 1 - Chapter 5 - (前書き)

第006話

激突！

なのはVSテイルズ！！

Episode 1 - Chapter 5 -

数日前。

少年「…本当ですか？」

雅功「本当だ。憎き恭介を決闘で倒したなら、お前のプロの道を確認させてやる」

少年「分かりました」

雅功「だが、噂では恭介は、悠斗を破っているらしい。勿論、噂だかな」

少年「その決闘なら、見ましたよ。敗れましたね、ブルーアイズデッキの悠斗は。恭介のオタクデッキに」

雅功「だが、お前なら勝てると思っている。実技試験1位のお前なら。試験官を1ターンキルした、お前ならばな」

4月12日。

今日は火曜日。

そして今は放課後。

恭介たちは、決闘場にいた。

だが、優希は用事があるとかで来ていない。

だから、来ているのは、恭介と対戦者を除けば、光輝と桜花だけである。

恭介「お前か？俺を呼んだのは？」

そう。恭介は、机に置いてあった手紙に誘われて来たのだ。

拓夢（少年）「ああ。“黒羽拓夢”だ。お前の決闘は度々見ていた。正直、強いと思うよ」

恭介「ありがとう」

拓夢「だが……」

拓夢は、黒い髪によくあっている黒色の眼鏡のズレを直す。

拓夢「勝つのは俺だ」

恭介「ずいぶんと凄い自信だな」

拓夢「確かに、恭介。お前のオタクカード。特になのは系カードはチート並みに強い。それで、実技最高責任者の浜田雅功を倒したのだからな」

恭介「……………」

雅功「だが、例え緑川財閥の悠斗を倒しても、イジメられている優希を倒しても、あの金髪の光輝を倒しても、人気声優の香菜を倒したとしても、俺には無力だ」

光輝「え……?」

桜花「マジ?」

今、拓夢が言ったある言葉に恭介たちは引っ掛かった。

そう、『イジメられている優希』と言う言葉に。

恭介「優希は苛められているのか?」

拓夢「何だ、知らなかったのか? てっきり、知っていて仲良くして
ると思っていたが」

光輝「そんなわけないだろっ!」

桜花「そうよっ!」

拓夢「まあ、それならそれでもいい。俺には関係ないことだ」

恭介「光輝、桜花、優希と探しに行ってくれ。もしかしたら……」

光輝「分かった」

桜花「任しといて!」

光輝と桜花は、決闘場を後にする。

拓夢「イジメられているから、ストレスが溜まる。その発散が趣味だ。だが、その趣味がイジメられている原因。だから、趣味ではストレスを抑えられない。でも、趣味をやめられない。だから、優希

は煙草に手を出した。いや、煙草で良かったんじゃないか？高校生で煙草なんて普通だ。麻薬に行かなかっただけ、優希はマシとも言える」

恭介「なんで、お前は知っていたんだろ？優希が苛められているのを！？なんで止めないんだよッ！！」

拓夢「さっき言っただろ？俺には関係ないことだ」

恭介「…酷いなお前」

拓夢「酷い？俺はてつきり、知っていて仲良くしてると思っていただけ、君たちが酷いと思っていたよ。心の中で嘲笑ってるんだなってさ」

恭介「そんなことないッ！優希は友達だッ！！その心に嘘偽りはないッ！！」

拓夢「そうか……………」

拓夢は、デュエルディスクをセットする。

拓夢「でも、俺には関係ない。俺に関係あることは今は恭介、お前を倒すこと。ただ、それだけだ」

恭介「俺を倒すだと？人がイジメられているのに何もしないお前になんか負けるものか！」

恭介もデュエルディスクをセットする。

拓夢「フフフ……俺は勝ち、プロとして大成功をおさめる。その為にも、君には俺の糧になってもらうよ」

恭介「出来るものなら、やってみろ！」

拓夢・恭介「決闘!!」

浜田 恭介 黒羽 拓夢
LP 4000 LP 4000

1ターン目

恭介「ドロー！俺は【桂ヒナギク】を召喚!!」

桂ヒナギク

ATK 1900

恭介「リバーズカードを2枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札3枚

2ターン目

拓夢「見せてやる。俺の実力を。天と地、月と鼈のさをな。ドロー、俺は【ドロワット】を召喚する」

ドロワット

ATK 2000

拓夢「モンスター効果発動。召喚時、手札、デッキに存在する【ゴ
ーシュ】を特殊召喚できる。デッキから特殊召喚！」

ゴーシュ

ATK 2000

恭介「いきなり、攻撃力2000が2体だと！」

拓夢「それだけではない。魔法カード【衝破十字】！自分フイ
ールドに【ゴーシュ】と【ドロワット】がいるとき、相手フイールド
に存在するモンスターをすべて破壊する！！！」

2人の必殺技が、ヒナギクの身体を4つに分ける。

血を出し、倒れるヒナギク。

恭介「くっ」

拓夢「ファイナレだ。マミるがいい！ダイレクトアタック！！」

恭介「マミるかよ！お前を粉々にしてやんよ！リバーズカード【ネ
ギブレード】！ダイレクトアタックを無効にする！！！」

ネギが2人の剣を受け止める。

拓夢「ちっ……ターンエンドだ」

黒羽拓夢

手札3枚

3ターン目

恭介「ドロー、俺は【桜咲刹那】を召喚！」

桜咲刹那

ATK 2000

恭介「モンスター効果、1ターンに1度、フィールドのカードを1枚破壊できる。俺は【ドロワット】を破壊する！」

拓夢「やるな……」

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札3枚

4ターン目

拓夢「ドロー、【アリス】を召喚する」

アリス

ATK 2000

拓夢「召喚時、【デクス】を、デッキまたは手札から特殊召喚できる。俺はデッキより特殊召喚する」

デクス

ATK 2500

恭介「2500……！」

拓夢「今度こそ終わりだ。攻撃！シュトルム・ウント・ドラック！」

恭介「！！！！！」

剣が首を斬る。

頭と胴体が2つに別れる。

だが………！

拓夢「な……に………！」

首を斬られていたのは、刹那ではなかった。

恭介「リバースカード【収縮】を発動していた！これで攻撃力が半分になっていたのだ！！！」

拓夢「チツ………」

恭介「よって、攻撃力は2500から1250になった。750ポイントのダメージを受けてもらう」

黒羽 拓夢

LP 4000

LP 3250

恭介「どうだ！」

拓夢「やるじゃないか。褒めてやるよ。だが、この程度、痛くも痒くもない。喰らえ！【ゴージュ】の攻撃！！」

恭介「同滅狙いか……」

拓夢「そうだ」

互いの剣が、相手の首を斬る。

呻き声を出しながら、倒れる。

拓夢「まだこちらには、攻撃が残っている。【アリス】の攻撃！フインブルヴェト！！」

恭介「があっ……！」

拓夢「これが、アリスちゃんのカだよ」

恭介「ぐっ……18歳など認めん……少女は年下に限るんだ！」

浜田 恭介

LP 4000

LP 2000

拓夢「ロリコンめ」

恭介「紳士だ」

拓夢「ブツ……リバースカードを1枚伏せターンエンドだ」

恭介「テメエ笑っただろ！」

拓夢「…気にするな」

黒羽拓夢

手札2枚

5ターン目

恭介「なんだよ。テメエはあっちか？幼女じゃなく熟女派か？」

拓夢「まあ、強いて言うならばですけど。年下が好みです。まあ、強いて言うならばですけど、黒髪がいいですね。勿論可愛くて、あ、太っているのはダメですね。できれば、頭もいい人がいいです。まあ、天然に萌えないこともありませんが。まあ、強いてですけど、身長は自分より低いと嬉しいです。あとBで」

恭介「めっちゃ、あるじゃん好み！てか、お前だつて年下が好みじゃねえか！テメエだつてロリコンじゃねえか！！」

拓夢「違う。俺のストライクは12から16。小学生に手を出すペドフェリアじゃない。恭介、お前のような変態じゃない」

恭介「俺は変態じゃない。いや、もし変態だとしても、変態という名の紳士だよ！」

拓夢「駄目だこいつ…、早くなんとかしないと……」

恭介「うるさい！このロリコンめっ！！」

拓夢「俺はロリコンじゃない。たまたま好きだった女がロリだっただけだ！」

恭介「…その言葉、聞いたことが……」

拓夢「あ……さ、さあ！貴様のターンだ！さっさとカードを引けえ！！！」

恭介「ドロー、俺は【月詠】を召喚！」

月詠

ATK 2000

恭介「装備魔法【夕風】！攻撃力を500ポイント上げ、貫通能力を得る！！！」

月詠

ATK 2000

ATK 2500

恭介「斬岩剣！」

月詠が、アリスの頭を西瓜割りのように2つに切断する。

切断面から、脳などの物体が見える。

拓夢「……………」

黒羽 拓夢

LP 3250

LP 2750

恭介「ターンエンド！」

浜田恭介

手札2枚

6ターン目

拓夢「ドロー、俺は【ジューダス】を召喚！」

ジューダス

ATK 1800

拓夢「魔法カード【砕けた仮面】！【ジューダス】をリリースし【リオン・マグナス】を特殊召喚する！」

リオン・マグナス

ATK 3000

拓夢「浄破滅焼闇！！！」

恭介「ぐあっ！」

浜田 恭介

LP 2000

LP 1500

拓夢「ターンエンド」

黒羽拓夢

手札0枚

7ターン目

恭介「…思い出した。確かエロゲーの主人公の台詞じゃ……」

拓夢「なあ！お、俺はゲームという下らないものなどしない！！」

恭介「そういえば、さっきの台詞も漫画の……」

拓夢「な、何言っているのかさっぱりだ。俺は漫画など見ない」

恭介「じゃあ、あの東京の都知事の条例は賛成？」

拓夢「無論反対に決まっているだろう。寧ろ、もっと規制を緩和すべきだ。もっとグロくてもいい！」

恭介「やっぱり、好きなんじゃ……」

拓夢「そんなことはない！俺はニコ動もよつつべも、2chも知らない！！」

恭介「知ってるじゃん」

拓夢「あ……くくく。闇に葬ってやる……」

恭介「邪気眼つばいこと言ってるよ?」

拓夢「俺は健全だ」

恭介「…ドロー、俺は【高町なのは】を召喚!」

高町なのは

ATK 2000

拓夢「……来たな」

恭介「魔法カード【スターライトブレイカー】!手札をコストに、相手フィールドを無に帰す!!」

拓夢「そうはさせない。俺は他の屑とは違う。リバーズカード【ワイン絞り】!なのはを拘束せよ!!」

なのはが拘束される。

恭介「なあ!」

拓夢「なのはの効果は、罠カードを受けないこと。しかし、この効果は自分ではなく、自分の他のカードに適應される。よって、なのは自身はこの罠の餌食となる!!」

恭介「くう……」

拓夢「【ワイン絞り】の効果は、選択したモンスターを破壊し、そのフィールドを血の海にし使用不可にする!!」

恭介「なんだと！」

なのはが、拘束され板のような物で押し潰されていく。

拓夢「くくくつ」

そして、言葉にならないのはの悲鳴を最期になのはは押し潰される。

そして、そのフィールドにはなのはの血が板の間から流れ出る。

拓夢「【スターライトブレイカー】は、なのはが存在しないと発動しない。なのはが消えた今、その魔法カードは不発だ」

恭介「……………」

浜田恭介

手札0枚

8ターン目

拓夢「お前に最早手はない。フィールドはがら空き。この俺が止めを刺してやる。ドロー！」

恭介「つ……………」

拓夢「俺に喰われる！リオンの攻撃！浄破滅焼闇！」

リオンの攻撃が、恭介へ向かう。

恭介を守るモンスターはいない。

恭介「!!!!!!」

拓夢「俺の糧となれたことを光栄に思うがいい」

恭介「がっ……………ああっ!!」

浜田 恭介

LP 1500

拓夢「なっ!!なんだと!!」

恭介「コストで墓地に送った【ネクロ・ガードナー】の効果さ。このカードを除外し、攻撃を無効にする」

拓夢「チツ……………魔法カード発動のコストにそれを捨てていたのか。くくくつ、面白い。手札0で何が出るか、見せてもらおうか。ターンエンドだ」

黒羽拓夢

手札1枚

9ターン目

恭介「……………」

拓夢「……………」

恭介「……ドローツ！」

拓夢「……」

恭介「……」

拓夢「デステイニードローになったか？」

恭介「ああ。行くぜ！俺は【星光の殲滅者】を召喚！！」

星光の殲滅者

ATK 2000

拓夢「ここで、そいつだとっ！」

恭介「攻撃！パイロシューター！！」

拓夢「向かい打て！浄破滅焼闇！！」

恭介「攻撃時、攻撃力を1000ポイント上げる」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

リオンの剣技と、星光の魔法がぶつかる。

拓夢「互角……」

だが、破壊されたのはリオンのみ。

星光の殲滅者

ATK 3000

ATK 2000

恭介「このモンスターは、1ターンに1度、戦闘では破壊されない」

拓夢「さらに、魔法や罠、モンスター効果でも破壊されないんだよな」

恭介「ああ。そのとおりだ。ターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

10ターン目

拓夢「ここまでやるとは……。楽しいぜ、お前との戦いは」

恭介「俺もだ」

拓夢「だが、最後に笑うのはこの俺だ！ドローッ！」

恭介「残念だな。勝つのは俺だ！」

拓夢「寝言はそれまでだ。行くぞ！俺は【クロエ・ヴァレンス】を召喚……！」

クロエ・ヴァレンス
ATK 1700

拓夢「クロエは召喚時、相手モンスター1体を破壊できる。だが、その効果を受けないなら仕方ないな」

恭介「……………」

拓夢「装備魔法【白い快樂】を発動！守備力を0にする代わりに、攻撃力を倍する！」

クロエ・ヴァレンス

ATK 1700

ATK 3400

恭介「うっ！」

拓夢「攻撃！月影刃！！」

恭介「破壊されないッ！」

拓夢「だが、超過ダメージは受ける！」

恭介「グアアアアッ」

浜田 恭介

LP 1500

LP 1000

拓夢「ターンエンド」

黒羽拓夢
手札0枚

11ターン目

恭介「ドロー、魔法カード【強欲な壺】！2枚ドローする！！」

拓夢「100で何ができるか、見せてもらおうよ」

恭介「魔法カード【ルシフェリオンブレイカー】！デッキの上3枚をコストに相手フィールドを焼き野原にする！！」

拓夢「まさか、引くとは！」

恭介「集え明星。全てを焼き消す焰となれ！ルシフェリオンブレイカー！！」

拓夢「くっ！！」

クロエが星光の砲撃の前に消え去る。

恭介「これで俺の勝ちだ！ダイレクトアタック！！」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

拓夢「がああああつ！」

黒羽 拓夢

LP 2750

LP 1750

恭介「なんでライフが！」

拓夢「星光の身体を見るんだな」

恭介「なあ！」

星光の身体に、数え切れないほどの虫がついている。

拓夢「装備魔法【白い快楽】を装備したモンスターが破壊されたとき、相手モンスター1体を道ずれとし、攻撃力を半分にする。そして、そのモンスターの効果は無効となる」

恭介「星光が……!!」

星光の殲滅者

ATK 3000

ATK 1000

恭介「まだまだ！リバーズカードを1枚伏せターンエンド!!」

浜田恭介

手札0枚

12ターン目

拓夢「ここまで追い詰められるとは、久しぶりだ。くくく。ドロ、俺も【強欲な壺】を発動するぜ」

恭介「ここで、手札増強かよ……」

拓夢「速攻魔法【血の再生】を発動。ライフを900払い、墓地のモンスターを蘇生する」

黒羽 拓夢

LP 1750

LP 850

拓夢「よみがえれ！」

リオン・マグナス

ATK 3000

恭介「っ……！」

星光の殲滅者

ATK 1000

拓夢「唯一の希望。そのリバーズカードは何かな」

恭介「……………」

拓夢「だが、ここは攻撃しない。俺は確実が好きだからね。一か八かは好きじゃないんだ。リバーズカードを1枚伏せて、ターンを終えるよ」

黒羽拓夢

手札0枚

13ターン目

恭介「ドローツ！」

拓夢「くくくっエピソードは近い」

恭介「魔法カード【萌え缶詰】！カードを2枚ドロースる！！」

拓夢「リバーズカード発動！【砂塵の大竜巻】！！リバーズカードを破壊するツ！！」

恭介「なあっ！」

リバーズカードは、【魔法の筒】。

拓夢「危ない危ない。攻撃していたら負けていた。だが、最早手は尽きたな。今、お前に残されたのはすでに役立たずとなった小娘が1匹のみ」

恭介「なら、その役立たずにやられるがいい！」

拓夢「！！！！！！」

恭介「魔法カード【断絶】！自分フィールドに存在するモンスターに装備されているカードをすべて破壊する！！よって、【白い快樂】を破壊ッ！！」

拓夢「なあっ！」

恭介「【白い快樂】が消えたことにより、幻覚は消え、星光さんは元に戻る！」

星光の殲滅者

ATK 1000

ATK 2000

拓夢「星光とかキメェんだよ！」

恭介「そのキメェ俺に負けな！」

拓夢「だが、星光ではリオンは倒せても、俺のライフは削れない！」

恭介「フィールド魔法【オタクの聖地 秋葉原】」

拓夢「なん…だと…！」

周りが秋葉原に姿を変える。

恭介「攻撃！」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

恭介「攻撃力が、リオンを上回ってないため、フィールド魔法効果により、1000ポイントアップ！」

星光の殲滅者

ATK 3000

ATK 4000

拓夢「ぐっ……！」

恭介「ルシフェリオンブレイカー！！！」

拓夢「がああああああああああッ！！！」

黒羽 拓夢

LP 850

LP 0

恭介「俺の勝ちだ」

拓夢「そんな…バカな……」

恭介「いい決闘だったぜ」

拓夢「くっ……そうだな。確かにいい決闘だった。負けはしたが、

得るものは大きかった。失ったものも大きいけどな」

そういうと、拓夢は決闘場を後にした。

恭介「……ああっ！優希たちを探さないっ！！」

そういうと、恭介は決闘場を後にした。

因みに、後日談だが、優希はただ単に、Amazonから届いた新作ゲームをやりたかったただけだったらしい。

Episode 1 - Chapter 5 - (後書き)

今回の1枚

ジューダス

レベル4 属性闇

ATK1800 DEE1500

効果

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える

A n e c d o t e - S c e n e 1 - (前 書 卷)

F r a g m e n t

其ノ巻

A n e c d o t e - S c e n e 1 -

今日は4月。

遂に、中学生最後の年となってしまった。

小学校の半分だもんな。

早く感じて当然だな。

先生「準備はいいか？」

そうだった。

今は、学校で決闘の時間だった。

俺は大丈夫だと先生に伝える。

対戦者となった、同級生の“野中亚美”も準備は万端のようだ。

亜美「いくよ！」

自分「ああ」

自分・亜美「決闘！！」

LP	LP
4000	4000

1ターンの目

亜美「友達だからって手加減なんかしてあげないんだからねっ！」

黒髪をポニーテールにしてる亜美が俺に向かって言う。

自分「もちろんだ」

亜美「ドロー、【天使剣士】を召喚！」

天使剣士

ATK 1600

亜美「リバーズカードを3枚伏せて、ターンエンド」

野中亚美

手札2枚

2ターン目

自分「ドロー、俺は【エフェクト・キャンセラー】を守備表示で召喚！」

エフェクト・キャンセラー

DEF 1000

自分「このモンスターがいる限り、モンスター効果は無効となる」

亜美「1000程度、私のモンスターが破壊してやるんだから！」

CLANNADの風子や、魔法少女まどか マギカの杏子の声に

似てる亜美が自分にそう言う。

自分「どうかな？リバースカードを3枚伏せて、ターンエンドだ」

自分

手札2枚

3ターン目

亜美「ドロー、じゃあいくよ 【天使かなで】を召喚！」

天使かなで

ATK 1700

亜美「【天使剣士】の攻撃！エンジェルソード！」

自分「リバースカード【霧散】！攻撃を無効にする！！」

亜美「カウンター罠【トラップ・ジャマー】！バトルフェイズ中の罠カードの発動と効果を無効にし破壊する！！」

自分「させるかッ！カウンター罠【トラップ・トラップ】！！カウンター罠の発動と効果を無効にするッ！！」

亜美「カウンター罠【ソウルジエムの粉碎】！自分のカウンター罠にチェインされたとき、発動できる。相手のカウンター罠の効果を無効にし破壊！さらに、1000ポイントのダメージを与える！！」

自分「ぐっあッ！」

LP

3000

亜美「そして、攻撃は続行！モンスターを破壊！」

自分「ぐっ……」

亜美「このモンスターがモンスターを破壊したとき、カードを1枚
ドロウする」

自分「……………」

亜美「そして、かなでのダイレクトアタック！エターナルセイバー
！！」

自分「がはっ……………！」

LP

1300

亜美「ターンエンド」

野中亚美

手札3枚

4ターン目

自分「ドロー、【アックスブレイド】を召喚！」

アックスブレイド

ATK 1900

自分「さらに、装備魔法【闇の執念】を装備。手札1枚をコストに、2回攻撃を可能にする」

亜美「2回！」

自分「2連撃！！」

亜美「あああっ！」

2体の天使が破壊される。

LP

3500

自分「ターンエンド」

自分

手札0枚

5ターン目

亜美「ドロー、魔法カード【コストダウン】を発動！手札を1枚捨

てて、このターン、モンスターレベルを2下げる」

自分「いきなり上級モンスターかつ！」

亜美「【聖天使ガブリエル】を召喚！」

聖天使ガブリエル

ATK 2500

亜美「1ターンに1度、相手に500ポイントのダメージを与える！」

自分「バーンカードか！」

LP

800

亜美「ガブリエルの攻撃！ジェット・トゥジェット・アパーカー！！」

自分「ぐふっ……！！」

LP

200

亜美「ターンエンド」

野中亜美
手札1枚

6ターン目

自分「ドロー、リバーズカード【スターダスト】！自分のフィールドにこのカードしかなく、ライフポイントが500を下回っているとき、手札のモンスターを特殊召喚し、攻撃力を3倍とする！！」

亜美「さ、3倍！？」

自分「現れよ！！」

闇の魔導師イオン

ATK 2000

自分「そして3倍になる」

闇の魔導師イオン

ATK 2000

ATK 6000

亜美「ろ、ろろろくせん……！ち、チートだあ！！」

自分「実在するカードじゃないか！行くぞ！！」

亜美「わ、私にはリバーズカードがある！リバーズカード【Qの勧誘】！！」

自分「このモンスターは、畏カードの発動と効果を無効にして破壊する！」

亜美「なっ！」

自分「アポカトス!!」

亜美「きゃああああああああああああっ！」

LP

0

亜美「やるね」

自分「え……」

名前を呼ばれた気がした。

でも、音が聞こえてこない。

景色がモノクロに変わっていく。

そして、意識は闇へと堕ちた。

A n e c d o t e - S c e n e 1 - (後書き)

作者の御茶会

作者「ここまで読んで下さり、有り難う御座います。……見ている人居るのかな？不安になって来た！」

桜花「居ますよ！……きつと」

作者「見てくれる方は、今日中にこの小説を5人に宣伝しないと呪われます。……うん。これはチェンメと変わらん。……スイマセンm(――)m」

桜花「大丈夫。私が呪うから」

作者「ええ〜EP1は終わったので、次からはEP2になります。EP1は主要人物の紹介ということで、書いてみました」

桜花「私がメインヒロインです。(^-^)」

作者「取り敢えずは、主要人物の8人を中心に物語が展開していきます」

桜花「ニコニコ(*^|^*)」

作者「EP毎にそれぞれのキャラをピックアップしてやっていくつもりです」

桜花「私はいつでも、目立ってるよ。恭介と一緒に」

作者「それはどうかな？」

桜花「……………」ギロ

作者「ひいひいひい！」

桜花「……………」ニコ

作者「うわあああ！」

桜花「あっ！作者がどっか行っちゃった。なんでかな？かな？」

恭介「それは、桜花が睨むからだよ」

桜花「ええ〜睨んでないよ〜」

恭介「なら、いいけど。そう言えば今日は24日。Key作品のReleaseの発売日！皆やってるのかな？」

桜花「…恭介は、私だけを見てればいいんだよ」

恭介「ほ、ほら！でも、やりたいし……………」

桜花「静流とか、二次元なんだよ？」

恭介「なっ！お気に入りをつっ！」

桜花「恭介のことは、何でも分かるんだよ？」

作者「だが、大丈夫だ」

恭介「あ、帰ってきた」

作者「作者の部屋には現在PCはない！だ、だから……できないんだよおお！95とか押し入れにあるけど古すぎるよ！ネットさえできねえよおおっ！フーキンにあえないよおおおっ！！！」

恭介「グス……可哀想に……今時PCがないなんて……」

桜花「じゃあ、そろそろ尺だから、最後に名言を1つどうぞぞ！」

恭介「ひどい！人が悲しんでるのにつ！」

作者「いいよ……名言だね……名言……」

桜花「早く」

恭介「w k t k」

作者「小説をテキストに捲らないで。だって、再び読む事は無いのだから」

桜花「どういこと？」

作者「考えてみて。じゃ、恭介も1つ」

恭介「え！？……うん。じゃあ……ハードルは高ければ高い程、くぐりやすい」

桜花「それ、名言？」

作者「感動した！」

恭介「心の友よ！」

Episode 2 - Chapter 1 - (前書き)

第007話

有り得ないブラックコーヒー

Episode 2 - Chapter 1 -

壁陽学園のどこか。

「…必ず使命を果たさなければなりません」

「塵芥どもなど、我の前には何も出来ぬ」

「僕は翔ぶ！」

9月1日。

今日は木曜日。

もうすでに2学期だ。

だが、恭介たちは部活には結局入らなかった。

寮。

悠斗の部屋。

悠斗は携帯電話で誰かに電話している。

悠斗「…はい」

『お前に敗北という文字は要らない。お前の敗北は我が財閥には要らないのだ』

悠斗「…はい」

『お前には期待している。私を失望させるな』

電話が終わる。

悠斗「…ぐっ！」

悠斗とは壁を殴る。

悠斗「あいつさえ！あいつさえいなければっ！」

同時刻。

職員室前の廊下。

雅功「奴に負けたことは、俺の人生の唯一の汚点だ！さっさと退学にさせたいッ！クソッ！！」

雅功は苛々していた。

雅功「1学期中に落とすつもりだったのに……」

その頃、恭介たちは学校の外にいた。

壁陽学園は市にあるので、遊び場も沢山あるのだ。

また、市であるため、他の学校の生徒も見付ける。

光輝「あそこの制服は、有朋高校の制服だね」

恭介「よく知ってるね」

光輝「まあ、昔はココに住んでたからね」

優希「そうなんですか？」

光輝「ああ、親の都合で、神戸に引っ越したけどね」

優希「そうなのですか」

因みに、優希はイジメられていることを否定した。

なので、今まで通りにしていくと恭介たちは決めた。

勿論、注意を払って。

幸い、恭介たちの知っているところではイジメは受けていない。

まあ、屋上でタバコ吸っている優希は、たびたび見かけているが。

でも、他の人に今まで見つかってないので、ある意味凄いと思う恭介だった。

桜花「ねえ、アレって結愛じゃない？」

桜花が指を指す。

桜花が指を指した先にいたのは、確かに人気アイドルの結愛だった。

今は、休業中だが。

優希「なにしているのでしょうか？」

恭介「さあ……。でも、まあ、目的ははっきりしているが……」

恭介たちは、結愛とはあの日、食堂で話した以外、ロクに話などしていない。

なので、ただのクラスメートだけの存在だ。

結愛は、喫茶店にいた。

なので、目的ははっきりしている。

恐らくは、小腹が空いたのでデザートでもということだろう。

恭介「……………」

気が付けば、恭介たちは喫茶店の中にいた。

幸い、結愛は恭介たちには気付いていない。

結愛「……………」

結愛はすでに、頼み終わっているようだ。

店員「何に致しますでしょうか？」

恭介たちもそれぞれ飲み物を頼む。

店員「畏まりました」

店員が奥に入っていく。

その時、結愛の頼んだ物が、結愛のもとへと届いた。

店員「お待たせしました」

若い店員が結愛の頼んだものを、テーブルに置く。

どうやら、ブラックコーヒーのようだ。

そして、そのまま奥に入って……いかず！

結愛に話し掛ける。

店員「もしかして、アイドルの結愛ちゃんですか？」

結愛「……いいえ。人違いです」

店員「ええ〜ゆあゆあでしょ〜？」

結愛「……違います」

店員「ぜったいゆあゆあだよ〜」

結愛「……」

店員「え？あ、ちょっと！」

結愛は立ち上がり、喫茶店を出て行ってしまった。

恭介「あつ！ゆあゆあがつ！」

光輝「何かあつたんだろうか？」

恭介「後を追う！」

桜花「どうして？別にいいじゃない追わなくても」

恭介「あれは絶対に何かあつた。だからだ！」

恭介も走って外に出ていった。

優希「理由を聞いたら、店員に聞けばいいんじゃないでしょうか？」

光輝「だよな」

岸辺。

恭介は、結愛を見つけた。

結愛は、太陽の沈もうとしてできるオレンジ色の空中、川を眺めていた。

恭介「川が好きなのか？」

結愛「……別に」

恭介「…何かあつたのか？」

結愛「……別に」

恭介「そうか……。なら、決闘しないか？」

結愛「……どうして？」

恭介「決闘は、その人の本質が見える。言葉で語り合えないなら、コレが一番いい。それに、俺は前に君に断られているからな。ずっとやりたかったんだ」

結愛「……いいわ」

結愛は構える。

恭介「そう言ってもらって嬉しいよ」

恭介も構える。

小魚が跳ねたことにより、水飛沫が飛ぶ。

恭介「決闘！」

浜田 恭介	佐倉 結愛
LP 4000	LP 4000

1ターン目

恭介「ドロー、【フレイム・シールド・ガードナー】を守備表示」

フレイム・シールド・ガードナー

DEF 2000

恭介「このモンスターは、炎属性からの攻撃を無効にする。ターンエンド」

浜田恭介
手札5枚

2ターン目

結愛「ドロー、私は【屍剣士】を召喚」

可愛いゆあゆあからは想像できない、気持ち悪いモンスターが現れた。

恭介「ゴースト……」

屍剣士
ATK 1700

結愛「装備魔法【死霊剣】を装備。攻撃力を1000ポイントアップする」

屍剣士
ATK 1700
ATK 2700

結愛「攻撃」

恭介「くっ」

結愛「このモンスターには貫通能力がある」

恭介「なっ!」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3300

結愛「リバーズカードを1枚伏せてターンエンド」

佐倉結愛

手札3枚

3ターン目

恭介「ゆあゆあがそんなカードを使うなんて……」

結愛「以外?」

恭介「そうだな。俺の知っているゆあゆあは、可愛い妹属性の少女だな」

結愛「そう、私は作ってきた。自分を。好きなものはパフェ。ブラックコーヒーは飲めない。それを、テレビの前の豚共は信じる。ゆあゆあちゃんって! バツカじゃないの! 気持ち悪いっ! …… 私は疲れたの。自分を騙すのが。だから、北海道に閉じ籠ったの」

恭介「だから、北海道に来たのか」

結愛「そう。ここは寮だし。世界一の決闘校っていうのは、休業にするいい名目だから」

恭介「……ゆあゆあは嫌いなのか？」

結愛「ゆあゆあは私じゃない。みんな私を好きって言う。でも、それは私じゃない。ゆあゆあって言う虚像の人物が好きなだけ」

恭介「俺は、結愛のファンだった」

結愛「残念？真実はこんなもので？」

恭介「……確かに驚いた。でも、俺は結愛のファンだ。ゆあゆあも好きだ。だが、結愛だって好きだ」

結愛「……さあ、あなたのターンよ」

恭介「ああ。ドロー、俺は【桂ヒナギク】を召喚！」

桂ヒナギク

ATK 1900

恭介「攻撃！」

結愛「1900で？」

恭介「違う。このモンスターは攻撃時、攻撃力を1000ポイントアップする！」

桂ヒナギク

ATK 1900

ATK 2900

結愛「えっ……」

恭介「破壊！」

結愛「この装備魔法が破壊された時、500ポイントのダメージを与える」

恭介「ぐっ」

浜田 恭介 佐倉 結愛

LP 3300 LP 4000

LP 2800 LP 3800

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

4ターン目

結愛「……正直、私は決闘が好きではない。ただ、休業するためだけの理由で入った」

恭介「そうか……」

結愛「でも、周りのみんなはゆあゆあ、ゆあゆあって近付いてくる！私じゃない私に話し掛けてくる！」

恭介「……確かに、俺は君を直で見るとまでは、ゆあゆあしか見てなかった。だけど、君と出会って結愛を知った。もちろん、君からすれば何も知らないのと一緒にだ。だが、俺は何度も言うが結愛のファンだ。ゆあゆあだけじゃない。本当の君も好きなんだ」

結愛「……無駄ですよ。私の心には響かない。決闘もつまらない」

恭介「なら、好きになればいい。決闘は面白いぞ」

結愛「……ドロー、私は【怨霊の少女】を召喚」

怨霊の少女

ATK 1100

結愛「このモンスターは、召喚時に自分の墓地にあるモンスター1体を装備します。そして、攻撃力をそのモンスターの攻撃力分アップします」

恭介「ってことは1700か！」

結愛「……そうです」

怨霊の少女

ATK 1100

ATK 2800

結愛「シャドーミュル」

ヒナギクが、闇に身体を切り裂かれていく。

恭介「やるじゃないか」

浜田 恭介

LP 2800

LP 1900

恭介「こんなに強いのに決闘がつまらないなんて、もったいないよ
！」

結愛「ターンエンド」

佐倉結愛

手札3枚

5ターン目

恭介「ドロー、魔法カード【天使の施し】！3枚引いて、2枚捨て
る。そして、リバースカード【血の再生】！！」

浜田 恭介

LP 1900

LP 1000

結愛「残念ですが。リバーズカード【マジック・ジャマー】を發動します。手札1枚をコストに、効果と發動を無効にします」

恭介「ぐっ……」

結愛「私の勝ちです。サレンダーしたらどうです?」

恭介「それは出来ない。【オタクサイクロン】を發動!魔法・罫力1ド1枚を破壊する!!装備カードとなったモンスターを破壊し、600ポイントのダメージを与える!!」

結愛「なっ……」

怨霊の少女 佐倉 結愛

ATK 2800 LP 3800

ATK 1100 LP 3200

恭介「そして【鏡音リン】を召喚!」

鏡音リン

ATK 1600

恭介「魔法カード【悪徳政治】を發動!手札全てをコストに、相手に自分のモンスター1体の攻撃力分のダメージを与える!!」

結愛「あああっ」

佐倉 結愛

LP 3800

LP 2200

恭介「攻撃！」

結愛「う……………」

佐倉 結愛

LP 2200

LP 1700

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

7ターン目

結愛「不思議ですね……………。決闘なんて、どうでもいいのに……………負けたくありません」

恭介「それは、決闘が、どうしてもよくないからさ」

結愛「ふ……………そうかも。行きます。ドロー、魔法カード【怨霊の大音量】。大音量が、相手の鼓膜を破り、耳を使い物にならなくさせる」

リンの耳から、血が流れ出す。

恭介「リン……………」

結愛「そして、攻撃力が半分になる」

鏡音リン

ATK 1600

ATK 800

結愛「装備魔法【不死身】をリンに装備。装備モンスターは戦闘では破壊されなくなる」

恭介「なんで、わざわざ……………」

結愛「【血に飢える亡者】を召喚」

血に飢える亡者

ATK 900

結愛「攻撃…………ブラッド・プリース・ファッグ」

恭介「ぐあっ」

浜田 恭介

LP 1000

LP 900

結愛「このモンスターが、相手にダメージを与えたとき、さらに攻撃が可能」

恭介「なっ……!!」

結愛「そう、無限に続く。私が勝利するまで」

恭介「…やるじゃないか」

結愛「私の勝ち!連続攻撃!!」

結愛が、この決闘で初めて大声を出す。

リンに、攻撃が当たる。

だが、耳が聞かないリンに、その攻撃を回避しきれない。

そして、死ねない!

リンの苦痛に漏れる声だけが連続して響く。

浜田 恭介

LP 900

LP 800

LP 700

LP 600

LP 500

LP 400

LP 300

LP 200

LP 100

恭介「……………」

結愛「終わりね！止めの攻撃！！」

恭介「……………」

結愛「え……………」

亡者の攻撃はリンへは届いていない。

誰かが、リンを守っている。

結愛「そいつはっ！」

恭介「リンが攻撃を受けることで、ライフが0になるとき、リンを特殊召喚して、攻撃対象をリンに替える！」

鏡音レン

ATK 1800

結愛「なんだって……………」

恭介「返り討ちだ！」

レンガリンを守り、亡者を成仏させる。

佐倉 結愛

LP 1800

LP 900

結愛「……負けました。でも、初めて悔しいと感じてる。今度は、私が勝つ」

恭介「ああ、いつでも待ってる」

その後、2人は金を払わず店に出たことに気付く。

Episode 2 - Chapter 1 - (後書き)

今回の1枚

鏡音リン

レベル4 属性地

ATK1600 DEE1200

効果

このカードが攻撃を受けて自分のライフが0になるとき、デッキ・手札・墓地から「鏡音レン」を特殊召喚して攻撃対象をそのカードに替えることができる

Episode 2 - Chapter 2 - (前書き)

第008話

例のブツ

結愛と決闘してから数日。

恭介は何もない平和な日々を過ごしていた。

勿論、この世界はゲームの世界やアニメの世界ではない。

だから、平和な日々と言っても、それが普通。

ただ、変わったことと言えば、結愛が知り合いから、友達に変わったくらいだ。

くらいと言っても、恭介には歓喜するくらい嬉しい変化なのだが。

恭介「…最近、なんか分からないけど、殺気を感じるんだが」

桜花「気のせいじゃない？大丈夫だよ？そんな輩は私が……………」

結愛「私も変な視線はずっと感じるけどね、あ、変態の視線ね」

光輝「まあ、可愛いからな。結愛ちゃんは」

結愛「当然じゃない」

優希「…………でも驚きです。結愛さんが、サブカルチャーに詳しいなんて」

そう、恭介たちがいるのは書店である。

結愛「アイドルなんて仕事をしてると、色々詳しくなるのよ。色々
とね」

恭介「目的のものあればいいが……」

恭介が周りを見渡す。

恭介「あいつは……」

恭介は目の前に拓夢がいることに気付く。

優希「何の本を見ているのでしょうか？」

光輝「マンガコーナーなのは確かだが」

拓夢「……ふふ」

優希「わ、笑ったです！マンガ見て笑いましたです！怖いのです！
！」

桜花「……タイトルは、……『ハヤテのごとく！』と書いてある
わね」

恭介「あ！そう言えば、新刊出たんだった。買わないと」

結愛「待ちなさい。今行ったら、バレるわ」

恭介「バレたらダメなのか？」

結愛「何買つか興味あるわ。尾行しましょう」

恭介「テンションあがってきたー！」

光輝「大声出したら、バレるって」

恭介たちは尾行を開始した。

桜花「ここはラノベコーナーね。あそこは、電撃文庫ね」

拓夢「あつた……」

恭介「あれは『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』だな」

結愛「あ、列がずれたわ。そこは、ファンタジア文庫ね」

拓夢「くくっ……」

優希「また笑ったのですっ！」

恭介「あれは『生徒会の一存』と『これはゾンビですか？』だな。くうー！奴とはいい酒が飲めそうだ！」

光輝「未成年だろ」

恭介「例えだよ」

結愛「あ、移動するわ」

拓夢「あ、あつた！ココ気に入った！」

優希「何があつたんでしょう？ここは、スニーカー文庫ですが」

桜花「ハルヒじゃない？」

恭介「いや……あれは『ムシウタ』！やべえ、奴と踊りてえ！！」

光輝「迷惑になるから、止めなよ」

優希「あ、移動しますです」

拓夢「おお！見付けた。これで……ふふっ……はは……あははははっ！！」

優希「ひいひいっ」

結愛「笑ってるわね」

恭介「な……まさか……奴は……なるといつのか……」

恭介は駆け出した。

拓夢のもとへ。

桜花「な、何がどうなって！」

恭介「拓夢っ！」

拓夢「恭介っ！どうしてここにっ！！」

恭介「俺の目的はそのブツを手に入れること。だが、数量はお前が

手にしたそれ1つのみ。この意味がわかるか？」

拓夢「ふっ……早いもの勝ちだ。つまり、俺のものだ」

恭介「それはどうかな？」

拓夢「どういう意味だ？」

恭介「決闘者なら、決闘で持ち主を決めるべきだ！」

拓夢「た、確かに一理ある………」

あるんだ……
桜花

あるのか……
光輝

あるんですか……
優希

いやないだら……
結愛

拓夢「分かった。決闘に勝った者が、このブツを買い取る。それでいいな？」

恭介「もちろん」

光輝「水を指して悪いが、書店で決闘は迷惑だろ」

拓夢「確かに……では、外に出よう」

恭介「ああ！」

2人は外に飛び出していった。

優希

書店の外。

拓夢「そう言えば、リベンジをしてなかったな。今、果たさせてもらおう」

恭介「そうは行かない。ブツは俺が手に入れる！」

恭介・拓夢「決闘!!」

浜田 恭介 黒羽 拓夢

LP 4000 LP 4000

1ターン目。

恭介「ドロー、俺は【八神はやて】を召喚！」

八神はやて

ATK 2000

恭介「リバースカードを1枚伏せ、ターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

2ターン目

拓夢「ドロー、【エミル・キャスタニエ】を召喚！」

エミル・キャスタニエ

ATK 1800

拓夢「モンスター効果、ラタトスクモード！攻撃力を倍にする！！」

エミル・キャスタニエ

ATK 1800

ATK 3600

拓夢「攻撃！アイン・ソフ・アルフ！！」

恭介「リバーズカード【オタクの仲裁】！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する！！」

拓夢「エミルの効果発動コストでデッキの上から1枚を墓地に送る。さあ、恭介、お前のターンだ」

黒羽拓夢

手札5枚

3ターン目

恭介「ドロー、スタンバイフェイズにはやての効果で、攻撃力を500ポイント上げる」

八神はやて

ATK 2000

ATK 2500

拓夢「強い効果だ。チートと言っても過言ではない。だが、2500では、エミルは倒せぬ」

恭介「装備魔法【闇の書】をはやてに装備する。装備したモンスターは、攻撃力が500ポイント上がり、さらに、全モンスターへの攻撃が可能になる」

八神はやて

ATK 2500

ATK 3000

拓夢「【拡散する波動】と【魔術の呪文書】を組み合わせたカードか。だが、3000では、ブルーアイズは倒せても、エミルは倒せない！」

恭介「ふっ……忘れてないか？まだ、俺はモンスターを出していない」

拓夢「……………」

恭介「召喚！」

昏金鳴の音

ATK 1000

拓夢「何だ……どんな効果が……」

恭介「攻撃！」

拓夢「…反撃！アイン・ソフ・アルフ！」

恭介「ぐあっああっ！」

浜田 恭介

LP 4000

LP 1400

拓夢「喰らった……」

恭介「ああ、喰らったよ。だが、………！」

拓夢「なにつ！」

エミル・キャスタニエ

ATK 3600

ATK 2600

恭介「このモンスターが破壊されたとき、相手モンスターの攻撃力を1000ポイント下げる」

拓夢「1000ポイントの為に、2600も受けたのか？割に合わなくないか？」

恭介「大丈夫さ。速攻魔法【ダメージキヤラクター】！2500ポイント以上のダメージを受けたとき、発動できる。発動後、このカードを除外する。では、行くぞ！はやての攻撃！ラグナロク！！」

拓夢「ぐっ……この程度っ！」

黒羽 拓夢

LP 4000

LP 3600

恭介「ブツは必ず手に入れる。リバースカードを伏せターンエンド」

浜田恭介

手札1枚

4ターン目。

拓夢「手に入れるのは俺だ。ドロ、【ドロワット】、そして効果で、【ゴージュ】を手札から召喚！」

ドロワット ゴージュ

ATK 2000 ATK 2000

恭介「除外した【ダメージ・キヤラクター】の効果発動！このカードが、除外されている限り、このカードが、除外されてから召喚された相手モンスターにダメージを与える！！」

拓夢「なっ……！！」

キャラクターがダメージを受ける。

服に切れ目があちこちに出来る。

まるで、ダメージジパンならぬ、ダメージ制服だ。

恭介「攻撃力が半分になる」

ドロワット ゴーシュ

ATK 2000 ATK 2000

ATK 1000 ATK 1000

拓夢「目にはいいね……。魔法カード【衝破十文字】！【ドロワット】と【ゴーシュ】が自分フィールドにいるとき、相手モンスターをすべて破壊する！！」

2人の剣技が、はやてを四等分に切り裂く。

血と、内臓が溢れ出す。

恭介「くっ……」

拓夢「勝ちだ！ダイレクトアタック！！」

恭介「があああっ！」

浜田 恭介

LP 1400

LP 400

拓夢「……………ぐっ」

黒羽 拓夢

LP 3600

LP 2600

恭介「リバーズカード【ディメンション・ウォール】！受けるダメージを相手に与える！！」

拓夢「……………リバーズカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

黒羽拓夢

手札2枚

5ターン目。

恭介「拓夢。一気に行かせてもらう。ドロー、魔法カード【デジャヴ】！1ターン前に破壊された自分のモンスターを、破壊される前の状態で、特殊召喚する！！」

拓夢「………」

恭介「装備カードを装備したはやてが復活する」

八神はやて

ATK 3000

拓夢「3000……」

恭介「ラグナロク！」

拓夢「ぐあああっ！」

黒羽 拓夢

LP 2600

LP 600

恭介「勝ちだ！ラグナロク！！」

拓夢「そうは、させない！リバーズカード【グレープグミ】！！2000ポイント回復する！！」

黒羽 拓夢

LP 600

LP 2600

拓夢「があああっ！」

黒羽 拓夢

LP 2600

LP 600

恭介「ちっ……だが、次ターンで俺の勝ちだ！ブツは俺のものだ！！」

拓夢「くっ……」

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

6ターン目。

拓夢「ドロロー、【ライフボトル】を発動！【リオン・マグナス】を墓地から蘇生！！」

リオン・マグナス

ATK 3000

恭介「ば、バカな！いつ墓地にリオンがっ！！」

拓夢「あつたのさ。たった1度だけ、リオンを墓地に送るチャンスが」

恭介「……あっ！」

あつたのだ。

1度だけ。

拓夢『エミルの効果発動コストでデッキの上から1枚を墓地に送る』

そう、この一瞬。

このときのみ、送ることが可能だった。

恭介「あのときだ………拓夢が墓地に送るにはそのときしかない」

拓夢「装備魔法【シャルティエ】！攻撃力を1000ポイント上げる！！」

リオン・マグナス

ATK 3000

ATK 4000

恭介「ぐ………だが、攻撃力はっ！」

拓夢「速攻魔法【次元回避】！除外されているカードを墓地に送る！！」

恭介「そんなっ！」

拓夢「終わりだ！魔神剣・刹牙！！」

恭介「ぐああああっ！」

拓夢「ははははっ！」

桜花「恭介っ！」

浜田 恭介

LP 400

LP 0

拓夢「これでブツは俺の………！」

黒羽 拓夢

LP 600

LP 0

拓夢「0っ！」

結愛「引き分けね」

恭介「リバーズカード【狂気の伝染】。受けるダメージを相手も受ける」

拓夢「ブツは……」

恭介「ブツは……」

恭介・拓夢「俺のものだあ！！」

2人は書店に走っていく。

光輝「走るなよ。迷惑じゃないか」

だが、2人は止まらない。

恭介「………ない」

拓夢「確かに……ここに………」

恭介「誰かに奪われた……」

桜花「いや、買ったただけでしょ」

拓夢「許せぬ……」

恭介「全くだ……」

優希「あの……コレ……」

拓夢「コレは……!」

恭介「例のブーツ!」

優希「一樣、買っておいたのです」

拓夢「言い値で買う!売ってくれ!」

恭介「優希!いや優希様!どうか、どうか、この俺に慈悲をっ!」

優希「仲良く使ってくださいです」

拓夢「……」

恭介「……」

恭介・拓夢「ああ」

優希「はい、なのです」

恭介「……お前、作れるの？」

拓夢「ああ、趣味で作ったりしてる」

恭介「俺も携帯にしてるぜ」

拓夢「じゃ、互いに片方だけか」

恭介「そのようだな」

拓夢「まあ、一緒に歌わせようぜ」

恭介「ああ」

恭介・拓夢「鏡音を」

Episode 2 - Chapter 2 - (後書き)

今回の1枚

エミル・キャスタニエ

レベル4 属性闇

ATK1800 DEE1500

効果

元々の攻撃力を2倍にすることができる。この効果を使用した場合、自分のエンドフェイズにデッキの上から1枚を墓地に送る

Episode 2 - Chapter 3 - (前書き)

第009話

ハッピーターンで危機到来

Episode 2 - Chapter 3 -

会議室。

そこに、2人の影があつた。

それは、悠斗と雅功であつた。

雅功「これが、伝説のレアカードだ」

悠斗「これで……………」

悠斗は、雅功からカードを受け取る。

雅功「そうだ。このレアカードさえあれば、例えなのはだろうが、勝つことができる」

悠斗「あとは、退学させるだけ」

雅功「ああ、任せとけ」

翌日。

恭介たちは、授業を受けていた。

雅功「絶望的。敗北が99%。しかし、1%の勝利があるなら、それに賭けよう。それは、奇跡につながる。……………簡単に言うならば、ライフが有る限り、諦めるな。ということだ」

放課後。

恭介たちは、屋上にいた。

念のために、記述しておくが、別に煙草を吸いに来たわけではない。

ただ、小毬のように、お菓子を食べに来たのだ。

ついでに言うておくが、小毬とは実在する人物ではない。

Key作品のゲーム、リトルバスターズに登場するキャラクターである。

恭介「じゃあ、原作を尊重して、ハッピーターンを食べるか？」

結愛「ワッフルがいい」

優希「わ、私も、ワッフルがいいです」

桜花「私は、アップルパイで」

光輝「あ、買うの忘れてきちゃった」

桜花「……………」

恭介「桜花、怒るなよ。代わりに、コレやるから」

恭介は、桜花にハッピーターンを差し出す。

桜花「恭介がそういうなら、……………特別ね」

光輝「次は気よつける」

1時間後。

恭介は、職員室にいた。

雅功「屋上で、お菓子を食べるなど言語道断。即刻退学だ」

恭介「いや、確かに悪かった。もうしない。だから、許してくれ」

雅功「チャンスをやろう」

恭介「チャンス？」

雅功「今度の日曜日。悠斗と決闘してもらおう。勝ったのなら、退学は取り消してやる。だが、敗北したなら、友達共々退学だ」

恭介「……………」

雅功「異論は認めない」

恭介「……………分かった」

恭介は、職員室を出る。

雅功「くくっ」

雅功は口を歪めて笑う。

職員室前の廊下。

恭介「……みんな」

桜花「どうだったの？」

恭介「悠斗と決闘することになった。……負けたら、みんな退学だつて」

結愛「そんな……業界の力を使ってやろうかしら」

恭介「大丈夫だ。俺は勝つ。俺のせいで、みんなを退学にはさせない」

優希「恭介さん……」

光輝「なら、決闘の練習でもしようぜ？相手になるよ」

恭介「ああ、ありがとう」

決闘場。

恭介「いくぜ！」

光輝「ああ」

恭介・光輝「決闘！！」

浜田 恭介 大畑 光輝
LP 4000 LP 4000

拓夢「なんだ、決闘してるのか？まあ、決闘場なんだから当たり前か」

恭介「拓夢？何かようか？」

拓夢「電話したが、出なかったからな。一樣、歌わせる歌詞が出来たから、見せようと思ってな」

恭介「後でメールで送ってくれ。悪いが今日は無理だ」

拓夢「……そのようだな。何があった？」

優希「実は、屋上でお菓子を食べていたのがバレたのです」

桜花「もし、日曜日の悠斗との試合に負けたら、みんな退学なの」

結愛「たかが、お菓子を食べてただけで退学とかふざけてるわ」

拓夢「おかしいな。前、屋上で歌詞を作りながら、菓子を食ってたが、なにも言われなかったな。まあ、恭介と決闘するよう仕向けられたがな」

結愛「鼻肩よ！きつと、恭介に決闘で負けて、目の敵にしてるんだわ！大人気ない！」

拓夢「……大丈夫だ。悠斗は確かに強い部類だ。だが、恭介はその上をいく」

桜花「当然ね」

拓夢「決闘、見せてもらおうよ」

恭介「ああ、俺の勝つ姿、見てくれよ。ドロー！」

1ターン目。

光輝「おいおい。勝つ気満々だな。だが、今回は俺が勝つぜ」

恭介「【古手梨花】を守備表示で召喚！」

古手梨花

DEF 1200

恭介「リバーズカードを2枚伏せ、ターンエンド」

浜田恭介

手札3枚

2ターン目。

光輝「ドロー、【サイバー・ドラゴン】を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン

ATK 2100

光輝「このモンスターは、相手のフィールドのみにモンスターがいるとき、特殊召喚できる」

恭介「なら、破壊させてもらう。カウンター罫【昇天の黒角笛】！特殊召喚を無効にし破壊するー！！」

光輝「くっ。だが、まだ通常召喚が残されている。【メガロボット】を召喚！」

メガロボット

ATK 1900

光輝「攻撃！キャノンバスター！！」

恭介「くっ……」

光輝「リバーズカードを1枚伏せ、ターンエンド」

大畑光輝

手札3枚

3ターン目。

恭介「ドロー、スタンバイフェイズに、破壊された梨花を墓地より蘇生する」

古手梨花

ATK 1600

光輝「再生とはウザいな。消えてもらっ。リバーズカード【奈落の落とし穴】。除外する！」

恭介「カウンター罠【神の宣告】！ライフを半分にし、無効にする！！」

浜田 恭介

LP 4000

LP 2000

光輝「無効にされたか……。だが、ライフを半分にしただけでも収穫だ」

恭介「梨花をリリースし、【御坂美琴】をアドバンス召喚！」

御坂美琴

ATK 2400

恭介「美琴の効果発動！手札1枚をコストに、相手モンスター1体を破壊する。レールガンの威力を喰らえ！！」

光輝「ぐっ……」

恭介「ダイレクトアタック！音速のコインの威力、喰らうがいい！」

光輝「がっ……！！」

大畑 光輝

LP 4000

LP 1600

光輝「簡単に逆転されてしまったか……」

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札2枚

4ターン目。

光輝「ドロー、【違法技術】を発動！ライフを半分払い、このターン、リリースが要らなくなる」

大畑 光輝

LP 1600

LP 800

光輝「降臨せよ！」

無敗の機械竜

ATK 3000

光輝「ウィンプレイクストリーム！」

恭介「ぐああっ！」

美琴が燃えカスとなる。

浜田 恭介

LP 2000

LP 1400

光輝「リバースカードを伏せ、ターンエンド」

大畑光輝

手札0枚

5ターン目。

恭介「ドロー、魔法カード【二重召喚】！このターン、通常召喚を2回行える。なのはと星光を召喚！」

高町なのは 星光の殲滅者

ATK 2000 ATK 2000

光輝「なのはと星光が一度に……」

恭介「終わりだ！星光さんの攻撃！」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

光輝「リバースカード【ショット】！」

恭介「なのはの効果で、星光さんは畏カードの効果を受けない！」

光輝「分かっている！このカードの対象は機械族！このターン、破壊されなくなる……！」

恭介「なにつ！」

光輝「星光は、破壊されないが、俺のモンスターも破壊されない。そして、俺のターンで、なのはを破壊し、俺の勝ちだ！」

恭介「くっ……打つ手がない……」

光輝「だが、罾カードの効果により、相手はカードを1枚ドロークする。引くがいい。ただし、600ポイントのダメージを受けるがな」

恭介「引いてやるぜ！逆転のカードを！デスティニードロー！！」

光輝「ゲームじゃないのだから」

浜田 恭介

LP 1400

LP 800

恭介「来たぜ！速攻魔法【萌絵の絵踏】！！萌カードを破壊する。俺はなのはを破壊するっ！！」

光輝「自ら破壊するだっ！」

なのはが、イジメられているように、男子の団体に踏まれる。

恭介「そして、1枚ドロークできる」

光輝「なのはを破壊してまで……」

恭介「リバーズカードを1枚伏せ、ターンエンド」

星光の殲滅者

ATK 3000

ATK 2000

浜田恭介

手札0枚

6ターン目。

光輝「ドロー！」

恭介「……………」

光輝「そのリバーズカード。それがブラフならば俺の勝ちだな」

恭介「【魔法の筒】かも知れないぜ？」

光輝「……………そうだな。だが、俺は攻撃するぜ」

恭介「……………」

光輝「【サイバー・プテラ】を召喚！」

サイバー・プテラ

ATK 1400

光輝「攻撃！ウィンブレイクストリーム！」

恭介「ぐああああっ！」

浜田 恭介

LP 800

光輝「……ライフが減っていない？」

恭介「【オタクの仲裁】さ」

光輝「なるほど……。ターンエンド」

大畑光輝

手札0枚

7ターン目。

恭介「ドロー！」

光輝「プテラを攻撃したら、幸せになれるかもよ？」

恭介「マジか？なら、幸せにさせてくれ。星光たんの攻撃！」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

光輝「躊躇しないとは……。リバースカード【シフトチェンジ】！

攻撃対象を替える!!」

星光の攻撃が、機械竜へと向かう。

恭介「知つての通り、星光は1ターンに1度、戦闘では破壊されない。つまり、同滅はしない」

光輝「知ってるさ」

恭介「リバーズカードを1枚伏せ、ターンエンド」

星光の殲滅者

ATK 3000

ATK 2000

浜田恭介

手札0枚

8ターン目。

光輝「ドロー、プテラの効果発動!攻撃力を半分にして、ダイレクトアタックができる!」

恭介「なんだと!」

光輝「タイラントブレス!」

サイバー・プテラ

ATK 1400

ATK 700

恭介「ぐああああっ！」

浜田 恭介

LP 800

LP 100

恭介「鉄壁だぜ」

光輝「それは、アニメの世界の話だ。リバーカードを1枚伏せタ
ーンエンド」

サイバー・プテラ

ATK 700

ATK 1400

大畑光輝

手札0枚

9ターン目。

恭介「ドロー、終わりだ！攻撃ッ！！」

星光の殲滅者

ATK 2000

ATK 3000

光輝「がああああっ！」

恭介「決まったな」

光輝「あああっ！」

大畑 光輝

LP 800

LP 200

恭介「なに……………」

光輝「ふふっ」

星光の殲滅者

ATK 2000

恭介「2000!どうして!?!」

光輝「俺のリバースカード【収縮】の効果さ」

恭介「ちっ…………ターンエンド」

浜田恭介

手札1枚

10ターン目。

光輝「ドロー、魔法カード【ファイアーボール】！相手に500ポイントのダメージを与える！これで俺の勝ちだ！！」

恭介「それはどうかな？」

光輝「なん…だと…」

恭介「カウンター罠【マジック・ジャマー】！手札1枚をコストに、魔法カードの発動と効果を無効にし破壊する！！」

光輝「な……………」

大畑光輝

手札0枚

11ターン目。

恭介「俺の勝ちだ！ダイレクトアタック！！」

光輝「くっそおおっ！！」

大畑 光輝

LP 200

LP 0

光輝「……………また負けてしまった」

拓夢「いい決闘を見てもらった。これなら、退学はありはしない」

恭介「当たり前だ」

結愛「でも、デッキを見直したり、手直しはすることね」

恭介「ああ、手伝ってくれるか？」

桜花「もちろん」

優希「はい、なのです」

そして、夜は更けていく……………。

Episode 2 - Chapter 3 - (後書き)

今回の1枚

御坂美琴

レベル5

属性雷

ATK 2400 DEE 2100

効果

手札1枚を捨てることで、相手フィールドのモンスター1体を破壊する

Episode 2 - Chapter 4 - (前書き)

第010話

敗北の1ターン

Episode 2 - Chapter 4 -

土曜日。

明日は悠斗との決闘の日だ。

恭介たちは寮に居た。

恭介「……やらないとダメ？」

結愛「もちろん」

優希「ルールだから」

光輝「早く早く」

恭介「……っ萌え萌えキュン」

結愛「あははは」

恭介「笑うな！罰ゲームはお前もだぞ！！」

結愛「あ……」

恭介「言ってもらおうか？」

結愛「……見る人がゴミのようだ」

桜花「あははは」

結愛「…恥ずかしい（／＼／＼）」

光輝「まったく…ドンジャラ弱すぎだよ」

恭介「将棋なら勝ってた」

結愛「私も麻雀なら勝ってたんだから」

桜花「ドンジャラなんて麻雀の簡易版みたいなものだから、コレで勝てないなら麻雀も無理じゃね？」

恭介「確かに」

結愛「麻雀とドンジャラは似て非なるものだよ」

楽しく楽しんでいた恭介たち。

その頃。

寮の前に雅功と人志がいて喧嘩をしてるようだ。

雅功「邪魔だ。退け」

人志「なんだと！」

雅功「怒るのは、クズの特権だな」

人志「貴様………言わせておけば………」

人志はデュエルディスクをセットする。

雅功「差を見てやるよ」

雅功もディスクディスクをセットする。

雅功・人志「決闘!!」

浜田 雅功 松本 人志

LP 4000 LP 4000

1ターン目。

雅功「俺のターン!ドロー、俺は【ダークプテラ】を召喚!!」

ダークプテラ

ATK 1700

雅功「リバーズカードを1枚伏せターンエンドだ」

浜田雅功

手札4枚

2ターン目。

人志「ドロー、俺は【シュイルバード】を召喚だ!!」

シュイルバード

ATK 900

人志「効果によりダイレクトアタックする」

雅功「なんだと！」

人志「くらいやがれ雅功！屈辱のアロー！！」

雅功「がつ！」

浜田 雅功

LP 4000

LP 3100

人志「リバーズカードを2枚伏せターンエンド」

松本人志

手札3枚

3ターン目。

雅功「死ね！攻撃！！」

人志「リバーズカード発動【屈辱刑】！攻撃宣言時に発動し相手は土下座をする。した場合、攻撃は続行される。拒否した場合、攻撃は無効となる」

雅功「誰が貴様などに土下座するか！」

人志「ならば、攻撃は無効だ」

雅功「ターンエンド」

浜田雅功

手札5枚

4ターン目。

人志「ドロー、俺はさらにモンスターを召喚する。【カバナタル】を召喚だ」

カバナタル

ATK 1200

人志「攻撃！屈辱のアローー！！」

雅功「ぐっ」

浜田 雅功

LP 3100

LP 2200

人志「【カバナタル】の効果を発動する。相手に与えたダメージ分、攻撃力を上げる」

カバナタル

ATK 1200

ATK 2100

雅功「……………」

人志「攻撃！敗滅のプレス！！」

雅功「死ね！リバーズカード【漆黒の罟】！！モンスターへの攻撃を行うモンスターを破壊し破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！！」

人志「リバーズカード【同罪】！効果ダメージを相手も受ける！！」

雅功「ぐあっ！」

人志「があっ！」

浜田	雅功	松本	人志
LP	2200	LP	4000
		LP	1150
		LP	2950

人志「ぐっ…ターンエンドだ！」

松本人志
手札3枚

5ターン目。

雅功「ドロー、【ダークプテラ】をリリースし【ダークサウルス】をアドバンス召喚！」

ダークサウルス

ATK 2400

雅功「デスブレス!!」

人志「があああっ!!」

松本 人志

LP 2950

LP 1450

雅功「ヒヤアハハハハ! いいざまだなあ!!」

人志「ぐっ……」

雅功「ターンエンドだ」

浜田雅功

手札5枚

6ターン目。

人志「ドロー、俺は【バンラス】を召喚。さらに魔法カード【チューナー・クローン】を発動する。手札を1枚捨てチューナーをこのカードで補う。シンクロ召喚!」

雅功「なにに!」

絶対王ガノギニス

ATK 3000

人志「くらえ！バーストバーン！！」

雅功「ぐおおっ！」

浜田 雅功

LP 1150

LP 550

人志「モンスター効果発動だ！手札を1枚捨て、相手に500のダメージを与える！！」

雅功「そんな……」

浜田 雅功

LP 550

LP 50

人志「次のターン、貴様の負けだな。ターンエンド」

松本人志

手札0枚

7ターン目。

雅功「負けた…この俺が、貴様などに……」

人志「醜態を曝す前にサレンダーするがいい」

雅功「手札に逆転の手はない……」

人志「はははっ」

人志は嘲笑う。

雅功は膝を曲げる。

雅功「そんな…バカな……」

その時だった。

恭介「諦めるなよ先生！」

雅功「……」

そこに、恭介たちがいた。

恭介「先生言ったじゃんか！決闘者は決して最後まで諦めてはならない。自分のライフが尽きる迄、決して、決して諦めるなッ！」

雅功「恭介……」

恭介「まだ先生のライフは残っている。まだカードには可能性が残ってるじゃないか！」

雅功「……」

恭介「みせてくれよ。先生のターン！」

雅功「……そうだな、生徒から大切な事を学んだよ」

人志「生徒から？生徒を導くのが先生の役目。生徒から教えてもらうことなどない」

雅功「それは違う。先生は生徒へ。生徒は先生へいろんな事を教え合うんだ」

人志「生徒から教えてもらうことなどないのだ」

雅功「それは、俺に勝ってから言うんだな」

人志「この状況で勝つ事が出来る気か？」

雅功「見るがいい。ドロー！」

恭介「……………」

雅功「俺は【龍の巢】を発動する！効果で手札のドラゴン族モンスターを1体、特殊召喚する！！」

人志「なんだと！」

雅功「召喚！【暗黒の闇龍】！！」

暗黒の闇龍

ATK 3000

人志「フン！互角を狙っているならムダだ。このモンスターは同じ攻撃力のモンスターとの戦闘では破壊されないのだ！！」

雅功「このターンで勝つ！魔法カード【テイク・ワン・チャンス】
！！手札を全て捨て、1枚ドロウする！！」

人志「運だのみとは……」

雅功「ドロウ！」

人志「どうだ？」

雅功「魔法カード【収縮】！」

人志「バカな！」

絶対王ガノギニス

ATK 3000

ATK 1500

雅功「くらえ！ダークネスフレイム！！」

人志「ギアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

松本 人志

LP 1450

LP 0

恭介「流石だぜ」

雅功「この位、当たり前だ」

恭介「そうだよな、先生は強いもんな」

雅功「言うまでもない。………退学、忘れるんじゃないぞ」

雅功は去っていく。

人志「くっ」

人志も悔しそうに去っていく。

結愛「よく、退学させようとしている先生の味方できるね」

恭介「退学はしないよ。負けないから。先生だってきっと本気じゃないさ」

桜花「そうかな……」

恭介「だって、いい先生だもん」

そして、今日が終わっていく。

Episode 2 - Chapter 4 - (後書き)

今回の1枚

暗黒の闇龍

レベル8 属性闇

ATK3000 DEE2500

効果

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない

Episodes 2 - Chapters 5 - (前書き)

第011話

負けられない

Episode 2・Chapter 5

日曜日。

早朝。

寮。

悠斗の部屋。

『どつやら、生徒たちを集めて決闘をするらしいな』

悠斗「はい」

『当たり前的事だが、敗北などは認めぬ』

悠斗「はい」

『期待している』

電話が切れる。

悠斗「……………」

同じ頃。

悠斗の部屋。

結愛「ねえ、兄弟はいるの?」

恭介「……………なんで?」

結愛「占いよ、占い。占ってあげる。みんなはどつなの?」

桜花「私はいないわ。1人っ子よ」

結愛「今日の運勢は、普通みたいね。ラッキーアイテムは、煮干し」

桜花「煮干し……」

結愛「優希は?」

優希「わ、私ですか?……私には、姉が1人いますです……」

結愛「ふむふむ。今日の運勢は、吉ね。ラッキーアイテムは、BL本」

優希「それなら部屋にありますです」

結愛「あるんだ……。光輝は?」

光輝「俺は妹が1人だ」

結愛「ほむほむ。なるへそ。じゃあ、恭介は?」

恭介「俺は……」

光輝「結果教えるよ!」

結愛「教える義務はない」

光輝「気になるだろ！」

結愛「分かったわよ。運勢は、大吉。……ちつ。ラッキーアイテムは、CD」

光輝「舌打ちしただろ」

結愛「…最近、若年性アルツハイマーみたいで記憶が……」

光輝「おい！」

こんなことをしているうちに時間は過ぎて……。

昼。

決闘場。

対峙する恭介と悠斗。

そして、客席には、沢山の生徒がいる。

その中には、桜花たちの姿もある。

審判を務めるのは、実技最高責任者の浜田雅功。

雅功「準備はいいか？」

恭介「ああ」

悠斗「大丈夫だ」

雅功「では、決闘開始だ」

2人は、デュエルディスクをセットする。

恭介「いくぜ」

悠斗「こい」

恭介・悠斗「決闘!!」

浜田 恭介 緑川 悠斗

LP 4000 LP 4000

1ターン目。

恭介「ドロー！俺は【高町なのは】を召喚する!!」

高町なのは

ATK 2000

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンドだ」

浜田恭介

手札4枚

2ターン目。

悠斗「ドロー！俺はフィールド魔法【ドラゴンワールド】を発動だ!!」

恭介「くるか………！」

悠斗「召喚!!！」

青眼の白龍

ATK 3000

悠斗「滅びのバーストストリーム!!!!！」

恭介「ぐあっ！」

浜田 祥基

LP 4000

LP 3000

悠斗「ターンエンドだ」

緑川悠斗

手札4枚

3ターン目。

恭介「ドロー、【神楽坂明日菜】を召喚する」

神楽坂明日菜

ATK 1800

恭介「明日菜の効果、それは相手モンスターが人間族以外の時、戦闘ダメージを行わずそのモンスターを破壊する」

悠斗「貴様……………」

恭介「攻撃！」

悠斗「くっ……………」

明日菜の効果により悠斗のモンスター、ブルーアイズは破壊される。

恭介「リバーズカード発動！【魔狂の剣】！！相手モンスターを破壊したモンスターはこのターン、もう1度攻撃が可能になる！！」

悠斗「なあっ！」

恭介「ダイレクトアタック！！」

悠斗「がああああっ！」

悠斗「ぐっ……………」

緑川 悠斗

LP 4000

LP 2200

恭介「ふっ…………」。貴様の敗北の鐘の音が聞こえてきたな」

悠斗「だまれっ！」

恭介「ターンエンドだ。言っとくが明日菜は魔法カードの効果を任

意で受けない。貴様に破壊できるか？」

浜田恭介

手札4枚

4ターン目。

悠斗「なめるなよ！貴様ごときすぐに負かしてやる！！」

恭介「くくくつ」

悠斗「ドロー！」

恭介「……………」

悠斗「（確かに力ではねじ伏せられないモンスターだが、畏カードで破壊はできる。いや、モンスター効果でもな……………」

恭介「……………」

悠斗「俺は【バーストドラゴン】を召喚！」

バーストドラゴン

ATK 2400

悠斗「召喚時、相手モンスター1体を破壊する」

明日菜が破壊される。

恭介「くつ……………」

悠斗「くらいな！破壊弾！！」

恭介「ぐあああああっ！」

浜田 恭介

LP 3000

LP 600

悠斗「はははっ！ターンエンドだあ！！」

緑川悠斗

手札4枚

雅功は静かに、この決闘を見ていた。

何を思っているかは、本人以外、わからない。

雅功「……………」

5ターン目。

恭介「くっ……。ドロー、俺はリバーズカードを1枚伏せてレベル7の【ダイヤモンドデスドラゴン】を召喚する」

悠斗「俺のフィールド魔法を使うとは……………」

恭介「フィールド魔法は俺にも有効だ」

ダイヤモンドデスドラゴン ATK 2700

恭介「ダイヤリングブレード!!」

悠斗「ぐうづづづ」

緑川 悠斗

LP 2200

LP 1900

恭介「多少対策はしといたぜ」

悠斗「……………」

恭介「ターンエンドだ」

浜田恭介

手札3枚

6ターン目。

悠斗「ドロー!」

悠斗は引いたカードを見る。

悠斗「(来たぜ!)」

ついに悠斗の手札にレアカードが舞い込んだ。

悠斗「俺は【闇の大神官復活儀式】を発動だ!手札からレベル12

以上になるようにカードを捨てエクストラデッキから融合召喚する
！！俺は手札の2体の【青眼の白龍】を捨て現われよ！！！！！！」

闇の大神官アクナデイン

ATK 4500

恭介「レアカードだっ！」

悠斗「砕け散るがいい！破滅の力、ダークブレイク！！」

恭介「ぐがああああああっ！」

悠斗「俺の勝ちだな」

恭介「……………」

浜田 恭介

LP 600

LP 100

悠斗「バカなっ！」

恭介「リバーズカード【萌えの神髄】だ。このカードはフィールドにフィールド魔法がある時、そのカードを破壊しダメージを0にする。その後、ライフを500払うのさ」

悠斗「……………だが、所詮は敗北の瞬間を少し先送りにしたに過ぎないぜ」

緑川悠斗
手札2枚

7ターン目。

悠斗「消えてしまえ！」

恭介「消えてしまえとか……………。それは無理だよ。だって、勝つか
ら」

悠斗「すぐに消えるぞ！」

恭介「ドロー、リバーズカードを1枚伏せる。そして、【古手梨花】
を守備表示で出す」

古手梨花

DEF 1200

恭介「ターンエンド」

浜田恭介
手札2枚

8ターン目。

悠斗「ドロー、アクナデインの攻撃！ダークブレイク！」

恭介「くあつ……………」

悠斗「アクナデインが守備表示モンスターを破壊した時、相手のラ

イフを半分にする」

恭介「くっ……」

浜田 恭介

LP 600

LP 300

悠斗「ターンエンド」

緑川悠斗

手札3枚

9ターン目。

恭介「ドロー、スタンバイフェイズに、戦闘で破壊された梨花を特殊召喚する」

古手梨花

ATK 1600

悠斗「じわじわと殺してやる」

恭介「そうはいくかつ！リバースカード【復活祭の生贄】！自分のモンスターが特殊召喚した時に発動できる。相手モンスター1体を破壊するっ！！」

悠斗「レアカードが……っ！！」

アクナデインが破壊される。

恭介「ダイレクトアタック！」

悠斗「があっ！……ああっ！！」

緑川 悠斗

LP 1900

LP 300

恭介「これで、ライフは並んだぜ」

悠斗「くっ……！！」

LP

300

LP

300

恭介「リバーズカードを伏せ、ターンエンド」

浜田恭介

手札2枚

10ターン目。

悠斗「俺は……負けられないっ！ドローッ……！」

恭介「な……に……！！」

青眼の究極竜

ATK 4500

悠斗「魔法カード【龍の鏡】。墓地かフィールドに存在する融合素材モンスターを除外し特殊召喚する。俺は、墓地の【青眼の白龍】3体を除外し【青眼の究極竜】を召喚した」

恭介「最強の……竜……」

悠斗「俺の勝ちだ！アルティメットバースト！！」

恭介「くっ……」

悠斗「強靱、無敵、最強！」

恭介「リバーズカード【和睦の使者】！戦闘ダメージを0にする！そして、破壊を無効にする！！」

悠斗「小賢しい。……だが、それもここまでだ。第2のレアカード【チートの施し】の発動。手札を全て捨て、デッキの中から好きなカードを1枚、手札に加える。俺は【竜の逆鱗】を加える。そして、伏せる。これで、ターンエンド」

緑川悠斗

手札0枚

11ターン目。

悠斗「終わりだ。大人しく負ける」

恭介「それはできない。決闘者は、最後まで諦めてはいけないんだ！」

雅功「……………」

恭介「ドロー！」

悠斗「ムダだア！」

恭介「【死者蘇生】！」

悠斗「なにいま、それを引くのか……………」

恭介「蘇れっ！」

高町なのは

ATK 2000

悠斗「なのは……………」

恭介「魔法カード【スターライトブレイカー】！手札1枚をコストに、全てを灰にせよ！スターライトブレイカー！！」

悠斗「ああ……………あっ！」

ブルーアイズが灰になって、消えていく。

悠斗「最強の……………ブルーアイズが……………」

恭介「終わりだっ！」

なのはの攻撃が、悠斗へ向かう。

悠斗「ぐああああああああああああっ！」

緑川 悠斗

LP 300

LP 0

恭介「俺の勝ちだ」

悠斗「く…あ……」

雅功「勝者、恭介」

桜花「やったあ！」

光輝「勝ったな」

優希「勝ちましたです」

結愛「当然ね」

拓夢「ふっ……」

恭介对悠斗の決闘。

それは、恭介の勝利で幕を閉じた。

だが、それは2学期の始まりに過ぎなかった。

Episode 2 - Chapter 5 - (後書き)

今回の1枚

高町なのは

レベル4 属性光

ATK2000 DEE1500

効果

このカードがフィールドに存在する限り、このカードを除く自分のモンスターは、畏カードの効果を任意で受けない

Episode 2 - Chapter 6 - (前書き)

第012話

闇のデュエル

Episode 2 - Chapter 6 -

月曜日。

放課後。

寮。

桜花の部屋。

桜花「私は、キング、クイーン、
そして……………」!

結愛「まさか……………」

桜花「そう、ジャック!」

結愛「くっ……………」

桜花「私の勝ち」

桜花は手札を見せる。

桜花「私のストレートを喰らえ!」

結愛「くくくっ」

結愛も手札を見せる。

桜花「えっ!?!」

結愛「残念だったね。揃ってしまったよ。5枚」

桜花「そんな……」

結愛「フラッシュだ」

桜花「私の……ストレートが……」

2人はポーカーをしていた。

結愛「暇だね……」

桜花「うん。ポーカーも飽きたし……」

結愛「恭介と拓夢は作詞してるし、光輝はパソコンで将棋してるし、優希はパソコンでニコニコ動画……。そして私たちはポーカー……」

桜花「まあ、今こうやっていれるのも、決闘に勝ったおかげだけだね」

そう。

昨日、恭介と悠斗は決闘を行った。

恭介は、負けたら桜花たちも含めて退学になるところだったのだ。

恭介の言う通り、雅功が本気じゃない可能性もあったが。

結果は、恭介の勝ち。

勿論、退学はなくなった。

結愛「誰か暇な人いないの？」

桜花「そういえば、今日は演劇部休みだら、香菜ちゃんは暇かも？」

結愛「香菜って声優の？」

桜花「うん。凄く仲良しって訳じゃないけど……」

結愛「じゃあ、いってみよー」

桜花「おー」

寮。

香菜の部屋。

桜花「いるかな？」

桜花は、香菜の部屋の扉を静かに叩く。

桜花「香菜ちゃん。居る？」

だが、返事はない。

結愛「居ないのかな？」

桜花「そうみたい」

結愛「ケータイは分かんないの？」

桜花「あ……そういえばそうだね。かけてみる」

桜花は、香菜に電話を掛ける。

結愛「桜花つて、意外と天然？」

5回目のコールのあと、電話が繋がる。

香菜『なに？』

桜花「あ、私だけど、今日遊ばない？」

香菜『べ、別に遊んであげないこともないわ』

桜花「じゃあ、寮の前で待ってるね」

香菜『わかった』

電話が切れる。

結愛「じゃあ、行こうか？」

桜花「うん」

寮。

拓夢の部屋。

拓夢「『Idol』完成したな」

恭介「よし、ニコ動にうpだ！」

拓夢「PVなしで大丈夫か？」

恭介「大丈夫だ、問題ない」

拓夢「そうだな。俺たちなら大丈夫だな」

恭介「もち！」

拓夢「投稿……完了！」

「すみません」

恭介「えっ？」

恭介と拓夢に向けられたその言葉の発信者は、玄関ではなく、窓から部屋に入ってきた。

理緒「私は“堀江理緒”。浜田恭介、貴方をこの世界から抹殺します」

恭介「なんだ……いきなり……」

拓夢「周りが暗く……」

闇が、恭介と理緒を包む。

拓夢「恭介ッ！」

闇の外にいる拓夢が、闇へ触れるが、中へと入れない。

闇の中では、恭介と理緒が対峙している。

恭介「闇……」

理緒「そう。闇のゲーム」

恭介「闇のゲーム！？……そんなものあるはず……」

理緒「存在するんです。この世界には。私の存在意義は、貴方をこの世界から抹殺すること。大人しく、殺されてくれませんか？」

恭介「だれがはいそうですかって殺されるかよ！」

理緒「そうですね。残念です。でも、たぎるのです。貴方を喰らえと。決闘で、貴方を殺します」

恭介「殺されるか！」

理緒「敗者は死ぬ。それが闇のゲーム。闇の決闘。現れよ、闇の化身」

理緒がそう言うと、闇の中から人が現れる。

理緒「本当なら、私が戦いたいのですが、残念ながら、デッキを忘れてしまいました。ですので、闇の化身と戦って貰います」

萌瑠「闇の化身……“秋葉萌瑠”。ここに」

理緒「恭介を喰らいなさい」

萌溜「はい」

恭介「死んでたまるか！」

恭介・萌溜「決闘！！」

浜田 恭介 秋葉 萌溜

LP 4000 LP 4000

1ターン目。

萌溜「ドロー、【デスメイジ】を召喚！」

デスメイジ

ATK 1700

萌溜「リバースカードを1枚伏せ、ターンエンド」

秋葉萌溜

手札4枚

2ターン目。

恭介「ドロー、【涼宮ハルヒ】を召喚！」

涼宮ハルヒ

ATK 2000

恭介「攻撃！」

萌瑠「うっ……このモンスターが破壊されたとき、手札から、モンスターを特殊召喚する」

秋葉 萌瑠

LP 4000

LP 3700

デスカイバー

ATK 2100

恭介「リバーズカードを伏せ、ターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

3ターン目。

萌瑠「ドロー、攻撃！」

鎌が、ハルヒの首を斬る。

恭介「くっ……」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3900

萌溜「ターンエンド」

秋葉萌溜

手札4枚

4ターン目。

恭介「ドロー、【桜乃涼葉】を召喚！」

桜乃涼葉

ATK 1700

恭介「【萌剣オタクソード】を装備！」

桜乃涼葉

ATK 1700

ATK 2700

恭介「攻撃！」

秋葉 萌溜

LP 3700

LP 3100

萌溜「このモンスターが破壊されたとき、相手フィールドのモンスターをすべて破壊し、1体に付き500ポイントのダメージを与える」

恭介「ぐう」

浜田 恭介

LP 3900

LP 3400

恭介「くっ……。ターンエンドだ」

浜田恭介

手札3枚

5ターン目。

萌瑠「ドロー、【アメノサギリ】を召喚！」

アメノサギリ

ATK 0

萌瑠「効果により、フィールド魔法【深き霧】をデッキより発動するわ」

恭介「何も見えない……」

萌瑠「そう、このカードがある限り、私のモンスターへ攻撃はできない。さらにリバースカード【スモーク・スパーク】！フィールド魔法がある時、相手に1000ポイントのダメージを与える」

恭介「くあっ……」

浜田 恭介

LP 3400

LP 2400

萌瑠「【ゴーストタッチ】発動！ライフを300払い、相手の手札を全て墓地に送る」

恭介「くっ……」

秋葉 萌瑠

LP 3100

LP 2800

萌瑠「ターンエンド」

秋葉萌瑠

手札3枚

6ターン目。

萌瑠「何も出来ないとは、このことを言うのよ」

恭介「死んでたまるか！ドロー、【サイクロン】発動！【深き霧】を破壊！！」

萌瑠「残念だね。【アメノサギリ】がいる限り、このカードは破壊されない」

恭介「ならば！チエーンしてリバースカード【諸刃の一撃】！相手モンスター1体を破壊する！俺は、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける！だが、攻撃力は0！！！」

萌瑠「そんなっ！」

互いのフィールドががら空気になる。

恭介「ターンエンド」

浜田恭介
手札0枚

7ターン目。

萌瑠「まさか、私の鉄壁が破れるなんてね。だけど、フィールドはがら空き。一気にいくわ。ドロー、【デスナイト】を召喚！」

デスナイト

ATK 1900

萌瑠「デスオワタ！」

恭介「があああっ！」

浜田 恭介

LP 2400

LP 500

萌瑠「魔法カード【デスカウントダウン】！手札を全て捨て、次の私ターンのドロカードが、モンスターカードだった場合、私の勝利となる」

恭介「強制勝利だと！」

萌瑠「そうよ。ターンエンド」

秋葉萌瑠

手札0枚

8ターン目。

恭介「運が悪ければ、死んでしまうのか……」

萌瑠「そうなるわね。もつとも、モンスターを引けなくても、ダイレクトアタックで決まるけどね」

恭介「クソツ……全然萌えないじゃないか！」

萌瑠「私はこの世界の死神。お前を殺すためのな」

恭介「死んでたまるか！ドロツ！」

萌瑠「殺してあげるよ。それを、望んでいる人がいる。君は幸せだね」

恭介「誰が幸せだ！俺は【高町なのは】召喚！！」

高町なのは

ATK 2000

恭介「攻撃！」

萌瑠「うっ」

秋葉 萌瑠

LP 2800

LP 2700

恭介「……ターンエンド」

浜田恭介

手札0枚

9ターン目。

萌瑠「いくよ」

恭介「……」

萌瑠「死ね！ドロー！！」

萌瑠はカードを見る。

恭介「……」

萌瑠「運のいいやつ。私は【サーチドロー】を発動。相手のライフ

を1000回復する代わりに、デッキの中から、好きなカードを2枚手札に加える」

浜田 恭介

LP 500

LP 1500

恭介「2枚……」

萌瑠「1枚目はコレよ。【お注射天使リリー】！」

お注射天使リリー

ATK 400

萌瑠「検診のお時間だー！」

恭介「400程度、なのはの敵じゃない！打てー！」

萌瑠「甘いよ」

恭介「なあっ！」

萌瑠「ダメージ計算時、攻撃力を3000ポイントアップする。代わりに、2000ポイント支払う」

秋葉 萌瑠

LP 2700

LP 700

お注射天使リリー

ATK 400

ATK 3400

萌瑠「お注射よ」

恭介「がっあああっ！」

浜田 恭介

LP 1500

LP 1000

萌瑠「速攻魔法【現状維持】！上がった攻撃力を維持する。ターンエンドよ」

秋葉萌瑠

手札0枚

10ターン目。

恭介「3400……」

萌瑠「首を斬ってあげるよ。優しく、優しくね」

恭介「俺は……死にたくない！ドローツ……！」

萌瑠「ムダムダア」

恭介「【立華奏】を召喚！」

立華奏

ATK 2000

恭介「効果により、1枚ドロ！」

萌溜「無駄だつて。そもそも、奏は自身の効果で、私にダメージは与えられない。万が一、リリーを倒しても無意味」

恭介「どうかな？【上条の剣】を装備！装備モンスターは効果が無効となり、攻撃するモンスターの効果も無効となる」

萌溜「えっ……」

天使が、天使を斬る。

秋葉 萌溜

LP 700

LP 0

萌溜「そ、そんな……」

萌溜が闇に消える。

そして、闇自体も消える。

拓夢「恭介！」

恭介「拓夢……」

理緒「どうしても、死にたくないんだね」

恭介「当たり前だ！」

理緒「でも私たちは恭介、お前を殺すよ」

そう言うと、理緒は部屋から居なくなつた。

拓夢「大丈夫か？」

恭介「一番いいコーヒー牛乳を頼む」

拓夢「任せな」

Episode 2 - Chapter 6 - (後書き)

今回の1枚

涼宮ハルヒ

レベル4 属性神

ATK 2000 DEE 1500

効果

このカードは1ターン目から攻撃ができる。自分フィールドに「キヨン」「朝比奈みくる」「長門有希」「古泉一樹」が存在する時にこのカードが自分フィールドにある時、自分の勝利となる

Episode 2 - Chapter 7 - (前書き)

第013話

ゴーストVSキャット

Episode 2 - Chapter 7 -

決闘場。

雅功「今日は、決闘をしてもらう。対戦相手は、すでに決まってる。モニターを見れ」

恭介は、モニターを見る。

恭介の対戦相手は、光輝だった。

光輝「今度は負けないぜ」

恭介「二度あることは、三度あるんだよ」

光輝「三度目の正直ともいうよ」

恭介「ふっ」

恭介と光輝は、デュエルディスクを構える。

桜花の対戦相手は、優希だった。

桜花「私に勝てるかしら？」

優希「勝ちます…です」

桜花「優希ちゃんの決闘、見せてもらおうよ」

優希「はい、なのです」

桜花「いくよ」

優希「はい!」

桜花と優希は、デュエルディスクを構える。

拓夢は、昨日恭介を襲った理緒と戦うことになった。

拓夢「生徒、だったのか……」

理緒「はい。2学期からここに来ました」

拓夢「闇のデュエルはしないのか?」

拓夢は、挑発するように言う。

理緒「私の目的は、浜田恭介の抹殺です。黒羽拓夢を消すことでは
ありません」

拓夢「なんで、恭介を殺す?」

理緒「それが、目的であり、それを望む人がいるからです。私はそ
の目的を叶える道具に過ぎません」

拓夢「恭介は殺させない!」

理緒「…迷惑です。繋ぎ止めないでください」

拓夢「何度でも手を差し伸べる。恭介は殺させるわけにはいかない！」

理緒「どうしてですか？」

拓夢「親友だからさ」

理緒「わかりません。何もわかりません。ただ、喰らいます」

拓夢「いくぞ！」

拓夢と理緒は、デュエルディスクを構える。

結愛の対戦相手は、香菜だった。

結愛「香菜、昨日は楽しかったよ」

香菜「私も、つまらなくはなかったわ」

結愛「いくよ」

香菜「ええ」

結愛・香菜「決闘！！」

佐倉	結愛	竹達	香菜
LP	4000	LP	4000

1ターン目。

結愛「先行は私。ドロ、【ゴーストルチア】を召喚！」

ゴーストルチア

ATK 1400

結愛「ターンエンド」

佐倉結愛

手札5枚

2ターン目。

香菜「ドロ、私は【キャットピング】を発動。手札のキャットと名の付くモンスターを通常召喚する。私は、【マネキング】を召喚！」

マネキング

ATK 1000

結愛「いきなり、レベル8のモンスター……………」

香菜「このモンスターは、相手モンスター1体の攻撃力を得る」

マネキング

ATK 1000

ATK 2400

香菜「攻撃！」

結愛「うっ……」

佐倉 結愛

LP 4000

LP 3000

結愛「このモンスターが戦闘で破壊されたとき、相手モンスターを破壊する！」

香菜「えっ！」

結愛「これで、がら空きだね」

香菜「めんどくさいことを……。リバーズカードを1枚伏せて、ターンエンド」

竹達香菜

手札3枚

3ターン目。

結愛「ドロー、【ゴーストブレイア】を召喚！」

ゴーストブレイア

ATK 1500

結愛「ダイレクトアタック！幻惑のポイズン！」

香菜「きゃあっ！」

竹達 香菜

LP 4000

LP 2500

香菜「うっっ」

結愛「リバーズカードを1枚伏せ、ターンエンド」

佐倉結愛

手札4枚

4ターン目。

香菜「ドロー、リバーズカード【猫の恩返し】！1ターン前に、相手プレイヤーが、私に攻撃しなかった場合、相手のライフを1000回復する。逆に、攻撃した場合、1000ポイントのダメージを与える！」

結愛「なによー！」

佐倉 結愛

LP 3000

LP 2000

香菜「【ドルジ】を召喚！」

ドルジ

ATK 2000

香菜「魔法カード【猫に小判】を発動。自分フィールドに猫がいるとき、2枚ドロウする！」

結愛「残念ねっ！リバーズカード【ただの屍のようだ】！モンスターを対象にするカードの発動と効果を無効にして破壊する！！」

香菜「うっとおしい……。攻撃！体当たり！！」

結愛「うわっ！」

佐倉 結愛

LP 2000

LP 1500

香菜「リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

竹達香菜

手札1枚

5ターン目。

結愛「ドロウ、魔法カード【死の床からの呼び声】！墓地に存在するアンデッド族モンスターを1体、手札に加える」

香菜「……」

結愛「魔法カード【遊戯王】！【ゴーストルチア】と【ゴーストル

チア】を融合！！」

香菜「融合……っ！」

結愛「【リライトルチア】をエクストラデッキより、融合召喚！」

リライトルチア

ATK 2800

結愛「さらに、装備魔法【ゾンビガン】を装備。攻撃力を500ポイント上げ、貫通能力を得る！」

リライトルチア

ATK 2800

ATK 3300

香菜「3300……っ！」

結愛「まだよ！速攻魔法【肉を斬らせて骨を断つ】！ライフを100になるまで下げ、下げた分を自分のモンスターの攻撃力が加える！！」

佐倉 結愛

LP 1500

LP 100

リライトルチア

ATK 3300

ATK 4700

香菜「……………」

結愛「私の勝ちね!」

香菜「(リバースカードは【魔法の筒】。このカードは、攻撃を無効にして攻撃力分のダメージを相手に与える。攻撃してきたら、私の勝ち!)」

結愛「終わりね!ルチアの攻撃!ガンシユートファイナレ!!」

香菜「甘いよツ!リバースカード【魔法の筒】!!」

結愛「なにーッ!!」

佐倉 結愛

LP 100

LP 0

香菜「私の勝ち」

結愛「なっ……………!!」

結愛対香菜。

勝者は、香菜だった。

他の決闘も終わり始めている。

恭介「スターライトブレイカー!!」

光輝「グアアアアッ!」

大野 光輝

LP 1400

LP 0

恭介「3連勝だな」

光輝「くっ……」

恭介対光輝。

勝者は、恭介だった。

拓夢「っ」

黒羽 拓夢

LP 1100

理緒「なかなかやりますね。それが、拓夢の守る力ですか?」

堀江 理緒

LP 900

拓夢「ああ。どんな理由かは知らない。だが、殺し屋に恭介は殺らせないぜ」

理緒「私は殺し屋ではありません。私は救世主です。拓夢たちにとつては、死神に見えるかもしれませんが」

拓夢「倒す！」

リオン・マグナス

ATK 3000

理緒「仮に私を倒しても、何も起こりませんよ？まあ、私に負けても何も起こりませんが」

竹内理緒

ATK 1700

拓夢「俺が、お前より強いって証明してやる！」

理緒「そうですか。仮に私より強くても無意味です。私の目的は拓夢ではない。恭介です」

拓夢「恭介は、俺より強い……とは言わないが、同じ強さがあるんだ。俺に負けることは、恭介に負けることだぜ」

理緒「……。なるほど。筋は通りますね。まあ、運も左右する決闘において、些細な筋にしか、なりません」

拓夢「なら、その些細な筋に刻め！魔神煉獄殺！！」

理緒「……………負けました」

堀江 理緒

LP 900

LP 0

理緒「私は、恭介を殺めます」

拓夢「お前を殺してでも阻止してやる」

理緒「私を消滅させても無駄です。他の2人が恭介を殺めます」

拓夢「なら、その2人も倒す！」

理緒「無駄です。仮に私たち3人を倒しても、私たちより強い奴が現れ、恭介を殺めます」

拓夢「なら、そいつらも倒す！」

理緒「……………」

拓夢対理緒。

勝者は、拓夢だった。

優希「…………負け、です」

釘宮 優希

LP 1000

LP 0

桜花対優希。

勝利は、桜花だった。

雅功「よし、全員終わったな。時間も時間だし、これにて、終わりとする。では、解散」

決闘が終わり、放課後となる。

何処かの部屋。

「始まりのときが来た。漸く願いが叶うときが来たのだ。くくくっ」
笑い声が反響する。

Episode 2 - Chapter 7 - (後書き)

今回の1枚

リオン・マグナス

レベル8 属性闇

ATK3000 DEE2500

効果

手札1枚を墓地に送ること、このターンの終了時まで攻撃力を1000ポイントアップする

Episode 2 - Chapter 8 - (前書き)

第014話

悠斗の闇

殺人事件勃発

Episode 2 - Chapter 8 -

1日前。

緑川財閥本社。
社長室。

ここに、悠斗の姿があった。

悠斗「……………」

「悠斗。お前は我が財閥の跡取りだ。だが、もういい。私の跡取りは、次男に託す」

悠斗「ちょ！？そ、そんな……………」

「話はそれまでだ。屑にようはない。さっさと、碧陽学園に戻れ」

悠斗「…は、はい……………」

現在。

寮。

悠斗の部屋。

悠斗「クソッ……………！力が……………力が欲しいッ……………！」

深夜。

中庭。

そこに、2人の生徒の姿があった。

「人間は要らないの。だから死んでもいい物なんだよ」

少女が、物騒なことを言う。

「ふざけるな！」

激昂する少年。

「酸素を出す分、雑草の方がマシだよ」

少女が、少年に近付く。

頸動脈が切られる。

「があ…ああ……」

「命は消えたら天国や地獄に行くって言うよね。まあ、死んだら終わりだけどね。黄泉の世界などないのだから」

翌日。

教室。

いつも、通り授業が行われていた。

雅功「当たり前だが、一様教科書通りに言うが、遊戯王は1ターン目に攻撃できない。ヴァイスシュヴァルツなら出来るがな。ここはテストに出るぞ。分からない奴はここだけでも、パソコンにコピー

しとけ
「

放課後。

校長室。

校長「来たか……」

光輝「来ました」

校長室に、恭介たちの姿があった。

校長「二週間後に学園祭があることは知っているな？」

桜花「知ってます」

校長「実は犯行予告が来た。学園祭までに、桜花を殺すと……」

恭介「……………」

優希「怖いです……………」

拓夢「返り討ちだ」

校長「見せしめとて、3年生が殺された」

結愛「どうして……………」

桜花「私のせいで……犠牲者が……………」

校長「いや、桜花君は悪くない。桜花君は被害者だ」

恭介「……………」

校長「犯行予告には、挑発的文面が多くあった。殺人事件を行う。捕まえられるものなら捕まえてみる。とかな」

香菜「殺人とか、馬鹿げてるわ」

校長「ああ、そうだな。君たちを呼んだのは他でもない。気よつけてくれ。勿論、こちらでも最善の注意をとる」

深夜。

「どっしたの？」

少年が少女に尋ねる。

「死んでくれたら、嬉しいかな」

頸動脈が切られる。

「があ…ああ……………」

絶命する。

「やはり、血はいいね。興奮するよ。大声で笑いたいよ」

翌日。

校長室。

校長「なんのために……」

晋也「殺人が2日連続で起きた」

哲平「毎日、殺人が起きる可能性がある」

人志「我々も努力するが、君たちも注意しといてくれよ。犯人の真の狙いは君だ」

桜花「はい」

深夜。

「消えてくださいよ」

頸動脈を切る。

「ぐああ……ああ……」

その時だった。

悠斗「貴様……何やってっ！」

たまたま、悠斗が、殺人の現場を目撃する。

「見られたなら、仕方ない」

少女が、悠斗を殺そうとする。

「待て」

奥からもう1人現れた。

悠斗「なっ……………！」

「君は憎んでる筈だ。恭介をね」

悠斗「それは……………」

「闇を得よ、悠斗。お前には素質があるはずだ。全てを焼き尽くす憎しみの炎が、身体の奥で燃え滾るのを、待っている」

悠斗「……………」

「闇に全てを委ねたら？闇は全てを受け入れてくれる」

少女が楽しそうに言う。

悠斗「闇…手にいいれば、奴に勝てるのかか……………」

「勝てるても。だが、人間に闇を作るなど不可能だ。だが、発生源を自分ではなく、カードに封じ込めるならば、そして闇を操れるならば、悠斗、お前は闇の力を得よう」

悠斗「闇……………。そしたら……………」

「悠斗、お前を呼んだのは仲間にしたかったからだ」

悠斗「仲間だと！」

「憎いだろ？恭介がッ！自分を、エリートコースまっしぐらの自分を一気に地獄へと落とした恭介がッ！！」

悠斗「俺は…憎い…恭介がッ！！」

「ならば、闇の試練を受けよ。闇が悠斗、お前を認めたらならば、闇はお前に力を貸すだろう」

悠斗「闇…俺は力が欲しい。全てを倒す力がッ！！」

「闇の決闘……」

周りが闇に包まれる。

悠斗「闇……」

「試練だよ悠斗。闇が君に味方するかのね」

悠斗「……」

「闇の決闘。それは、敗者は闇に喰われ死ぬ」

悠斗「なに……！！」

「つまり、私か、君のどちらかは死ぬね」

悠斗「なら、お前は死ぬ」

地獄の歌姫ミーシャ

ATK 800

鈴「このモンスターは、手札を1枚捨てる事で、このターンの終わりまで相手モンスターの攻撃力を0にする。デスソング！」

青眼の究極竜

ATK 4500

ATK 0

悠斗「ちっ」

鈴「砕け散れ！アポルトファイ！！」

悠斗「リバースカード発動！」

爆風が起きる。

鈴「青眼を破壊」

悠斗「どうかな？」

鈴「なっ！」

青眼の白龍

ATK 3000

青眼の白龍

ATK 3000

青眼の白龍

ATK 3000

悠斗「【融合解除】だ！」

鈴「だが、攻撃力は0になる。くらえ！」

青眼の白龍

ATK 3000

ATK 0

悠斗「ぐあっ！」

緑川 悠斗

LP 4000

LP 3200

鈴「リバースカードを2枚伏せターンを終えるわ」

柊鈴

手札2枚

3ターン目。

悠斗「ドロー、いくぞ！滅びのバーストストリーム……！」

鈴「きゃああっ！」

柊 鈴

LP 4000

LP 1800

悠斗「終わりだ！バーストストリーム！！」

鈴「きゃああっ！」

悠斗「ふっ」

鈴「なんてね」

鈴の口が嘲笑う。

悠斗「なっ！」

鈴「リバースカード【拷問車輪】！このカードに指定されたカードは攻撃、表示形式の変更が出来ない。私は攻撃モンスター、青眼を選択するわ！！」

悠斗「くっ…ターンエンド」

緑川悠斗

手札2枚

4ターン目。

鈴「ドロー、スタンバイフェイズに【拷問車輪】の効果により50ポイントのダメージを与えるわ」

緑川 悠斗

LP 3200

LP 2700

鈴「私は、リバーズカード【破滅の召喚式】を発動する。自分の墓地のモンスターが闇属性、相手の墓地のモンスターが光属性の時、その2体を除外する!!」

悠斗「青眼……」

鈴「そして、デッキから【シャイニング・ダーク・カオス】を召喚する!!」

シャイニング・ダーク・カオス

ATK 3500

悠斗「青眼を超えるだと……」

鈴「モンスター効果、手札を全て捨てて1枚に付き1000ポイント攻撃力を上げる」

シャイニング・ダーク・カオス

ATK 3500

ATK 3800

鈴「混沌の炎!!」

悠斗「ぐああっ!!」

緑川 悠斗

LP 2700

LP 1900

鈴「モンスター効果、手札が0枚の時、破壊したモンスターを除外しもう1度攻撃が出来る!!」

悠斗「なんだと……!!」

鈴「混沌の炎!!」

悠斗「ぐあああっ!!!!」

緑川 悠斗

LP 1900

LP 1100

鈴「【拷問車輪】が破壊されちゃったわ。攻撃しない方が良かったかも。ターンを終えるわ」

柊鈴

手札0枚

5ターン目。

悠斗「ドロー、俺はリバーズカードを1枚伏せて【デコイドラゴン】
を守備表示でターンエンドだ」

デコイドラゴン

DEF 200

緑川悠斗

手札1枚

6ターン目。

鈴「ドロー、そのモンスターは攻撃対象になった時、墓地からレベル7以上のドラゴン族を特殊召喚して攻撃対象を替えるカードだね」

悠斗「……………」

鈴「だけどもダだよ。3800に勝てるモンスターなど君の墓地にはいない」

悠斗「戯れ言はいい。攻撃するのか？しないのか？」

鈴「敗北の恐怖を教えてあげるよ。永続魔法【拷問処刑】！守備モンスターを破壊した時、相手のライフを半分にする！！」

悠斗「くっ！！」

鈴「攻撃！混沌の炎！！」

悠斗「効果発動！墓地より【青眼の白龍】を特殊召喚！！」

青眼の白龍

DEF 2500

鈴「砕ける！」

悠斗「ぐあっ！」

鈴「永続魔法【拷問処刑】効果発動！ライフを半分にするわ！！」

悠斗「ぐう」

緑川 悠斗

LP 1100

LP 550

鈴「【青眼の白龍】を除外し攻撃！混沌の炎！！」

悠斗「があっ！」

緑川 悠斗

LP 550

LP 275

鈴「次のターンで終わりね。闇に喰われなさい。見ててあげるよ。ターンエンド」

柊鈴

手札0枚

7ターン目。

悠斗「（負けたら…死ぬ…）」

鈴「早く引きなさい」

悠斗「……………」

鈴「たとえば、私でも敗北した者は死ぬ。闇を持つものでも。最も君には闇が味方しなかったようだけどね」

悠斗「俺は死にたくない…どんな手を使ってでも勝ちたい…俺は…負けたくないいい!!」

その時、闇が悠斗に流れ込む。

闇が悠斗の周りに纏わりついた。

鈴「闇が……………」

悠斗「俺のターン！ドロー!!」

殺気が、鈴を襲う。

鈴「うつ」

悠斗「リバーズカード【異次元からの帰還】！ライフを半分支払い、除外されているカードを可能な限り特殊召喚する!!」

緑川 悠斗

LP 275

LP 137

青眼の白龍

ATK 3000

青眼の白龍

ATK 3000

青眼の白龍

ATK 3000

鈴「所詮、ムダ！3000では倒せないわ……！」

悠斗「闇を……俺に従え……！」

鈴「青眼に闇が……青眼に憑依したの……！」

青眼は光を失い、漆黒の闇を包まれている。

悠斗「魔法カード【フォース】！」

鈴「闇の魔法……！」

悠斗「手札を1枚捨て、相手プレイヤーのライフポイント分の攻撃力を自分フィールドのモンスターは得る」

青眼の白龍

ATK 3000

ATK 4800

青眼の白龍

ATK 3000

ATK 4800

青眼の白龍

ATK 3000

ATK 4800

鈴「私が……私が……」

悠斗「死ねえ！滅びのデスバーストストリーム！」

鈴「きゃあああああっ！」

柊 鈴

LP 1800

LP 0

鈴「ぐはっ……本当に闇を……」

吐血する鈴。

鈴「イヤ…助け」

闇が消える。

鈴と一緒に。

「勝ったか」

悠斗「負けると思ったのか」

「いや、お前なら勝てると思っていた。さあ、闇を手に入れた君に他の奴など虫けら当然。殺しまくれ」

悠斗「ああ」

「命はな、強き者が生き、弱き者が逝く。雑魚は強者の糧に過ぎない。殺せ、殺しまくれ」

悠斗「分かっている」

「命は、金より軽いんだ。殺し屋がいい例だ。死ね！ゴミどもっ！」

すでに始まっている。

死の余興。

殺人と言う余興が。

「始めようか、終焉前の祭り。楽しい楽しい死の踊り。狂え、くくくっヒヤハハハ」

夜の中庭に、笑い声が響き渡る。

Episode 2 - Chapter 8 - (後書き)

今回の1枚

青眼の白龍

レベル8 属性光

ATK3000 DEE2500

効果

なし

Episode 2 - Chapter 9 - (前書き)

第015話

浜田恭介の事件簿

オタクからのダイニングメッセージ

Episode 2 - Chapter 9 -

寮。

理緒の部屋。

そこに、恭介と拓夢が訪れていた。

理緒「その事件は知っています」

拓夢「お前の仕業なのか？」

理緒「違います」

恭介「じゃ、仲間か？」

理緒「違います。私たちの目的は、浜田恭介。あなただけです。他の人を殺す理由はありません」

拓夢「じゃあ、誰なんだよ！」

理緒「私に当たらないでください」

恭介「じゃあ、桜花に殺害予告した奴は君たちじゃないんだね？」

理緒「すみません。一概にはそうとは言えません」

恭介「どういうこと？」

理緒「私は人間ではありません」

拓夢「だろうな。闇の決闘とか、人間技じゃねえ。…現実世界に闇の決闘なんていう非科学的なものがあるなんてな」

理緒「私たち3人は、恭介を殺すためにこの世界に来ました。その副作用で、欠陥、バグですね。バグが発生して、人間に憑依してしまっただと思えます。そして、目的だけを果たす、心のない道具として殺人を繰り返している」

拓夢「なんだ、お前と同じじゃん」

理緒「…そうですね。でも、向こうは欠陥ですから。正確には違います」

拓夢「怒った？」

理緒「…いえ、そんなことはありません」

恭介「でも、理緒ちゃんの目的は俺だろ。だったらなんで桜花を…
……」

理緒「欠陥ですからね。目的がズレてしまっただと思えます。でも、核は変わりませんので、私たちと同じ、あるべき姿に戻そうとしている。桜花を殺すことにも、意味があると考えますね。私にはどんな意味があるか、分かりかねますが」

拓夢「あるべき姿だと！本当のあるべき姿は、お前たちの居ないことだ！！」

理緒「…私たちのあるべき姿は、恭介を殺すこと」

恭介「どうして、そこまで……」

理緒「目的だからです。前にも言いましたが、恭介を殺すことで喜ぶ人がいるのです」

拓夢「誰だよそれは！」

理緒「分かりません。私たちは道具ですから」

恭介「桜花を殺そうとしてる奴は何人いる？誰に憑依してるの？助けれるの？」

理緒「バグとは、思いがけず現れるものです。何人か、誰に憑依しているか、私には分かりません。ですが、最後の質問には答えられません。無理です。憑依された人間は、憑依された瞬間に、全てをコントロールされます。憑依した奴を倒したら、憑依された人間も死にます」

拓夢「そんな……」

恭介「ありがと。教えてくれて」

2人は、部屋を出ていく。

理緒「……………」

深夜。

「血を見させてもらいます」

「うわぁぁぁぁ」

翌日。

この日、恭介たちは校長室に呼ばれていた。

校長「また、殺された」

恭介「また、ですか……」

校長「しかし、被害者は最期の力で犯人へのヒントを書いていた」

雅功「初耳だぞ」

晋也「確かに、聞いてないな」

校長「見つけた人志との考えが一致してな、隠していた」

哲平「どういう事だ」

人志「犯人は生徒とは限らない。先生も含む、と言つことですよ」

結愛「で、何て書いてたんですか？」

香菜「そうね、気になるわ」

優希「私も気になります」

「

光輝「で、何と」

校長「『泉ハルヒ』と血文字で書かれていた」

人志「『泉』が上で下に『ハルヒ』と書いてあった。しかし生徒にも先生にも、ハルヒや泉と言う名前や苗字の人はいない」

恭介「被害者は犯人の名前を知らなかったんでしょうか？」

校長「それは分からない」

光輝「でも、俺だったらストレートに犯人の名前を書くよ。勿論、名前を知ってたらだけど」

桜花「じゃあ、知らなかったんだらうね」

人志「被害者は、犯人の名前を書けなかった。だから、ヒントにした、と言うことだらうな」

校長「実は、人志が見つけたのは悲鳴が聞こえてすぐなんだ。急いで、校舎と寮を閉鎖したら、5人が帰ってきたんだ。犯人はその中にいるだらう」

人志「勿論、1人とは限らないし、この中にはいないかもしれない」

桜花「5人に会わせてもらえますか？」

校長「いいだらう」

恭介たちは、特別休憩室と呼ばれる部屋に入った。

中には、5人の生徒がいた。

人志「自己紹介してくれ」

「何でいまさら」

校長「頼む」

武人「“子安武人”だ」

紗友里「私は“矢作紗友里”」

綾「“平野綾”よ」

紘「“下野紘”です」

静「“伊藤静”……」

恭介「（この中に犯人が……いるのだろうか……）」

校長「全員2年だ。被害者も2年だ」

恭介「泉、そしてハルヒ。泉はこなたを指しているのだろうか」

光輝「こなた？」

桜花「こなたって、アニメの？」

恭介「そう、『らきすた』に出てくるキャラクター、『泉こなた』」

結愛「ハルヒは涼宮ハルヒ？」

恭介「そう、『涼宮ハルヒの憂鬱』に出てくるキャラクター、『涼宮ハルヒ』」

拓夢「それが何だ？」

恭介「実は、アニメの声優は2つのキャラクターとも同じ声優だ」

人志「その名前は？」

恭介「『平野綾』」

綾「!!!!!!」

校長「まさか……………」

綾「ち、違っ！」

恭介「被害者はオタクですか？」

晋也「ああ、オタクだった」

恭介「犯人の名前の画数が多かった。しかし、平仮名で書けば、同姓同名の人に疑いがいくかもしれない。だから、このヒントにした」

綾「まってよ！私と同姓同名な人なんてこの学校にはいないし、私は犯人じゃない!!」

恭介「晋也先生」

晋也「何だ？」

2人は誰にも聞こえない声で話していた。

恭介「いますか？」

晋也「ああ、確かにいる」

恭介「そうですか」

武人「てか、もういいだろ？いい加減、ここから出せよ」

人志「犯人は君たちの中にいる可能性が高い」

紗友里「綾が犯人で決まりでしょ」

紘「僕もそう思います」

静「賛成ね。警察につき出して、終わりよ」

綾「私じゃないよお……………」

人志「犯人が1人とは決まっていない。全員という事もある」

武人「俺が犯人だと言いたいのか」

校長「落ち着いて」

恭介「犯人は、この中の1人ですよ。少なくとも、被害者のメッセージはね」

桜花「分かったの？」

恭介「ああ」

哲平「で、誰だ」

武人「決まりじゃねーか、綾だろ」

綾「私じゃ……………」

恭介「犯人はあの被害者の証拠に気付いていた。だけど、消さなかった。逆に使った」

結愛「どういうこと？」

恭介「被害者が書いたメッセージに書き足した」

拓夢「書き足した？」

恭介「つまりだ、上に書いてあった『泉』は被害者の。下に書いてあった『ハルヒ』は犯人が書いた」

光輝「じゃ、実際は『泉』だけがメッセージ」

恭介「そうだ、『ハルヒ』があれば『泉』は『泉こなた』と勝手に思ってしまう。しかし『ハルヒ』がなければ『泉』は『泉こなた』

ではなくなる」

雅功「じゃ、何なんだ？」

恭介「『泉』は名字じゃない。名前だったんだ」

優希「名前……………」

恭介「『瀬川泉』」

校長「だが、そんな生徒は……………まさか、声優!？」

恭介と「そう、声優の名は、『矢作紗友里』」

紗友里「!!!!!!」

人志「お前か!」

紗友里「ち、違う!私じゃない!!」

恭介「これは王手じゃない。詰みなんだよ」

紗友里「ちが……………」

恭介「紗友里だけ、同姓同名がいるんだよ。漢字は違うけどな。さつき、確認した」

晋也「確かにいる」

光輝「さつきはそんな話を……………」

恭介「正体を現しやがれ!!」

紗友里「……………」

紗友里の口が笑う。

紗友里「きひひひひひ」

紗友里から闇が出て、恭介を包み込む。

恭介「これは……………」

紗友里「その通りだよ。全て当たっているよ。その推論は」

恭介「……………」

紗友里「きひひひひひ」

恭介「桜花が目的なら直接来ればいいじゃないか、何故他の人を」

紗友里「見せしめ。苦痛を味わってもらおう」

恭介「貴様を、命を弄ぶ輩を許さねえ！」

紗友里「始めよう……………闇の決闘を！」

祥基・紗友里「決闘!!」

浜田 祥基 矢作 紗友里 LP 4000 LP 4000

1ターン目。

恭介「俺の先行だ！ドロー、【桂ヒナギク】を召喚！！」

桂ヒナギク

ATK 1900

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンドだ」

浜田恭介

手札4枚

2ターン目。

紗友里「きひひひひひ。私を鈴と同じ屑と考えると痛い目にあうよ。ドロー、これは君の言う詰みの手札だよ」

恭介「……………」

紗友里「このターンで、君を詰んであげるよ」

恭介「なんだと」

紗友里「魔法カード【サイクロン】！君のリバーズカードを破壊する！！きひひひひひ」

恭介「くっ……………」

紗友里「【八汰鳥】を召喚する」

八汰烏

ATK 200

紗友里「魔法カード【スピリット・バースト】！手札のスピリットモンスターを1体、墓地に送り、相手モンスターを破壊する！！」

恭介「なあ！」

紗友里「ダイレクトアタック！」

恭介「ぐう」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3800

紗友里「このモンスターにダイレクトアタックを受けたプレイヤーは次のターン、ドローを行えない」

恭介「くっ」

紗友里「さらに、魔法カード【消えゆく運命】を発動する。互いに手札を全て捨てる」

恭介「そ、そんな……………」

紗友里「ターンエンド時にスピリットモンスターは手札に戻る」

矢作紗友里
手札1枚

3ターン目。

恭介「……………」

紗友里「分かる？君はカードを手札に加えない。永遠に」

恭介「……………」

紗友里「これは無限ループ。サレンダーしていいよ」

恭介「ああ、俺の負けだ」

紗友里「きひひひひひ」

恭介「なんて、言うと思ったか？」

紗友里「なに！」

恭介「墓地にある罫カード【オタク ニート】を発動する」

紗友里「なんだと！」

恭介「相手の魔法効果、ああ、君の【サイクロン】の事だ。魔法効果により破壊されたこのカードの次に破壊されたカードを手札に加える」

紗友里「次……………！」

恭介「そう、蘇れ！」

桂ヒナギク

ATK 1900

恭介「ダイレクトアタック!!」

紗友里「きゃあああ！」

矢作 紗友里

LP 4000

LP 2100

恭介

ターンエンドだ

浜田恭介

手札0枚

4ターン目。

紗友里「ドロー、私はリバーズカードを1枚伏せて、モンスターを伏せる。ターンエンドだよ」

矢作紗友里

手札0枚

5ターン目。

紗友里「くっ……………」

恭介「ドロー、【愛沢咲夜】を召喚する」

愛沢咲夜

ATK 1600

恭介「攻撃！」

紗友里「ぐう……………」

恭介「ヒナギクのダイレクトアタック！」

紗友里「【Dark Back】！ダイレクトアタックダメージを相
手にも与える！！」

恭介「ぐあっ……………」

浜田 祥基	矢作	紗友里	LP	3800	LP	2100
		LP	1900	LP	2000	

紗友里「オタク風情がこの私にここまで……………」

恭介「オタクを差別するな！」

紗友里「きひひひひひ」

恭介「……………ターンエンド」

浜田 恭介
手札 0 枚

6 ターン目。

紗友里「ドロー、魔法カード【天よりの宝札】！互いのプレイヤーは手札を6枚にする！！」

恭介「手札増強か……………」

紗友里「魔法カード【生贄の強制剤】！リリース素材を相手のモンスターで賄う！！」

恭介「なんだと！」

紗友里「2体をリリースし【八俣乃竜皇】をアドバンス召喚！！」

八俣乃竜皇

ATK 3500

紗友里「死惨流破！！」

恭介「ぐあああああつ！」

紗友里「残念だが、このモンスターが与える戦闘ダメージは半分になる」

浜田 祥基

LP 1900

LP 150

紗友里「永続魔法【スピリット霊体維持装置】を発動する。スピリットモンスターはターンエンド後もフィールドに残り続ける。コストで手札を全て捨てるけどね」

矢作紗友里

手札0枚

7ターン目。

恭介「ドロー、このターンでお前を倒す！」

紗友里「3500を超えるモンスターなど、この限られた1ターンで出せると？このモンスターは貫通を持つ。守りでは勝てないよ」

恭介「倒すと言っただろう」

紗友里「そんな事……………」

恭介「魔法カード【死者蘇生】！」

桂ヒナギク

ATK 1900

恭介「フィールド魔法【オタクの聖地 秋葉原】！！」

紗友里「だが、攻撃力が1000ポイント上がったっても2900ポイント。3500を超すことは出来ない」

恭介「攻撃！」

紗友里「バカめ！返り討ちだ！！」

桂ヒナギク

ATK 1900

ATK 2900

恭介「ヒナギクがモンスターを攻撃する時、攻撃力を1000ポイント上げる！」

桂ヒナギク

ATK 2900

ATK 3900

紗友里「そ、そんなぁ……………！」

矢作 紗友里

LP 200

LP 0

恭介「俺の勝ちだ」

紗友里「きひひひひひ。流石だよ、きひひひひひ。私は地獄へいく。だが、君も直ぐに地獄へ来るだろう。きひひひひひ」

紗友里が消える。

闇が晴れる。

恭介「……………」

桜花「祥基！大丈夫！？」

恭介「ああ」

光輝「ねえ…………、今のは何…………」

拓夢「…………話す、しかないんじゃないか？」

恭介「ああ……………」

恭介と拓夢は、今までのことを話す。

雅功「そんな、非現実的な…………ことが……………」

拓夢「だけど、現実です」

雅功「…そのようだな。だとすると、警察はアテにならない。どうするべきか、だな」

桜花「……………」

Episode 2 - Chapter 9 - (後書き)

今回の1枚

八汰烏

レベル2

属性風

ATK 200 DEE 100

効果

このカードは特殊召喚できない。召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた場合、次の相手ターンのドローフェイズをスキップする

Episode 2 - Chapter 10 - (前書き)

第016話

浜田恭介、敗北？

ライフポイント0！

Episode 2 - Chapter 10 -

先生たちや、友達に、恭介と拓夢は、闇の決闘について、知っている限りのことを話した。

世間体を気にいたのか、碧陽学園の殺人事件、そして失踪事件は、恭介にはどうやったかは分からないが、表に出ることはなかった。

翌日。

寮。

拓夢の部屋。

拓夢「前、投稿した曲が、100万再生を突破した」

恭介「マジか!？」

拓夢「ああ。コメントも50万コメを突破している」

恭介「いやー、ニコ動は結構見てるけど、怖くて見れなかったんだよなー」

拓夢「コメントでは、『新作待ってます』と言うコメントもあるんだ。新作うぷろっぜ!」

恭介「いいね、作る作る!…お、タグに『期待の新人』が。…くく、有名Pになつてやるぜ!」

拓夢「で、次は何を投稿する」

恭介「そうだな……。『名前を呼んで』のような、片思いソングか、『オタク パラダイス』のような、電波ソングでいくかだな」

拓夢「話題性をとるなら、後者だが、既に名は知れわたっている。次は、片思いソングで、女子のファンを獲得しよう」

恭介「お主、策士やのう。作詞してるだけに」

拓夢「うまい！」

恭介「ありがとう」

徹夜で、曲を作り上げていく。

翌日。

雅功「もうすぐ、学祭だ。だが、浮かれるなよ。屑はすぐに退学になるからな」

授業が終わり、放課後となる。

恭介は、席を立とうとした時、1人の生徒に話し掛けられた。

「ねえ、恭介でいいんだよね？」

恭介「ああ。ええと……。ゴメン、名前は？」

「僕は“澤村由衣”。理緒の仲間だよ」

恭介「！」

由衣「僕が、お前を倒す！そうしたから、僕は理緒たちより強いて証明できる！！」

由衣の周りから、僅かに闇が現れる。

恭介「待て！タイム！タンマ！」

由衣「何？3分間だけ、待ってあげるわ」

闇が消える。

恭介「ありがとう。ココには生徒が沢山いるんだ。これ以上、被害を拡大させたくない」

由衣「いいわ。なら、屋上に行きましょう！」

由衣は、恭介の提案を受け入れ、恭介を屋上に連れ込んだ。

恭介は、優希が居るのではないかと心配したが、杞憂に終わった。

恭介「…本気？」

由衣「勿論、お前を倒して僕は理緒たちを越える！」

恭介「どういうこと？」

由衣「理緒たちとは仲間であり、敵なんだ。簡単に言えば、ライバルだね。僕たちは、お前を殺すことが目的。だが、それは自分であ

りたい。だから、僕はお前を殺し、僕が、一番優れているって分かってらせるんだ！」

恭介「……………」

由衣の周りから、闇が現れ始める。

由衣「闇の決闘で、お前を殺してやんよ！」

恭介「俺は死なない！」

恭介は、デュエルディスクをセットする。

由衣「僕は勝つ！」

由衣も、デュエルディスクをセット……………。

由衣「あれ……………？」

由衣が慌て出す。

恭介「？」

由衣「デュエルディスク…寮に置きっぱなしだ……………」

恭介「じゃあ、決闘は中止だな。俺も、由衣ちゃんを殺したくないし」

由衣「バ、バカにするな！僕に情けをかけるな！僕は強いんだ！」

恭介「いや、別に情けなんか……ただ、本当のことを……」

由衣「ふえ」

水色のツインテールが揺れる。

由衣「…黙れ！今、ここでお前が死ぬことに変わりはない！現れよ、闇の化身！！」

闇の一部が變形し、人の形になる。

千留乃「超羽千留乃”。参上！」

由衣「奴を倒すのよ！」

千留乃「あたいに勝つなんて不可能ね！」

千留乃は、デュエルディスクをセットする。

恭介「仕方ない」

恭介は構える。

恭介・千留乃「決闘！！」

浜田 恭介 超羽 千留乃

LP 4000 LP 4000

1ターン目。

千留乃「あたいのターン！ドロー、あたいは【プフケースト】を召喚ね！」

プフケースト

ATK 1200

千留乃「リバースカードを1枚伏せ、終わりね！」

超羽千留乃

手札4枚

2ターン目。

恭介「ドロー、【グロイドドラゴン】を召喚！」

グロイドドラゴン

ATK 1900

恭介「モンスター効果により、500ポイントのダメージを与える」

千留乃「きゃあっ」

超羽 千留乃

LP 4000

LP 3500

恭介「攻撃！グロイサンダーH！！」

千留乃「リバースカード【氷結病欠】！攻撃モンスターの攻撃力を

0にする!!」

恭介「なにっ!」

グロイドラゴン

ATK 1900

ATK 0

千留乃「あたいの反撃!プリザード!!」

恭介「それを言うなら、プリザードじゃ?」

千留乃「うるさいうるさいうるさい!!」

恭介「ぐあっ!」

浜田 恭介

LP 4000

LP 2800

千留乃「このモンスターが、相手に戦闘ダメージを与えた時、相手フィールドのカードゾーンを1カ所使用不可にするわ。あたいは、墓地を選択する!」

恭介「墓地をつ!」

墓地にあるカードが、消えていく。

千留乃「墓地が消滅したことにより、カードたちは除外される」

恭介「除外だと……」

千留乃「そう！もう、墓地にカードを送れない。あたいたら最強ね！」

恭介「リバーズカードを1枚伏せ、ターンエンド」

浜田恭介

手札4枚

3ターン。

千留乃「ドロー、あたいは【プフェースト】をリリースして、【プフナイト】をアドバンス召喚！」

プフナイト

ATK 2300

千留乃「ダイレクトアタック！」

恭介「リバーズカード【攻撃の無力化】！」

千留乃「速攻魔法【氷結破壊】！畏の発動と効果を無効にして破壊する！！」

恭介「な……」

千留乃「終わりねっ！」

だが、攻撃はキャンセルされない。

千留乃「どうして!?!」

恭介「カウンター罠に、速攻魔法は使えない。基礎中の基礎じゃないか」

千留乃「うるさいうるさいうるさい!リバーズカードを1枚伏せ、終わりね!」

超羽千留乃

手札3枚

4ターン目。

恭介「ドロー、【強欲な壺】を発動!2枚ドローする!」

千留乃「リバーズカード【氷結破壊】!今度こそ破壊ね!」

恭介「……………」

千留乃「まさか、忘れてたの?バカね、超パーね!」

恭介「いや、全ては計画通り!」

千留乃「え!?!」

恭介「魔法カード【サンダーボルト】!相手モンスターを全滅だ!」

千留乃「そんなっ!?!」

恭介「【堀崎梓】を召喚!」

堀崎梓

ATK 2000

千留乃「うわっ!」

恭介「ダイレクトアタック!」

千留乃「固有結界!」

恭介「ダメだコイツ、はやくなんとかしないと……」

勿論、固有結界など存在せず、ダイレクトアタックが決まる。

千留乃「う…う…う…」

超羽 千留乃

LP 3500

LP 1500

恭介「リバーズカードを1枚伏せ、ターンエンド」

浜田恭介

手札2枚

5ターン目。

千留乃「ドロー、あたいは【氷の妖精チルノ】を召喚！」

氷の妖精チルノ

ATK 1400

千留乃「チルノがフィールドにある限り、チルノのいるゾーン一直線上以外の、モンスター、魔法・罠ゾーンは使用不可になる！」

恭介「つまり、真ん中以外は使用不可になるってことか」

千留乃「その通り！これで、お前のモンスターは氷漬けに……」

恭介「俺のモンスターは、真ん中にいる。よって無事だ。ついでにリバースカードもな」

千留乃「なにー！」

恭介「ちゃんと、フィールドを見とけよ」

千留乃「うるさいうるさいうるさい！行くわよ！【アイシクルフォール】を装備！攻撃力アップ！」

氷の妖精チルノ

ATK 1400

ATK 2200

千留乃「攻撃！アイシクルフォール！」

恭介「リバーズカード【オタクの仲裁】！攻撃を無効にする！！」

千留乃「チルノに常識は通用しない！チルノに魔法・畏は効かない！！」

恭介「な……に……！！」

浜田 恭介

LP 2800

LP 2600

千留乃「リバーズカードを1枚伏せ、終わりね！」

超羽千留乃

手札1枚

6ターン目。

恭介「ドロ、くっ……【西沢歩】を守備表示」

西沢歩

DEF 1000

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札1枚

7ターン目。

千留乃「ドロー、魔法カード【守備封じ】！守備表示モンスターを攻撃表示にするー！！」

恭介「なあっ！」

西沢歩

ATK 1600

千留乃「さらに、魔法カード【おてんば娘】を発動！このターン、2回攻撃が出来る」

恭介「なんだと！」

千留乃「これで、あたいの勝ちね！アイシクルフォール！！」

恭介「ぐあああっ！」

浜田 恭介

LP 2600

LP 2000

千留乃「終わりね！アイシクルフォール！！」

攻撃が、恭介へ向かう。

恭介「くっ……！！」

千留乃「勝った！」

恭介「ぐああああああああああああああっ！」

浜田 恭介

LP 2000

LP 0

恭介「……………」

千留乃「あたいの勝ちね！」

恭介「まさか……………ここまで……………」

千留乃「闇に消えなさい！」

恭介「う……………」

そのときだった。

恭介のフィールドにモンスターが現れた。

金色の闇

ATK 2400

千留乃「どうして……………」

恭介「俺のフィールドをよく見てみるんだな」

千留乃「なっ！…それはっ！」

恭介「【魂のリレー】。ライフポイントが0になった時、手札のモンスター1体を特殊召喚し、デュエルの勝敗をそのカードに託すカード。つまり、このモンスターが、フィールドを離れた時、俺の負けとなる」

千留乃「あたいの勝ちだと思ったのに！」

超羽千留乃

手札0枚

8ターン目。

恭介「ドロー！」

千留乃「……………」

恭介「いいカードを引いたぜ」

千留乃「えっ!?!」

恭介「【天よりの宝札】！互いのプレイヤーは、手札が6枚になるように、カードを引く!！」

千留乃「互いに、6枚ドローね」

恭介「ああ、でも、俺の場合、すぐに0枚になるけどね」

千留乃「え？」

恭介「ヤミの効果、手札1枚を捨てる度に、攻撃力200ポイントアップ！俺は6枚捨て、1200ポイントアップする！！」

金色の闇

ATK 2400

ATK 3600

恭介「攻撃！」

千留乃「リバーズカード【マイナスK】！！」

恭介「マイナス？」

千留乃「あたいのチルノの氷は絶対零度より冷たいはずだから、マイナスをつけてやる。あたいたら最強ね！！」

恭介「絶対零度は温度にすると約マイナス273度だから、それなマイナスつけたら、プラスになるけど？」

千留乃「え……？」

恭介「もしかして??」

千留乃「うるさいうるさいうるさい！！【マイナスK】の効果で、攻撃力が273倍アップする！」

恭介「なんだとっ！そんなぶっ壊れカードが！存在するのか！！」

千留乃「我々の使うカードは、我々が作り出している。言わば、オリカなのだ。どうにでもなる。死ねえ！」

恭介「そんなア！」

超羽 千留乃

LP 1500

LP 0

千留乃「っ！どうしてっ！！」

恭介「…チルノを試してみろ」

千留乃「なっ!?!」

氷の妖精チルノ

ATK 0

千留乃「ど、どおして……………」

恭介「よくテキストを試してみる。炎属性限定じゃないか。逆に、水属性はダウンって書いてある」

千留乃「そ、そんなあ……………！」

千留乃が闇と共に消えていく。

由衣「……………」

恭介「……………」

由衣「き、今日は引き分けだからねっ！」

由衣は、走って屋上を出ていった。

その途中、転んだ音が聞こえた。

Episode 2 - Chapter 10 - (後書き)

今回の1枚

金色の闇

レベル5 属性闇

ATK 2400 DEE 2100

効果

手札を墓地に送ること、1枚につき200ポイント攻撃力をアップする

E p i s o d e 2 - C h a p t e r 1 1 - (前 書 き)

第017話

二次元へのパスポート

放課後。

寮。

拓夢の部屋。

拓夢「よし、投稿するよ」

恭介「ああ」

拓夢が、パソコンのマウスを動かし、ポインターが、投稿の上にくる。

拓夢「いくぞ」

恭介「おう！」

カチツと音を立て、拓夢がマウスを左クリックする。

すると、画面上の投稿ボタンが押され、投稿を受け付けましたの文字が表示される。

拓夢「重いと、すぐ投稿できないからな。今回はすんなり行けたな」

恭介「そうだな。どのくらい伸びるか楽しみだ」

拓夢「期待が高いと、落胆も大きいから、余り、期待はしない方がいいよ。有名Pになれば、例えば、クソ曲を投稿して決まっても、名

恭介「二次元へのパスポートがここに！」

桜花「恭介は、私だけを見てればいいのよ」

桜花は不機嫌そうだ。

優希「楽しみです」

拓夢「そうだな」

結愛「ええ。興味あるわ」

光輝「日本の科学力は世界一い！」

雅功「では、システム作動だ」

雅功が、システムのスイッチを押す。

すると、周りが暗くなる。

そして、徐々に明るくなるが、他の生徒はいない。

ただ、1人だけ、恭介を見ている者を除けば。

恭介「……………」

「…………お前が対戦者か」

恭介「え、あ、はい」

準「この“万丈目準”が相手してやる」

恭介「凄い…これが、バーチャル・デュエル・システム……」

準「何を言っている。行くぞ！」

恭介「！」

恭介は、デュエルディスクをセットする。

恭介・準「決闘!!!」

浜田 恭介 万丈目 準 LP 4000 LP 4000

1ターン目。

準「ドロー、リバーズカードを2枚伏せモンスター召喚！【Xヘツド・キャノン】!!!」

X ヘツド・キャノン

ATK 1800

準「ターン終了！」

万丈目準

手札3枚

2ターン目。

恭介「ドロー！」

準「リバーズ罨発動！【オジャマトリオ】！！相手フィールドにオジャマトークンを3体フィールドに置く」

恭介「邪魔だな…リバーズカード1枚伏せモンスター召喚！【ムラマサ】！！」

ムラマサ

ATK 1800

準「邪魔なら破壊してやるぜ！リバーズ罨発動！【オジャマバースト】！！フィールドのオジャマと名の付くモンスターを全て破壊し破壊したオジャマカード1枚に付き俺は400ポイントライフを回復する。しかもオジャマトークンは破壊された時、1体に付き300のダメージを相手に与える」

恭介「くっターン終了！」

浜田 恭介 万丈目 準 LP 4000 LP 4000

LP 3100 LP 5200

浜田恭介
手札4枚

3ターン目。

準「ドロー、【Yドラゴン・ヘッド】を召喚！」

Y ドラゴン・ヘッド
ATK 1500

準「マグネット磁石融合！」

恭介「くっ」

XY ドラゴン・キャノン
ATK 2200

準「攻撃！」

恭介「【攻撃の無力化】を発動！攻撃は無効だ！！」

準「ちつターン終了！」

万丈目準
手札3枚

4ターン目。

恭介「ドロー、【西沢歩】を守備で召喚！さらに【ムラマサ】を守備表示に変更！ターン終了！！」

西沢歩

DEF 1000

ムラマサ

DEF 1600

浜田恭介
手札4枚

5ターン目。

準「ドロー、ふっ！【Z メタル・キャタピラー】を召喚！」

Z メタル・キャタピラー

ATK 1300

準「さらに【磁石解除】を発動！ユニオンモンスターが素材の融合を解除し、除外されている素材モンスターを特殊召喚！そしてマゲネット融合！！」

XYZ ドラゴン・キャノン

ATK 2800

恭介「……っ」

準「手札のカードを2枚捨てモンスター2体を破壊ッ！」

恭介「くっ」

準「ハイパーキャノン！」

恭介「ぐあああっ」

浜田 恭介

LP 3100

LP 300

準「万丈目サンダー伝説を見せてやる。俺は遊戯より強いってなあ」

恭介「……………」

準「ターン終了!」

万丈目準
手札0枚

6ターン目。

恭介「ドロ、【心変わり】を発動!」

準「なっ…おのれえ」

恭介「ハイパーキャノン!」

準「ぐあああっ」

万丈目 準

LP 5200

LP 2400

恭介「お前のモンスターを生贄に【ブラック・マジシャン・ガール】を召喚!

ブラック・マジシャン・ガール

ATK 2000

準「貴様あ！」

恭介「リバーズカード1枚伏せターン終了！」

浜田恭介

手札3枚

7ターン目。

準「ドロー、魔法カード発動！【マグネット・召喚】！！手札が0枚の時、墓地の融合モンスターをカード効果を無視し召喚！！」

XYZ ドラゴン・キャノン

ATK 2800

恭介「くっ」

準「さらに、効果で1枚ドローする。くくっ魔法カード発動！【天よりの宝札】！！互いに手札を6枚にし、そして魔法カード【マグネット・融合】を発動！手札の融合素材モンスターを除外し融合！！」

恭介「なあ！」

VW タイガー・カタパルト

ATK 2000

準「さらに2体をマグネット・融合！！」

VWXYZ ドラゴン・カタパルトキャノン
ATK 3000

恭介「なんだと！」

準「モンスター効果発動！モンスターを除外する！！」

恭介「くっ！」

準「ダイレクトアタックで終わりだア！」

恭介「うわああああ！」

恭介「リバーズ暴発動！【体力増強剤スーパーズ】！！相手から攻撃力2000以上受ける時、ライフを4000回復する」

浜田 恭介

LP 300

LP 4300

恭介「これでダメージを受けても1300ポイントにアップしたぜ
！」

浜田 恭介

LP 4300

LP 1300

準「くっターン終了！」

万丈目準
手札3枚

8ターン目。

恭介「ドロー、ふっ…いくぜ！【高町なのは】！！」

高町なのは

ATK 2000

準「小娘ごときに何が出来る」

恭介「くくつなのはの舌打ちが聴こえないか？」

準「なに……」

恭介「装備魔法【萌剣オタクソード】を装備し、攻撃力を1000ポイントアップする」

高町なのは

ATK 2000

ATK 3000

準「互角だと……」

恭介「まだまだ、【レイジングハート】を装備。1500ポイントアップだ」

高町なのは

ATK 3000

ATK 4500

準「なんだと！」

恭介「デイバインバスター!!!」

準「ぐああああああつ」

万丈目 準

LP 2400

LP 900

恭介「ターン終了！」

浜田恭介

手札3枚

9ターン目。

準「完璧な龍パーフェクト・ドラゴンを見せてやる」

恭介「何っ」

準「ドロー！魔法カード発動！【完璧な素材】!!!デッキよりランダムにモンスターを10体墓地に送り融合召喚!!!」

パーフェクト・ドラゴン
ATK 0

恭介「攻撃力0……!!」

準「確かに今は0だが、モンスターと戦闘する時、戦闘する相手モンスターの攻撃力を500ポイントアップした攻撃力となる」

恭介「なっ!!」

準「攻撃!パーフェクトバースト!!!!!!」

パーフェクト・ドラゴン

ATK 0

ATK 5000

恭介「ぐあああっ」

浜田 恭介

LP 1300

LP 800

準「完璧なモンスターだぜ!!」

恭介「くっ」

準「【パーフェクト・ドラゴン】は魔法・畏・効果では破壊されな
いぜ!ターン終了!!!!」

パーフェクト・ドラゴン

ATK 5000

ATK 0

万丈目準

手札3枚

10ターン目。

恭介「ドロー、リバーズカードを1枚伏せモンスター召喚！」

準「しかしこのモンスターに勝つなんて無理だぜ！ハハハ」

弓使いチエルシー

ATK 1500

恭介「チエルシーの効果を発動！このモンスターを破壊し自分はカードを6枚ドローする」

準「なんだと！」

恭介「ターン終了！」

浜田恭介

手札6枚

11ターン目。

準「ドロー（ちっ手札がわるい。モンスターがない…攻撃してもモンスターがないから意味無いか…）リバーズカードを1枚伏せターン終了！」

万丈目準

手札3枚

12ターン目。

恭介「ドロー、いくぜリバーズカード発動！【手札の修業】！！1ターン以上伏せられていたこのカードを破壊し手札のモンスター1体を特殊召喚する！！」

準「何っ」

星光の殲滅者

ATK 2000

準「むだだ！このモンスターには勝てないぜ！」

恭介「ふっリバーズカードを1枚伏せターン終了！」

浜田恭介

手札5枚

13ターン目。

準「ドロー、いくぞ！攻撃！！パーフェクトバースト！！！！」

パーフェクト・ドラゴン

ATK 0

ATK 3500

恭介「リバーズカード発動！【犬死】（いぬじに）！！手札を全て捨て相手モンスターの攻撃力を0にする！！」

準「無駄だあ！【パーフェクト・ドラゴン】の攻撃力をこのカード自身の効果以外に変動させる事など……」

パーフェクト・ドラゴン

ATK 3500

ATK 0

準「なんだと！」

恭介「リバーズ畏、【犬死】（いぬじに）はモンスター効果を無視するんだ！いくぜ！星光さんの反撃！塵も残さん！ルシフェリオンブレイカー！！」

準「ぐああああっ！」

恭介「俺の勝ちだ！」

万丈目 準

LP 900

LP 450

恭介「何っ」

準「速攻魔法【魂の契約】！モンスターが破壊された時、ライフを半減させ戦闘ダメージを無効にしさらに……」

恭介「あっあああ！」

命の欠片

ATK 3500

準「【命の欠片】を破壊されたら俺の負けとなる。しかし攻撃力は3500。破壊出来まい！さらに【命の欠片】で攻撃！！」

恭介「星光たんがあ！」

浜田 恭介

LP 800

LP 300

準「残念だが、与えるダメージは1000下がる。効果を無効にするけどな。リバーブスカードを2枚伏せターン終了！」

万丈目準

手札0枚

14ターン目。

浜田 恭介

万丈目

準LP

300

LP

450

恭介「ドロー、リバーズカードを1枚伏せモンスターを守備表示で
召喚！ターン終了……」

柊つかさ

守備力 1000

浜田恭介

手札4枚

15ターン目。

準「ドロー、【命の欠片】に魔法カード発動！【命の代償】！！ラ
イフを1だけ残り残りを【命の欠片】の攻撃力に加える」

恭介「くう……」

万丈目 準

LP 450

LP 1

命の欠片

ATK 3500

ATK 3949

準「さらにリバーズカード発動！【メテオストライク】！！これで
【命の欠片】は貫通能力を持つ。終わりだ！攻撃！！」

恭介「うああああっ」

浜田 恭介

LP 300

LP 0

恭介「リバーズ罨発動！【魂のリレー】！！よって手札よりモンスターを召喚！！」

真紅眼の黒竜

ATK 2400

万丈目

ふっりバーズ罨発動！【連撃】！！相手モンスターを破壊したモンスターはもう1度、攻撃が出来る。真紅眼を攻撃！！」

恭介「オタクリバーの効果発動！このカードを墓地に送り、モンスター破壊を無効にする。ダメージは喰らうが、ライフは0。意味はない！」

準「くっ」

万丈目準

手札0枚

16ターン目。

恭介「ドロー、魔法カード発動！黒炎弾！相手プレイヤーに2400ポイントのダメージを与える！！」

準「無駄だ。【命の欠片】が有る限り、あらゆるダメージは0になる」

恭介「リバーズカードを1枚伏せターン終了！」

浜田恭介

手札1枚

17ターン目。

準「ドロー、終わりだ！真紅眼に攻撃！！」

恭介「リバーズカード発動！【ドラゴンの威圧】！！ドラゴン族が自分のフィールドにいる時、攻撃を無効にする！！」

準「ターン終了！」

万丈目準

手札1枚

18ターン目。

恭介「ドロー、いくぜ！魔法カード発動！【黒弾の炎】！！真紅眼の攻撃力を2400ポイントアップする！！」

準「なっ！」

真紅眼の黒竜

ATK 2400

ATK 4800

準「くっ」

命の欠片

ATK 3949

恭介「黒炎弾！」

準「がはあああああああああああああああ！」

恭介「【命の欠片】は消滅、さらにライフポイントも0、俺の勝ちだ！」

準「なっああ……」

万丈目 準

LP 1

LP 0

万丈目が消えていく。

そして、周りに生徒が見えていく。

雅功「全員、決闘が終わったようだな。勝率は3割だった。これは低い。アニメのデッキなどに負けるなど怠けている証拠だ！」

桜花「恭介、勝った？」

恭介「もちろん」

雅功「ああ、学祭で戦う2人は、勝った中から決める。勝った奴は、楽しみにしてるんだな」

因みに、恭介たちは全員、勝つたらしい。

その頃、uploadした楽曲は10万再生を越えていた。

Episode 2 - Chapter 11 - (後書き)

今回の1枚

西沢歩

レベル4

属性地

ATK1600 DEF1000

効果

なし

Episode 2 - Chapter 12 - (前書き)

第018話

地文を多目に使ってみたが、大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない

優希「ううっ。こ、今度こそ……もう我慢できませんっ……！」

そう言っつて、自らの下腹部に手を添える釘宮優希。

緊迫感が、淡い痛みとなって襲いかかっているのかもしれない。

恭介「今すぐ、楽になっちゃって良いっつてば」

友達とはいえ、女の子を自分の部屋に連れ込んだ挙げ句あまりにも追い詰めすぎたかと反省し、恭介は内心の高揚を悟られぬよう素っ気なく告げる。

優希「で、でも……。せつかく恭介さんのお相手をさせて頂いてるのに……」

しかし、健気な少女は頑なに辛抱を選び続けるのだった。

まったく、恭介の欲求を満たしてくれようとするのは恭介にとってとても嬉しいけど、これじゃきつと身体にも良くない。

このあと2人は、学校で授業だつて受けなくてはならないのに。

恭介「そうか……。なら、もう少し増やしてみよう」

優希「ふえっ!?!」

仕方が無いので方針変更。

恭介は僅かに指先を動かすと、優希はびくりと肩を揺らし、恐れおののいたように濡れた瞳で上目遣いを向けた。

優希「も、もうこんなにたくさんなのに……もっと、なんですか……!?!」

恭介「うん、ここまで来たら、いけるところまでいってみようかなって」

無慈悲な宣言。

唇をきつく結び言葉を失う優希。

そして、ようやく。

優希「も、もう無理ですうっ!わ、私………おります!」

全てを諦め脱力して、右手で握りしめていた5枚のトランプをはらりて卓上に落とした。

恭介「うわ、スリーカードか。危なかったなー」

恭介が見ればそこには、3枚のエースが揃っている。

なるほど、どうりでなかなか諦めずチップを上積みにつき合ってくれたわけだと恭介は納得する。

優希「き、恭介さんは……?」

恭介「えーと。あはは、ごめん」

促され、恭介も抱えていた手札をオープン。

なんの役も揃っていない、いわゆるブタの5枚を。

優希「そ、そんなぁ……」

へなへなと突つ伏す優希に対し、ハツタリで騙した申し訳なさと、無性に可愛いなと思ってしまふ気持ちが内心で同時に膨らみ、恭介はつい苦笑を漏らしてしまった。

恭介「でも、ありがとな。付き合ってくれて」

恭介は素直に、優希に礼を述べる。

優希「い、いえ……」

優希は控え目に、恭介の礼を受け取った。

恭介「この『Angel Beats!』のトランプで、一度、遊んでみたかったんだ」

そう言うと、恭介はさっきまで優希とポーカーしていたトランプを集めてゆりと天使が描かれているケースにトランプをしまふ。

そして、物入れを開け、トランプを入れる。

恭介「さ、早くしないと遅刻しちゃうな。行こうか」

恭介は、優希に部屋を出るように促す。

優希「は、はい。そうですね……」

優希はそれに従い、恭介の部屋を出て、恭介を待つ。

恭介「……………」

恭介も部屋を出て、自分の部屋の扉に鍵を閉める。

優希「?…:…どうしましたか?」

恭介「え!?!」

気付いたら、恭介は優希を見つめていた。

勿論、可愛いと言うのもあるが、誰が優希をイジメているのか、それを考えていたら、意識せず、優希を見つめていたのだ。

恭介「なんでもない。さ、教室に行かないと、本当に遅刻しちゃう」

優希「そ、そうですね。行きましようなのです」

恭介「……………」

教室へ向かう優希の半歩後ろから、恭介は優希の背中を見つめていた。

優希は、イジメられていないと言っし、恭介も優希がイジメられている所を見たことはない。

拓夢も、そんな噂を聞いただけで、実際にその目で見たことはない。

だから、謎なのだ。

勿論、イジメが表だって行われているなんて、当然思っていない。

見守るだけでいいのか。

問い詰めてでも、聞き出すべきなのかと、恭介は考えた。

もしかしたら、屋上でタバコを吸っているのも、イジメのストレスからなのかと恭介は思った。

そんなことを考えているうちに、教室に辿り着いてしまった。

優希「では、また」

そう言つて、優希は自分の席へと向かう。

恭介「ああ」

恭介も、優希に返事をして自分の席へと向かった。

桜花「おはよう恭介」

恭介「おはよう」

桜花の挨拶に、恭介が返す。

桜花の席は、恭介の後ろなのだ。

香菜「…その……、おはよう……」

隣から、恭介に向かって小さな声が聞こえてきた。

恭介「ああ、おはよう香菜ちゃん」

香菜「にやふっ……！」

香菜の顔が赤くなる。

そして。

香菜「ふんっ！」

恭介「えっ!？」

なぜか、恭介は怒られてしまった。

桜花には、簡単に理由が分かったけど、恭介には分からなかった。

その時、チャイムがなる。

そして、同時に教室の扉が開き、担任の雅功先生が入ってきた。

雅功「いよいよ明日は、学祭だ。…まあ、明日は羽根を休めることを許可しよう。だが、今日は許さない。みっちり、授業する」

そう、明日は学祭。

だが、他の学校とは違い、生徒は何の準備もしていない。

全て、業者が行ってくれるのだ。

雅功「いい忘れてたな。明日の、決闘する2人だが、1人目は、緑

川悠斗だ」

生徒の視線が悠斗に向かう。

悠斗「……………」

だが、悠斗は微動だにしない。

まるで、最初から結果を知っていたかのように。

雅功「2人目だが、浜田恭介。お前になった」

恭介「俺!?!」

驚いて、声を出してしまふ恭介。

桜花「凄い。流石、恭介ね。頑張ってるね」

香菜「ふん。が、頑張りなさいよね!」

後ろと隣から、応援の声が聞こえる。

雅功「言っただけだ。勝った奴から選ぶと。まあ、なぜお前たちがは知らん。選んだのは担当の晋也だからな」

恭介「悠斗……………」

再び、悠斗と戦うことになってしまった恭介。

でも、今まで勝ってたんだから、また勝てると自分を奮いたたせる恭

介だった。

雅功「さて、授業を始める。結愛、【強欲な壺】について答えろ」
名前を言われて、結愛は席を立ち、答える。

結愛「ええーとお。通常魔法カードでえ、効果はあ、自分のデッキからあ、カードを2枚い、ドローですう」

あざといしゃべり方だが、周りの男子は「萌え」とか「可愛い」とか言っている。

流石は、休業中とはいえアイドルと思う恭介。

結愛「にやはは」

顔には出さず、心の中で、「ウザッ」と呟いた結愛は席に座る。

雅功「正解だ」

こうして、時間が過ぎていく。

気付けば、放課後となっていた。

桜花「さ、帰ろ?」

桜花が、恭介に話し掛ける。

恭介「ああ」

雅功「待て」

2人が、教室に出ようとした時、雅功先生がそれを止めた。

雅功「分かっていると思うが、タイムリミットは明日だ。つまり、今日か明日、桜花を殺しに非現実的な地球外生物が、お前を殺そうとしている。話を聞く限りでは直接ではなく、決闘で殺されるこの話だが、何度も言うが、気よ付ける。何かあったらすぐに俺に言え。いいな」

そう言うと、雅功先生は、教室を出ていった。

桜花「私のせいで……」

恭介「桜花のせいじゃない」

香菜「そうよ。桜花のせいではないわ」

香菜が、話に入ってきて、桜花を慰める。

桜花「…ありがとう」

理緒「…少し、いいですか?」

3人が振り向くと、理緒と由衣が立っていた。

香菜「なに?もとを辿れば全てあんなたちのせいじゃない!その元凶さんがなんのよう!?!」

香菜は明らかに、敵意を剥き出しにしている。

由衣「そんな……。僕たちのせいじゃないよ！あれはバグなんだって！」

香菜「そのバグを作る原因はあんたたちでしょ！」

香菜が突っかかる。

理緒「否定はしません。確かに、欠陥品が生まれてしまったのは私たちに原因があります。ですので、話があるのです」

恭介「何かな？」

恭介は、香菜とは違い冷静だった。勿論、心を許している訳ではない。

理緒「可笑しいと思いませんか？」

恭介「何が？」

理緒「恭介たちが、欠陥品である紗友里と戦った時、他の容疑者である4人も闇を見ました。なぜ4人は口外してないのです」

香菜「それは、口外しないって約束したからでしょ！」

理緒「そうです。ですが、考えて下さい。闇の決闘の後、4人は居ません」

恭介「た、確かに……。見たはずなのに……。見た？何で一緒にいない理緒ちゃんが知ってるの!？」

恭介が、驚きと困惑した口調で理緒を聞く。

理緒「私たちはいつでも、恭介、あなたの命を狙っています。忘れないでください」

由衣「忘れるなよー」

そう言うと、理緒と由衣は教室を出ていった。

桜花「確かに、あの時は困惑して、そんなことに頭回らなかったけど、だとしたら……………」

恭介「ああ、あの4人もバグだ」

香菜「なら、今から行くぞぜ！」

恭介「ああ、拓夢と光輝に連絡する。桜花は優希と結愛と一緒に、学園を離れててくれ」

桜花「でも……………」

桜花が、心配するような視線を恭介に送る。

恭介「…俺を信じろ」

恭介は、桜花を目を見る。

桜花「…分かった。気よつけてね」

桜花は教室を出ていく。

恭介「決戦は深夜、寮にいるときを狙う。9時に女子寮前に集合してくれ」

香菜「うん」

あつという間に過ぎていき、気が付けば、夜の9時。

壁陽学園に門限はない。

だから、深夜カラオケに行く生徒や、合コンに行く奴もいる。

だが、大抵9時なら、寮にいる。

ましてや、1年生ならば。

女子寮前に、恭介、拓夢、光輝、香菜の姿があった。

拓夢「女子寮に入るなんて、背徳を感じるね」

光輝「寧ろ、スリル？」

恭介「捕まれば、退学かもしれないね」

香菜「案内するわ。付いてきて」

香菜の案内で、男3人は夜の女子寮に足を踏み入れる。

高校生で、9時に寝ている奴など少ない。

部屋から聞こえるのは、テレビの音、女の子の声、さらにはシャワ

ーの音もする。

男3人は、香菜の指示のもと、見つからないように廊下を進む。
背徳とスリルと恐怖が、男たちを襲う。

光輝「俺、退学にはなりたくないぜ」

拓夢「安心しろ、いざとなったから、お前を身代わりにする」

光輝「それはないぜ！」

恭介「語尾にコレ付ける。恐怖が、和らぐ」

そう言うと、恭介は光輝に耳打ちをする。

光輝「それはないぜ！それと便座カバー」

拓夢「プッ」

恭介「クッ」

笑いを耐える2人。

香菜「遊んでないの！…着いたわよ」

拓夢「別の意味で、バレるかと思った」

光輝「言わせたの、コイツな」

恭介「ロリロリバスターズ！ミッション開始だ！！」

拓夢「くう」

光輝「うう」

必死に笑いを耐える。

香菜「…殴っていい？」

恭介・拓夢・光輝「ごめんなさい」

4人は、どうにか誰にもバレず、入ることが出来た。

相談して、恭介は綾。拓夢は武人。光輝は紘。香菜は静の部屋に行くこと決めた。

そして、それぞれ持ち場について、部屋をノックする。

「はい」

声が聞こえた。

光輝は違和感を感じた。

扉が開く。

紘「何かよう？」

扉が開いて、違和感は確信へと変わった。

そう。

下野紘。

光輝のターゲットだ。

だが、考えてほしい。

ここは女子寮だ。

なぜ、男子が女子寮に居るのか。

女子に呼ばれた訳ではない。

こここの部屋に住んでいるのだ。

光輝「なんで……ここは女子寮だろっ！」

思わず、叫んでしまった。

でも、そのくらい動転してしまったのだ。

紘「…ふはは。よく見破ったな。見破った以上、返すわけには行かない」

紘がそう言うと、闇が2人を包み出す。

闇の中には、暗闇が広がっている。

果てなど見えない。

ただ、対戦相手が目の前にいるだけ。

紘「喰らってやる」

光輝「闇に消えるのは貴様だあ！」

光輝・紘「決闘!!」

大野 光輝 下野 紘

LP 4000 LP 4000

光輝「俺からだ!ドロー!!」

1ターン目。

光輝「リバーズカードを1枚伏せ【タンクロイド】を召喚!さらに効果で【F1ロイド】を特殊召喚!!」

タンクロイド

ATK 2000

F1ロイド

ATK 2500

光輝「【タンクロイド】は召喚に成功した時、デッキからロイドと名の付くモンスターが1体をフィールドに出せる。ターンエンドだ」

大野光輝

手札4枚

2ターン目。

紘「デッキから特殊召喚か……ドロー、俺は【ライフエル】を守備表示で召喚する」

ライフエル

DEF 1400

紘「リバーズカードを1枚伏せターンエンドだ」

下野紘

手札4枚

3ターン目。

光輝「ドロー、【スターロイド】を召喚！そしてロイドと名の付くモンスターが召喚された時、効果で手札から【ジャックロイド】を特殊召喚！！」

スターロイド

ATK 2000

ジャックロイド

ATK 2000

光輝「【ジャックロイド】で攻撃！」

紘「このカードが破壊された時、ライフを1000回復し手札からモンスターを特殊召喚する」

カードエル

DEF 1400

下野 紘

LP 4000

LP 5000

光輝「【スターロイド】で攻撃！」

絃「効果でデッキからカードを1枚手札に加える。さらに手札からモンスターを特殊召喚する」

デッドエル

DEF 1400

光輝「【タンクロイド】で攻撃！」

絃「効果で相手モンスター1体を破壊する。【F1ロイド】を破壊する」

光輝「くっ……………」

絃「さらにモンスターを特殊召喚する」

チューナーバイク

DEF 800

光輝「ターンエンド！」

浜田祥基

手札3枚

4ターン目。

絃「ドロー、リバーズカード発動！【チューナー・シンクロ】！！

フィールドのチューナーモンスターをリリースしシンクロ召喚を行う！！」

光輝「なんだと！」

紘「破滅の力、此処に混沌の破壊をもたらせ！シンクロ召喚！！デストロイドラゴン！！」

デストロイドラゴン

ATK 3000

紘「カード効果により手札に加えたこのカードを発動する。装備魔法【リリースアタック】！手札を全て捨て、捨てたカードの枚数分、攻撃回数が増える。捨てたカードは2枚。よって、攻撃回数は3回だ！！」

光輝「3000の3回攻撃だと！！」

紘「くらいやがれ！デストロイバースト！！」

光輝「リバーカード【サイバー・バリア】！バトルフェイズを終了させる！！」

紘「くくくつモンスター効果、バトルフェイズ中の魔法、罾カードの発動と効果を無効にする！」

光輝「なにっ！ぐあああああッ！！」

紘「どうだ！」

光輝「ぐあつ……………！」

大野 光輝

LP 4000

LP 1000

紘「ターンエンドだ」

下野紘

手札0枚

5ターン目。

光輝「俺のターン！ドロー！！」

紘「3回を耐える壁を作れるかな？」

光輝「（ダメだ……………足りない。あのカードさえ、来れば……………）」

紘「どうする？あはは」

光輝「モンスターをセットする」

大野光輝

手札3枚

6ターン目。

紘「ドロー、ふふつ俺の勝ちだ！【守備封じ】！！…」

光輝「なあ！」

シヨートロイド

ATK 300

紘「終わりだ！デストロイバースト！！」

光輝「ぐああああああっ！！」

光輝「ふっ……………」

大野 光輝

LP 1000

紘「なにっ！」

光輝「【シヨートロイド】が破壊されたターンの戦闘ダメージを受けない！」

紘「ターンエンドだ」

下野紘

手札0枚

7ターン目。

光輝「この引きに全てがかかっている……………ドロー！」

紘「どうだ？」

光輝「魔法カード【融合】！」

サイバーロボットJAPAN

ATK 2100

紘「足りないな、攻撃力が」

光輝「見せてやる！俺の奇跡のドロークカードを！！フィールド魔法【古代科学世界】！！」

紘「なんだと！」

サイバーロボットJAPAN

ATK 2100

ATK 3100

光輝「効果により、攻撃時、攻撃力が劣る場合、1000ポイントアップして攻撃！」

紘「ぐあっ！」

下野 紘

LP 5000

LP 4900

光輝「効果により、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

紘「ぐああああああ！」

下野 紘

LP 4900

LP 1900

紘「この装備カードが破壊された時、互いにカードを1枚引く」

光輝「リバーカードを1枚伏せターンエンドだ」

大野光輝

手札0枚

8ターン目。

紘「殺してやる………ドロー！魔法カード【死者蘇生】！！」

デストロイドラゴン

ATK 3000

紘「デストロイバースト！」

光輝「なあ！」

紘「こちらからの攻撃なら攻撃力は上がらない！」

光輝「ぐあああああああ！」

大野 光輝

LP 1000

LP 1000

紘「終わりだ！魔法カード【強者の威厳】！！相手モンスターを破壊したモンスターはエンドフェイズに攻撃力を半分にし攻撃が出来る！！！」

光輝「なんだと！」

紘「死ぬ！デストロイバースト！！！」

デストロイドドラゴン

ATK 3000

ATK 1500

光輝「リバーズカード【リベンジ・デスデュエル】！墓地のモンスターを蘇生し強制的にバトルを行う！！！」

サイバーロボットJAPAN

ATK 2100

紘「ば、バカな！」

光輝「エンドフェイズなら、畏カードを発動できる。喰らえ！」

紘「がああああっ！」

下野 紘

LP 1900

LP 1300

光輝「モンスター効果発動！」

下野 紘

LP 1300

LP 0

紘「クズ風情がああああ！！」

紘は闇とともに消えた。

光輝「……………勝った。…みんな！」

その後、全員勝利しことが分かった。

そして、日付が変わる。

「くくくつ何をしようが無駄だ。今日、目的は達成される。くくくつその為に、悠斗を引き込んだのだ。恭介と戦うように仕組みさえした。くくくつ恭介などどうでもいい。だが、恭介さえいなければ、桜花殺害など、朝飯前。くくくつ」

笑い声が響き渡る。

Episode 2 - Chapter 12 - (後書き)

今回の1枚

サイバーロボットJAPAN

レベル6 属性光

ATK2100 DEF2000

効果

このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える

Episode 2 - Chapter 13 - (前書き)

第019話

響き渡る旋律

始まった学祭。

それは、死への手招き。

本来、楽しい筈の、楽しくあるはずの学祭は、地獄へのサイン。

人は動かなくなり、代わりに血が舞い踊る。

狂おしく。

悲鳴とともに。

学祭当日。

10時30分。

学祭が始まりを迎えた。

結愛「賑やかだね」

光輝「パーティーだからね」

香菜「こんな楽しい学祭を邪魔なんかさせないんだから」

恭介「ああ」

拓夢「昼から有名なピアニストのピアノ演奏があるらしい」

結愛「ピアノ演奏か」

香菜「じゃ、昼まで自由行動にしない？見張りは先生がしてるし、大丈夫じゃない？」

光輝「そうだね、学祭だけあってほとんどの先生が来ている」

拓夢「……………つまり、違う所は無防備ということだな」

桜花「みんな、ありがとう」

優希「で、でも危ないから、会場内だけね」

恭介たちは昼まで自由行動となった。

メイン会場は一般的な学校の体育館の5倍の大きさを誇る。

生徒も沢山居る。

この中に、もうすぐ起こる被害者と加害者もいる。

だが、誰も気付かない。

当たり前だ。

居て、当たり前の人なのだから……………。

11時14分。

恭介たちが食事や話に夢中になってる頃

雅功「……………」

人志「……………」

雅功と人志が向き合い、立っていた。

哲平「今度、教えてあげるよ」

哲平も笑いながら話しをしていた。

晋也「……………」

晋也は、トイレで手を洗っていた。

校長「みんな、楽しそうだな……………何もなければいいが……………」

校長は、生徒の姿を見ていた。

時は流れ、12時00分。

ピアニストによる、ピアノ演奏が始まる時間だ。

恭介たちは、約束のとおり集まって、ピアノ演奏を聞こうとしていた。

「集まって頂いてありがとうございます。私はピアニストの“谷口智樹”と言います。今から引く曲は有名ではないのですが、個人的に好きな曲です。届かない思いを叶えるために頑張りを綴った曲なので、少しでも感じてもらえたから幸いです。では、聞いてください

い
」

演奏が始まる。

優しい音色。

風景が見える程の旋律。

こんな曲を知らなかったなんてと後悔する程、いい曲だ。

眼を閉じ、曲に聴き入る恭介。

だが、突然の不協和音。

突然の悲鳴。

智樹「ぐあああああっ！」

倒れる智樹。

その手が再び鍵盤を弾くことはなかった。

遂に起きてしまった殺人事件。

今までとは違う。

周りに生徒が居る中で起きてしまった。

今までは、学園は殺人事件を隠蔽していた。
故にバレなかった。

だが、今回は違う。

赤い液体が、口から流れている。

悲鳴、失神、錯乱。

ピアノを聞いていなかった者も、集まりだし次第に状況を把握していく。

約700人を超えるの生徒たち。

脅え、パーティー会場を逃げ出すものもいる。

この学園は、広い。

東京大学全ての面積位の大きさがある。

バグが何処にいるか分からない状況で、1人になるのは自殺行為。

恭介は近くにいた先生に怒鳴り気味に喋った。

恭介「先生っ！早くっ！1人にさせるのは危険だっ！」

雅功「ああ！」

時間は進み

6時。

ようやく、混乱も治まってきた。

怯えて気絶した生徒もいるが、大半は寮に戻っている。

恭介たちは、ゲストルームを見て、パーティー会場に戻ってきた。

あんなに賑やかだったパーティー会場は今は、肅然としている。

結愛「やっと、終息してきたわね」

香菜「だけど、この事態をどうするの？」

優希「警察に連絡したほうが……」

拓夢「人間じゃない奴が殺した……魔法や超能力など信じるものもいるが、日本は科学の国だ。非現実的な魔法や超能力など信じるはずが無い」

校長「やはり……犯人を探すしかないのか……」

桜花「私のせいで……」

恭介「そうだ、奴等の本当の目的は桜花だ。つまり、これは前座……」

人志「監視カメラの映像を見ようじゃないか」

晋也「それが、得策だろう」

哲平「では、持ってこよう」

哲平は、監視室にビデオを取りに行く。

光輝「ん？なにこれ？」

光輝は指を指した。

恭介「これは……」

死者の最期の抵抗。

血文字

優希「最期の力を振り絞り、何か書いたんですね……」

死体は指で何かの文字を書いていた。

香菜「なんだろう？」

その時、哲平が戻ってきた。

哲平「持ってきたよ」

雅功「よし、再生しろ」

再生される。

谷口智樹の演説。

そして、演奏。

そして、5分後に智輝は苦しみだして倒れる。

そして、死。

騒めきが起きる。

だが、死体に触る者はいなかった。

ピアニスト、智樹の登場から死まで、誰も触れてはいない。

恭介「……つまり、このパーティー会場にくる前に毒を飲まされ死んだ、でいいのだろうか」

校長「パーティー会場に来る前は控え室にいただろう。パーティー会場から右に進んだ所にあるゲスト控え室。ルーム02を使用していた」

恭介「今日、被害者以外でその部屋に入ったのは？」

校長「ちょうど、我々だ。挨拶をな、時間はそれぞれ違ったがな」

拓夢「詳しく教えてください」

恭介たちは、詳しく聞いた。

結愛「つまりい整理するとお」

つまり、こうだ。

10時30分に被害者が学園に到着。

10時45分、被害者がゲストルーム02に入る。

10時52分、校長がゲストルーム02に入る。

11時08分、哲平がゲストルーム02に入る。

11時26分、人志がゲストルーム02に入る。

11時30分、雅功がゲストルーム02に入る。

11時41分、晋也がゲストルーム02に入る。

雅功「みんな、挨拶しにいったただだから1分くらいで退室している。教諭の浜だけです、くらいな感じですね」

香菜「最後に入ったのは晋也先生ですね」

晋也「ああ……だが、殺してはいない」

光輝「まあ、事前に毒を仕込んでいた可能性もあるしね」

拓夢「自殺の可能性もあるね」

恭介「自殺……カメラは？」

雅功「ゲストルームにあるわけないだろう。個人のプライベートだぞ」

結愛「じゃあ、先生たちにアリバイはないね。証拠がないんじゃない、あ、全員グルの可能性もあるしね」

晋也「…ゲストルームの通路の監視カメラに映ってるはずだ」

結愛「確かに…でも、グルという疑惑は消せないわ」

校長「…確かにそうだ。我々は容疑者だな」

恭介「やはり、事件を解く鍵は被害者が死の間際に残したダイイングメッセージしかないな」

ダイイングメッセージは被害者、智樹が犯人を示した唯一無二の手掛かり。

拓夢「犯人の工作の可能性はないから純粹にダイイングメッセージは犯人を示す手掛かりだな」

優希「そ、そうですね」

光輝「ダイイングメッセージは、『S』と書かれているね」

拓夢「『S』が犯人を示すなら、ローマ字で最初に『S』が付く人物。つまり『SHINYA』だ。晋也先生が犯人だろ。最後に部屋に入っているし決まりだな」

晋也「違う！俺は殺していないっ！」

優希「…名字にも名前にも、『S』が付くのは晋也先生以外にはいない……」

犯人は晋也。

そんな思考が全員を巡る。

晋也が必死に否定しても、その言葉を信じられない。

晋也はバグ。

その考えだけが、頭の中で結論を出す。

哲平「お前が……いままで騙っていたのかッ！」

晋也「違うッ！信じてくれ！俺はずっと学祭を楽しみにしてたんだ！お前が面白くなるからって言うから、対戦者を恭介と悠斗にした
だろう？」

恭介「……………」

拓夢「決まりだな」

結愛「犯人は貴方です先生！」

雅功「晋也ッ！貴様かアッ！」

恭介「……………いや……………違う……………」

光輝「えっ？」

恭介「晋也先生、挨拶に行った時の挨拶の言葉を言ってください」

晋也「えっ……ああ……上田です、今日はよろしくお願いします。
……こんな感じだ」

恭介「やはり、ほとんどの先生は名字しか言わなかったのじゃない
か？雅功先生みたいに」

校長「確かに」

人志「そうだ」

哲平「確かに、名字しか言わなかった」

恭介「なら、被害者が『晋也』と言つ名を知るはずが無い」

桜花「確かに……じゃあ、『S』は何？」

恭介「『S』じゃない。被害者は途中で生き絶えたんだ。つまり、
ダイニングメッセージは『S』ではなく、『8』と書きたかったん
だ」

香菜「『8』？」

恭介「そうだ。つまり、『8分』に挨拶に行った哲平先生、貴方が
犯人だッ！」

哲平「なっ！何を言っているッ！」

拓夢「……………」

恭介「証拠はあるんだ」

哲平「なんだとッ！」

恭介「挨拶に行く時、先生は果物を手にしている。毒はそれに入っている」

哲平「果物なら、晋也先生も持っていつてるじゃないか！」

恭介「確かに……でもゲストルームには、果物は晋也先生のしかなかった。つまり、哲平先生の果物しか被害者は食べていない。つまり、毒を持ち込んだのは哲平先生だッ！」

哲平「……はは……あっはははははは！」

人志「貴様ッ！」

哲平「あっはははははははは！流石だよ、そう、俺が闇の長、有田哲平！」

恭介「貴様が長ッ！」

哲平

そっだ……なあ、悠斗」

悠斗が姿を現す。

悠斗「ああ、そっだ」

恭介「悠斗ッ！」

哲平「見せしめという楽しみは終わりだ。桜花を殺してやるよッ！」

雅功「貴様に俺の生徒を殺させはしないッ！」

哲平「なら、貴様から葬ってやる」

闇が包む。

恭介「先生ッ！」

雅功「大丈夫だッ！」

哲平「決闘だ」

LP	LP
4000	4000

1ターン目。

雅功「ドロ、【ダークホースギラング】を召喚！」

ダークホースギラング

ATK 1950

雅功「リバーズカードを1枚伏せターンエンドだ！」

浜田雅功

手札4枚

2ターン目。

哲平「ドロー、【ガイバ】を召喚する」

ガイバ

ATK 2000

哲平「攻撃だ」

雅功「リバーズカード【収縮】！」

ガイバ

ATK 2000

ATK 1000

雅功「ギガフレイム！！」

哲平「ぐっ……」

雅功「モンスター効果発動！相手モンスターを破壊した時、このカードをリリースし手札のモンスターを特殊召喚する！！」

暗黒の闇龍

ATK 3000

哲平「……………」

有田哲平

手札5枚

3ターン目。

雅功「くらえ！ダークネスフレイム！！」

哲平「ぐはっ……………」

雅功「貴様など俺の敵ではない！」

哲平「……………」

LP	LP
4000	50

雅功「ターンエンド」

浜田雅功

手札5枚

4ターン目。

哲平「ドロー、フィールド魔法【漆黒城】！」

雅功「……………」

哲平「効果により、闇属性のモンスターは、リリースがいらなくなり、特殊召喚扱いで召喚できる」

LP 3900

光輝「先生！」

香菜「先生……」

雅功「ぐっ……」

哲平「ダークネスソード……」

雅功「ぐあああっ……」

浜田 雅功

LP 3900

LP 900

拓夢「先生！」

優希「先生……」

雅功「まだだ、まだ、そんな程度では俺は負けん……」

哲平「あっはははははは！なら、くらえ……」

雅功「あああっ……」

浜田 雅功

LP 900

LP 100

桜花「先生！」

雅功「ムダだ……闇は、決して勝てない。貴様等闇は、敗北しかない！」

哲平「なら、闇に敗北しろ！ダイレクトアタック！」

雅功「があああっ！！」

浜田 雅功

LP 100

LP 0

恭介「先生！」

雅功「闇は光を飲み込むことは出来ない……光で闇を照らせ……」

雅功が消える。

闇の中へ。

恭介「先生の言葉は確かに心に刻みました」

哲平「あっはははははは」

恭介「貴様ッ！俺と決闘しろ！！」

哲平「もちろんしてあげるよ。だが、貴様の相手は悠斗だ」

悠斗「くくっ」

恭介「拓斗……」

哲平「君たちが戦うように仕向けたが、意味なかったようだ。だって、こうして学祭が中止になっても、戦う運命なのだから」

哲平の笑いが闇の中で響き渡る。

Episode 2 - Chapter 13 - (後書き)

今回の1枚

漆黒城

フィールド魔法

効果

闇属性モンスターは、手札から特殊召喚できる

Episode 2 - Chapter 14 - (前書き)

第020話

残光

遂に判明したバグの頭。

だが、哲平は悠斗を闇に引きずり込んでいた。

恭介たちの声は悠斗には届かない。

闇に隠れている、本当の悠斗の心に突き刺さる事の出来る光はあるのか。

哲平「邪魔なイレギュラーは退場してもらおうか」

哲平がそういうと、校長や他の先生が消えた。

哲平「邪魔物は要らない」

結愛「か、身体が！」

光輝「消えていく……!!」

優希「たすけ……」

拓夢「っ！受けとれ恭介!!」

拓夢は、自分のデッキを恭介へ投げる。

4人が闇の中から消える。

恭介は、拓夢のデツキをキヤツチする。

恭介「消えたみんなをもとに戻せ！」

哲平「闇に消えた人間が、再び戻ることは不可能だ。人間は誰しも心に闇を持っている。その闇は決して消えない、倒せない」

恭介「なら、闇の根源である貴様を倒す！」

哲平「俺を倒すなら、まず悠斗を倒してみろ」

悠斗「恭介……貴様を殺す」

恭介「悠斗っ……なんで！」

悠斗「貴様さえ居なければ……貴様さえっ！」

悠斗の身体が闇に包まれる。

恭介「……………」

悠斗「祥基い決闘だア！」

恭介「くっ……誰がやるものか！」

桜花「恭介……………」

恭介「桜花！」

哲平「決闘しろ……………しなければ……………」

香菜「きゃああああっ!!」

香菜が闇に包まれ、消える。

恭介「香菜!」

哲平「決闘しなければ次はこいつが消えることになるぞ」

桜花は哲平に捕らえられている。

恭介「くっ……やるしかないのか……」

悠斗「くくくっヒヤハハ!」

恭介「……………」

悠斗「決闘ッ!!」

浜田 恭介 緑川 悠斗

LP 4000 LP 4000

悠斗「ヒヤハハハ」

1ターン目。

悠斗「ドロー、俺は【ダークフレイムスピア】を召喚!」

ダークフレイムスピア

ATK 1900

悠斗「そして永続魔法【復讐の業火】を発動だ！発動時に相手に500ポイントのダメージを与える……！」

恭介「ぐっ」

浜田 恭介

LP 4000

LP 3500

悠斗「リバーズカードを1枚伏せターンエンドだ」

緑川悠斗

手札3枚

2ターン目。

恭介「ドロー、俺はリバーズカードを1枚伏せる。さらに魔法カード【地割れ】！」

悠斗「ちっ」

恭介「【アリス】を召喚！」

アリス

ATK 2000

悠斗「テイルズ……」

恭介「拓夢……力を借りるぞ！【アリス】には【デクス】が付き従
う」

デクス

ATK 2500

恭介「攻撃！」

悠斗「うぐあっ！」

緑川 悠斗

LP 4000

LP 2000

恭介「悠斗……」

哲平「くくっ決闘を続けよ」

悠斗「貴様が嫌い！嫌いッ！！」

恭介「悠斗……」

哲平「さあ、早くッ！！」

恭介「っ……攻撃！！」

悠斗「がはっ！があっ！！」

緑川 悠斗

LP 2000

LP 1

恭介「なっ……！」

悠斗「【復讐の業火】がある限り、俺のライフが0になることはない」

恭介「ターンエンド」

浜田恭介

手札3枚

3ターン目。

悠斗「ドロー、俺は【復讐の剣士ライオ】を召喚！」

復讐の剣士ライオ

ATK 0

悠斗「効果により、受けたダメージ分、攻撃力を上げる！」

恭介「なんだと！」

復讐の剣士ライオ

ATK 0

ATK 4500

悠斗「攻撃イイイイ!!」

恭介「ぐああああっ!!」

浜田 恭介

LP 3500

LP 1500

恭介「(【デクス】は【アリス】が攻撃対象になった時、攻撃対象を【デクス】に変更する。よって、ダメージは500ポイント守れたわけだけど、状況はかなり不利だ……)」

悠斗「ターンエンドだ」

緑川悠斗

手札3枚

4ターン目。

恭介「ドロー、俺は【アリス】を守備表示にする」

アリス

DEF 1200

悠斗「【デクス】の効果で生き残ったサドは今、耐えることしか出来ない。滑稽だな」

恭介「ターンエンドだ」

浜田恭介
手札3枚

5ターン目。

悠斗「ドローツ！俺は【執念剣】を召喚」

執念剣

ATK 1600

恭介「くっ……！」

悠斗「攻撃！」

恭介「くっ！」

悠斗「このモンスターの攻撃は貫通する！」

浜田 恭介

LP 1500

LP 1100

悠斗「死ねえ！ダイレクトアタック！！」

恭介「！！！！！」

悠斗「砕けるっ！」

恭介「リバーズカード【守備自衛隊】！自分フィールドにモンスター

ーがない時、攻撃を無効にし攻撃モンスターを破壊する!!」

悠斗「ちっ…ターンエンドだ」

緑川悠斗

手札3枚

6ターン目。

恭介「ドロー、俺はモンスターを召喚する!」

高町なのは

ATK 2000

悠斗「出たな…このクズが!」

恭介「攻撃!!」

悠斗「ぐっ…だが、ライフに影響はない」

恭介「リバーズカードを1枚伏せターンエンド」

浜田恭介

手札2枚

7ターン目。

悠斗「ドロー、リバーズカードを発動する。【ツインスター】!」

恭介「なにっ!」

悠斗「このカードは、永続魔法を破壊するカードだ。そして、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

恭介「ぐあああつ！」

浜田 恭介

LP 1100

LP 100

悠斗「魔法カード【復讐の怨念】を発動する。墓地に【復讐の業火】がある時、自分のライフを1000ポイント回復する」

緑川 悠斗

LP 1

LP 1001

悠斗「【怨念の槍】を召喚！」

怨念の槍

ATK 1500

悠斗「デッキの一番上のカードを1枚捨てる事で、相手モンスターの攻撃力を1000ポイント下げる！」

恭介「なんだと！」

高町なのは

ATK 2000

ATK 1000

悠斗「終わりだア！ヘルランスブレイカー！！」

恭介「リバーズカード【オタク守護隊】！このカードは、萌えカードへの攻撃を無効にして、相手モンスターを破壊する！！」

悠斗「なにい！」

恭介「どうだ！」

悠斗「まだだ！魔法カード【壊れ果てたルール】！！魔法カードにより、モンスターが破壊されたターンに発動出来る！！ライフを半分支払い、デッキからモンスターを1体、特殊召喚する！！」

緑川 悠斗

LP 1001

LP 500

悠斗「現われよ！！」

青眼の白龍

ATK 3000

瞳を黒く染めた青眼が現れる。

悠斗「闇を見せてやる。【フォース】を発動！モンスターの攻撃力

を相手のライフポイント分上げる!!」

青眼の白龍

ATK 3000

ATK 3100

悠斗「【フォース】を発動したターン、エンドフェイズにバトルを行う!!」

恭介「なにっ!!」

悠斗「死ねえ! 攻撃!!」

恭介「があああああっ!!」

浜田 恭介

LP 100

LP 0

悠斗「勝った! 勝ったア!!」

哲平「よくやった」

桜花「恭介!」

恭介「まだだ」

悠斗「なに」

恭介「手札から罫カード【歪められた真実】を墓地に送り、次のお前のターンまで、ライフが尽きての敗北を無効にする」

悠斗「なんだとっ！」

青眼の白龍

ATK 3100

ATK 2500

悠斗「くっ……【フォース】の効果によって、攻撃力を600ダウンする。だが、次のターンには終わりだ」

緑川悠斗

手札0枚

8ターン目。

恭介「……………」

悠斗「残されたこのターンで、何が出来る！」

恭介「俺はお前を救う！カードよ、応えてくれ！！ドロー！！！」

悠斗「救う？ならば死ねッ！」

恭介「魔法カード【強欲な壺】！2枚ドローする！！！」

悠斗「ムダだア！」

恭介「【カイバーマン】召喚！」

カイバーマン

ATK 200

悠斗「200で何が出来る!!」

恭介「モンスター効果、このカードをリリースし、【青眼の白龍】を特殊召喚する!!」

悠斗「なんだと!!」

青眼の白龍

ATK 3000

恭介「悠斗！貴様には見えるか!!青眼の瞳が悲しんでるのがッ!!」

悠斗「まさか、そのカードはッ!!」

恭介「そう、貴様のカードだ！」

悠斗「何故……」

恭介「【オタク守護隊】は、効果が成立した時、相手のデッキから1枚カードを自分のデッキに入れる事ができるのだ」

悠斗「なん……だと……」

恭介「拓斗！青眼の嘆き、想い、心に響かせてやる！！」

悠斗「うっ！！」

青眼の眼光が、悠斗をとらえる。

恭介「滅びのバーストストリーム！！！！！！！！」

悠斗「うあああああああっ！！！！」

緑川 悠斗

LP 500

LP 0

青眼の瞳が悠斗を見つめる。

悠斗「……………」

悠斗の瞳に、青眼が映り込む。

悠斗「あっあああ……………」

恭介「拓斗！！」

悠斗「あっあああ……………」

恭介「拓斗！！」

悠斗「青眼……………ごめんな……………」

悠斗が闇に消えた。

青眼も、悠斗が消えるのを待ってから消えた。

哲平「使えぬ駒め」

恭介「哲平！決闘しろ！！」

哲平「いいだろう。やはり、この俺自ら、相手をしてやろう。桜花」

桜花「あんたに名前と呼ばれる筋合いはないわ」

哲平「2人纏めてかかってこい」

恭介「後悔するぜ」

哲平「目的を果たすのは簡単だ。だからリスクを負わないとな。くくく。2対1なら少しは楽しめるだろう」

桜花「みんなの仇を取る！」

哲平「ああ、その意気だ。本気のお前らを殺してこそ心は癒される。目的を果たし終止符をうってやる」

恭介・桜花・哲平「決闘！！！！」

Episode 2 - Chapter 14 - (後書き)

今回の1枚

アリス

レベル4 属性氷

ATK 2000 DEF 1200

効果

このカードが召喚・特殊召喚した時に、手札又はデッキに存在する「デクス」を1枚特殊召喚できる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942u/>

遊戯王-Tales of Life-

2011年10月9日08時50分発行